

現代と恋愛

九折空也

はじめに

恋

愛レクチャー集の vol2.です。なぜわざわざ「レクチャー」と呼ぶかというと、あなたの負担を減らすためでした。これは一般講義であって議論ではありません。僕はあなたの考える負担を減らすためにレクチャーという形式を採るのです。

今回のレクチャーは九つの講義を含む予定ですが、長いものも短いものもあります。あなたはそれらを、何も気にせず駆け抜けてください。あなたはディズニーランドの入口でまごまごしたりしません。ゲートがオープンしたらうきうきしてどんどん歩いていくはずです。物事を体験し、理解し、知見を構築するのに、じっくりいくということは必ずしも優れた方法ではありません。

実際、三十分もあれば一通り読めてしまうのではないのでしょうか？ あなたが奇妙なこだわりやつまづきを途中でしない限りは。あなたは「現代と恋愛」について、一時間後にはもう、今この瞬間に考えているぼんやりしたこととまったく違うことを知識に構築しています。その構築された知識は、これからあなたが進む先を決めるときに新しい焦点を与えてくれます。あなたは旅行に出るとき、ひたすらのんびりした旅行もいいですが、はっきりとした焦点を持って旅に出ることも、やはり好まれるのではありませんか。

まずお約束しておきます。本講義の中に、むつかしい話は出てきません。むつかしい熟語や単語も出てきません。もしフリガナ無しには読めない漢字があったとしても、それらは読み飛ばしてかまいません。それでも全体の構造があなたには受け取られるように、本講義は構成されています。

それでいて、あなたの生きるのにまったく関係の無い話であるとかは、一切出てきません。すべて、今日この瞬間にもあなた自身に関わることのみを、講義にしてあります。ひとつ盛り上がる話をしますとこうです。あなたは毎日何かを楽しみにして生きています。中にはどうしてもいい程度の楽しみもあり、一方には、かけがえの無い楽しみもあります。あるいは、かけがえの無い楽しみがあることを祈って、日々生きています。

あなたはその楽しみについては詳しく考えますが、「なぜそれが自分にとって楽しいと感ぜられるのか」という、自分自身の仕組みについてまでは詳しくご存知ありません。今回の講義はそれをあなたにお話しするので。出来る限りキーワードは絞る必要がありました。今回は、「脳」というキーワードを用いて、全ての話そこを括（く）りつけてあります。

「なぜ楽しいのか」ということの解明は、あなたがこっそり悩むことがある、「なぜ楽しくないのか」ということにも重なっています。あるいは、かつて楽しかったものが、なぜ今は楽しくなくなったのか、ということにも。あなたはより明るく楽しい未来へ向かいたいはずですが、であれば、その楽しさの仕組みをより精密に知っているということは、あなたにとって有利なはずですが。

それでは前置きは以上にして、あなたは本講義を駆け抜けてください。今、誰もがですが、「現代」というこの時代に、不穏な違和感を覚えています。あなたもその違和感をご存知のはず。それでタイトルは「現代と恋愛」です。どうすればその不穏な違和感とは無縁の、恋愛を含めた未来にゆけるものなのか。そのことについての明瞭な理解が、これから一時間後のあなたには与えられています。あなたの目的はそれを獲得することのみです。議論に向かう気持ちで舌なめずりすることはあなたの目的ではありません。買物のときのレジ会計が「さっさと済めばよい」としか思えない、あのナチュラルさで、あなたもこれをさっさと済ませてください。さっさと済ませてしまっても、ちゃんと品物は手元に残っています。

ではお楽しみください。

2013年6月8日 九折空也

第一講

IT技術は情報量を減らした



脳の立場になって考える

海辺に立ってぼうっとすることをイメージしてみてください。そこには何の情報も得られないような気がしています。ですが、あなたの情報処理をする器官である「脳」の立場になって考えてみてください。本当に何の情報も得られていないでしょうか。

そんなことはないのです。実は脳は豊かな情報を得ています。海の景色、海の色、潮騒の音、風の匂い、海風の肌にあたる感触、日の当たって肌の熱くなる感触。足元は砂浜で、足はその独特の感触を受け取っています。ニャニャとウミネコが鳴いている声が聞こえますし、あなたの耳と脳は、それが空高くで鳴いている声だということをちゃんと聞き取っています。唇を舐めるとすでに少し塩辛いかもしれません。その塩味だって情報です。また自分の身体がそこに立っているという感触自体も大きな情報になります。

IT革命というのがあり、実際スマートホンや携帯電話で、人人が手にする情報は増えたと思われています。けれどそれは錯覚に過ぎません。あなたの「脳」という立場から考えれば、そんなIT機器から得られる情報というのはごくごくみじめなものに過ぎないのです。

何も情報が無いかに見える海辺に立つ、その生身の体験は、実はスマートホンで熱心にネットサーフィンをすることに比べ、おそらく一兆倍ぐらいの情報量を持っています。それが本当のことなのです。「脳」の立場に立てばそうなのですが、あなたの"自意識"はそのことに気づきにくいのです。



I T化のみじめな限界

動画サイトからmp3音源をダウンロードしてきて音楽を聴く。それがIT革命の実態です。詳しい方なら、そこにビットレートという、kbpsという単位が付属していることもご存知でしょう。CDは1411kbpsで、mp3はたとえば128kbpsなどになります。この数値はサンプリングレートや圧縮といったことに関係があります。

でも、その「ダウンロードしてきて再生する」という一連の工程が、実際にどのような作業によって成り立つのかということを、はっきり知っている人は多くありません。それはたいして難しい話でもないので、あなたはその作業工程をおおよそ知っている人になることができます。最も簡単な捉え方は、「再生」をするためには、先に「収録」が要するという事です。収録したレコードがなければその再生はできないわけですから。

では改めてお話しします。あなたが「海辺にぼうっと立ったとき」の体験を、もしIT化しようとしたらどうなるか？ それはもう、おそろしいほどの工程になるのです。

まず、録音にはマイクがいるように、情報をデータ化するためには、まず情報を電子信号に変換する装置が要ります。マイクは空気の振動を電気信号に変える装置です。あなたの海辺の体験を収録するためには、機器はマイクだけでは足りません。全方位を録画できる3Dカメラでまず光の情報を電気信号化しないといけない。風に混じるにおいに変化するのを電気信号化する装置も要ります。唇にあるわずかな塩味を電気信

号化する装置も必要ですし、何よりあなたの全身の肌が受ける風の感触や足元の砂の感覚を電気信号化する無数のセンサーが必要になります。

これらの電気信号は微弱なものですから、電氣的に増幅します（アンプリファイといいます）。ただし、絶対にノイズが混ざらないように増幅しないとイケない。増幅したら、今度はその情報を「レコーダー」に記録しないとイケない。情報量は膨大になりますから、毎秒あたりブルーレイディスク一万枚分を記録できる、というような機器が必要でしょう。

それをレコードしたら、今度はデータをデジタル化しないとイケないので、サンプリングという電子的作業をします。これで例えば、「海辺の体験」というディスクみたいなものがようやく出来上がります。何千万枚のブルーレイディスクに、あなたの数分間の体験がようやくサンプリングされた、というような状態です。

でも今度は、この巨大なディスク情報を、素早く読み取れる「プレイヤー」が要ります。プレイヤーが、サンプリングされた情報をアナログデータにして出力するのです。ただ、これもまた微弱なので、電氣的増幅させねばならない。ノイズの混ざらないように。

そして、一番厄介なことですが、その出力されたデータを人に届けるためには、人と機器をつなぐインターフェイスというのが要るのです。その代表はヘッドホンなどですね。PCやスマートホンのモニターもそうです。PCだって、箱の中で電気信号がチカチカしているだけでは人に届きません。人に伝えるためにはインターフェイスが必要になりますので、あなたの体験した海辺のとおり体験を再生するためには、空間丸ごとのインターフェイスを作るか、もしくは全身の皮膚にくまなく装着する数十万個の端末みたいなものが必要になるのです。

それでようやく、それでも擬似的にですが、あなたの体験した「海辺」を、IT化して再生することができるようになります。

どうでしょうか、これは馬鹿馬鹿しいことだと思いませんか。足の裏に無数の端末をつけて、「砂を踏んでいる感触がする！」と。……それならもう、足元に砂を敷いたらどうだ？ と言われかねません。

実際こんなことは技術的にまだまだ不可能なのです。実現するのはもう何百年先のことになるか。人類にはついに不可能なことかもしれません。これが次世代のスマートホンなのだとしたら、もうサイズが一つの大工場ぐらいの大きさになります。月額利用料がいくらになるか。まして持ち運ぶことはできませんし、今のネット回線ではデータのダウンロードに何年掛かるかわかったものではありません。

IT革命が情報量を増やしたというのは錯覚に過ぎないのです。少なくとも、あなたの「脳」が受け取る情報量ということに関しては。それでもなおITの情報量を信仰する人には、「じゃあ海辺の体験をダウンロードして見せてよ」と言えば一撃です。



I IT技術で授受できる情報量はゼロと言ってもいい

先ほど、脳が受け取る情報量について、スマートホンのそれに比べたら、生身の体験は一兆倍ぐらいの情報量があると言いました。これは嘘ではありません。情報工学を専門にしている人に聞いても同じことを言うでしょう。

端末から得られる情報が、生身に比して一兆分の一しかないのだとしたら、これはもうゼロと言って差し支えありません。これをぜひあなたの新しい知見として持ち帰ってください。あなたの「脳」の立場に立つての話です。「IT技術で授受できる情報量はゼロ」。これは意見ではなくサイエンスの話です。どう説明されるのかについてはもう、あなた自身で説明できるようになられたはず。 「情報って、生身に浴びる全てが脳にとっては情報ですよ？」と。

I T革命とは情報「数」の革命である

ではIT革命とは一体何であったのか？ 今もそれぞれの手元にある端末が、確かに情報をくれるような気がしている、このことの正体は一体何なのでしょう。

それは実は、情報「量」ではなく、情報「数」なのです。情報量としてはゼロに等しいような情報を、無数に与えてくれること。それがIT革命の正体でした。

我々は時に、その情報量としてゼロのような情報を必要とします。たとえば終電の時刻は何時だったか、というようなことについて。情報としては数バイトしかないようなその情報を、我々は時に必要とします。

そういう、量的にゼロである情報を、速やかに送受信できるということについて、IT端末は極めて優秀です。その点は、旧来の方法をまったく寄せ付けません。この海辺の住所は？ というようなことを検索させたら、IT技術は何よりも早くて低コストです。

そして我々は、そのような情報だからこそ、それを得るのに時間やコストを掛けたくなかったのです。つまり、デートを中断して、駅まで走って終電の時刻を確認しに行くというようなことをしたくなかった。

それでIT革命はもてはやされ、今も手放せないものになっています。

ITとはインフォメーション・テクノロジーのことです。ここ近年で人類は、「車を速く走らせる」というようなことより、情報をどう電子的に扱うか、ということに、テクノロジーの努力を向けてきたのでした。そのことの恩恵に確かに我々は浴しています。

ただ、それによって、我々の「脳」が、情報を豊かに与えられるようになったかという、そうではなかった。情報「数」の革命は、我々の脳に砂粒のような情報を無数に与えます。ですが、コース料理に砂粒のような料理が100品出てきても、それは満腹を与えてくれません。脳は無数に「味見」をさせられていますが、ずっと何も食わずにきています。

それではやがて脳の機能が変質してしまいます……そのことについて、次の講義でしっかりお話することができると思います。

おまけ、もし脳が直接ネットに接続できたら？

人間の脳を直接ネットに接続する、そして自己人格ごとと電腦世界に「ダイブする」というような設定が、最近のSFにはとても多いです。もちろんそれはSFなのでとやかく言うことではないのですが、もし仮に、今のインターネットにそんなことをしたらどうなるのでしょうか。そこには広大な世界が広がっていますが、やはりそこには砂粒のような情報が無数に散らばっているだけになります。残念ながら。

それは先にお話したように、そもそも再生する元としての、「収録」されたデータが、ウェブ上には存在しないからです。写真のように平面的に撮影されたものが、電腦世界の中から見れば立体に見えるかという見えません。元々の収録が2Dなので、サンプリングデータも2Dデータです。

脳を直接ネットにつなげたら、何があるかといえば、インターフェイスが要らなくなる、というだけです。

モニターやヘッドホンが要らなくなるというだけです。マウスやキーボードも要らなくなりますね。脳が直接なので、検索機能はとてつもなく速いということになります。

でもそれは、すさまじい物知り、すさまじいクイズ王、みたいになるだけで、あるいはすさまじい計算の速さになるだけで、何があるかといえば何もありません。すごく退屈しているすごい物知り、になるだけです。何一つをも体験したことの無い物知りです。世界中のありとあらゆる技術論を知っている一方で、幼稚園児の遠足の引率が出来るとか出来ないというような無能者に仕上がってしまいます。

SFのように電腦世界に「ダイブ」してさえ、そんな程度なのです。じゃあ、モニターを覗き込んでいたからって、得られる情報量が多いわけがありません。

コンテンツとして、他のユーザーも脳を直接ネットにつなげばどうか……というような、本末転倒を考えてはなりません。それを言うなら、もう人の脳と脳を直接つなげばいい。わざわざインターネットを媒介させる必要はありません。

インターネットと言いますけれども……たとえばあなたの家のPCは何か「すごい」ものですか。そうでもないと思います。旅行の写真や動画、ちらほらと日記や課題のレポートが保存されているだけではないでしょうか。そしてインターネットというのは、それらの個々のPCをネットワークとして接続しているだけでしかないのです。それで何かすごいことになるというのは錯覚です。便利になるだけで。エッチな画像を収集するPCと、大学教授の論文を保存するPCとが、国境を越えてネットワーク接続されているだけです。ちなみに言えば、僕のウェブサイトだって元は僕の家にあるPCにあるのです。かといって僕のPCを覗かれるのはアレなので、公共に覗けるサーバーPCを借りてそこにコピーを預けているだけです。

IT、つまり情報の電子化ということが、本当に「すごい」ことになるためには、まず「収録」のテクノロジーが進化することが必要です。それで最近では3Dの撮影があったり、人間の耳で聞くように録音されるバイノーラル録音というものが一般化してきました。とはいえ、まだ目と耳だけですし、目と目でもそれは、人間の目のようにパッと見たところに自分の焦点を合わせられる、というようなものではありません。だから3Dというのも擬似3Dでしかないですし、バイノーラル録音と言ったって、音の鳴るほうをパッと見る、というようなことはできません。それらは夢のある技術ですから、これからの進化が期待されますが、いかにもまだまだ、これからずっと先のことになるようです。

あ

てこれで第一講はおしまいです。いかがでしょうか、ごく簡単な話だったと思います。簡単な話なのですが、指摘されないとなかなか気づかないようなことだと思います。

この先に続く講義についても、あなたは自分の「脳」の立場に立つことを忘れないようにしてください。あなたは普段その発想に慣れていません。慣れていませんが、あなたには必ず脳という器官があるのですし、またその器官の機能について、あなたは本当にはまったくよく知ってはいないのです。

たとえばあなたの部屋のドアを、僕が蹴飛ばしたとしましょう。バン！ と音が鳴り、あなたは部屋の中でびっくりします。ドアのほうを振り返り、「誰？」と恐怖する。

ですが、なぜあなたは、そのバン！ という音について、「その方向に音が鳴り」「その音には危機の可能性が含まれていて」「誰かがドアを蹴った音だ」「恐怖すべきだ」「誰何(すいか)すべきだ」ということが、瞬間的にわかったのでしょうか？

あなたが考えてのことではないはずです。あなたが考えるまでもなく、脳が瞬間的に判断しているのです。バン！ という音と、その周囲全ての情報を一括して、「誰？」と誰何するところまで結びつけています。そんなとんでもない高性能を、日常的に発揮しているのですが、発揮していることには意外に人は気づか

いのです。

そしてまかり間違っても、そんな高度な判断を出来るコンピューターは存在しません。バン！ という音で「誰？」と誰何するコンピューターは、地震のときにも「誰？」と聞きます。テレビで誰かが机を蹴飛ばした音にも「誰？」と聞くでしょう。アホですね。結局、人間の脳のように、大量の情報を扱えてはいないのです。

ではでは、簡単な話でしたし、きっとそれなりに面白味のある話だったと思います。ではこのまま第二講に進んでください。あなたの脳はこの程度のことはまったくへばったりしません。へばるとしたらあなたの自意識のほうだけです。

第二講

「頭が弱くなる」時代

さ

て第二講が始まります。少し先の講義の復習をしましょう。「脳の立場になって考える」ということでした。確認のためにひとつ例え話をします。

たとえば台風が直撃した夜に、玄関先に出てみます。すると空におそろしい風鳴りがしています。低い黒雲がねじれながら飛んでいく。吹き飛んでくる砂塵、頬に当たる痛いほどの雨滴。押し倒されそうになる風があり、肺がウツと詰まって呼吸が止められてしまったりもする。ドタンバタンと、頼りなくて壊れそうなバラックの小屋。なぎ倒される自転車。狂暴な熱帯低気圧の匂いと、温度と、その湿度。それらを一気に身に浴びたあなたは、もう何か怖くなって、急いで家に戻って行くかもしれません。

一方、スマートホンで台風情報を調べます。風速は〇メートル、中心気圧は〇ヘクトパスカル、進路は北北東で、時速〇キロ。

これら両方の情報を比べて、脳に与えられる情報「量」が多いのはどちらだ、という話でした。いわずもがな、生身を台風直撃された側に決まっています。比べて、端末からピピッと操作で得られる情報などというのは、脳の体験する情報「量」としては、砂粒みたいなもの、実質ゼロと言ってよい、ということでした。IT革命というのは、その砂粒のような情報を、すばやく、「無数」に、扱うことのできる、情報「数」の革命だということでした。

では、その砂粒情報にとっても優秀なIT端末ですが、これを使い込むことで人間はどうなるのでしょうか。それについてのお話が、この第二講になります。では駆け抜けてください。



パ

ケット情報と全体的情報

二つの造語を持ち込むことを許してください。砂粒のような情報を「パケット情報」と呼びます。パケットとは「小分け」のことです。それに対比して、身に浴びるように体験することで得られる生まの情報を、「全体的情報」と呼ぶことにします。

人間の脳はそもそも、全体的情報を取ることはできません。たとえば熱いスープを飲むのに、「熱さ」と「味」を分離して飲むことはできません。その他、香りや見た目や舌触りや、合わせてスプーンの感触なども、人間の脳は分離して吸い上げることができない。

もしその分離が可能なら、「誰が歌っても名曲は名曲」ということになってしまいます。音程と歌詞さえ間違えていなければ、でも実際にはそんなことはなくて、虫の好かない歌手が歌えば名曲も台無しになります。

人間の脳は「全体的情報」しか取ることができず、その情報を後に自意識が分類しています。熱いスープについて、これは「味」、これは「香り」、これは「熱さ」だ、というふうに。でもそれは自意識の仕事であって、脳の仕事ではないのです。

一方でパケット情報について。これらは小分けされた情報で、IT端末でもやりとりできるほど小さく小分けにされています。

そして、先ほどの全体的情報の性質とは逆に、今度はそもそもが小分けのものを、なんとか一つにできないか、ということが試みられます。簡単に言うと、潮騒の音をスピーカーで鳴らしながら、壁に海のポスターを貼り、アクアマリンのお香でも焚いて、そこを「海っぽくできないか?」とするようなことです。

もちろんそれで自室が海になったりはしません。海のイメージ、みたいなものしか手に入りません。

パケット化された情報はこのように、「組み立て」をして、一つの全体的情報に出来ないか、ということを目指すのですが、まず出来ないものだ、ということを知っておいてください。

重要な、正確なことを、お話ししておきましょう。海のポスターを貼り、お香を焚き、潮騒の音を再生したとして、それで海のイメージが得られるというのは、誤解です。それは、海ということの元の体験、生身の体験が過去にあるから、そこに海を"思い出せる"というだけです。元々海に行ったことの無い人には何のことやらわかりません。実は組み立てが功を奏しているのではなく、組み立てによって元の全体的情報を思い出しているだけなのです。もし元の全体的情報がなければ、潮騒は「何かの音」であり、ポスターは「何かの写真」であり、お香は「何かの香り」でしかありません。



脳

は情報飢餓に陥る

「全体的情報」は、「パケット情報」に比べて、一兆倍の情報量があります。前回お話ししたとおりです。

そして人間の脳は、その巨大なほうの情報をそのまま受け取り、処理できる器官です。だからこそ、部屋のドアをバン！ と蹴られたときにも、とっさに「誰?」と恐怖することができるのでした。同じバン！ という音でも、廊下に立ててあったスキー板が倒れた音なら、「誰?」とは聞きません。脳が瞬間的に音を識別し、状況判断をしているのです。

脳は本来、それだけの情報量を処理できるのに、そこに情報量を与えないでいると、脳は情報に対する飢餓状態に陥ります。人間がIT端末に「没頭」しているとき、実は脳は飢餓状態になっているのです。

人間の、たとえば足腰の場合、使わないでいると次第に弱っていきます。最終的には「寝たきり」になってしまいます。一度寝たきりになってしまうと、これはおおよそ回復しないものだ、と、覚悟しなくてはなりません。足が動くにしても、歩くという機能が回復しない。だからこそ「寝たきり」と言います。そうならないためには、足腰の本来の機能である、体重を乗せて歩くというようなことを、足腰にさせなくてはなりません。

同じことが人間の脳にもあります。人間の脳も、その本来の機能である全体的情報の処理を、させていないと、次第に弱っていき、最終的には寝たきりの脳になります。脳が動かないわけではないのですが、本来の機能が果たせなくなります。そして寝たきりというのはおおよそ回復しないのでした。そうならないためにはやはり本来の機能を脳に果たさせていないといけません。

歩かないと足腰が「弱くなる」といいます。それと同じように、すでに我々は、「頭が弱い」という一般的な表現を知っています。そしてその表現は、「頭が悪い」ということとは、慎重に使い分けられている。

怪しげな宗教の勧誘が来たのに、こちらの頭が悪すぎたために、「話がわからん、帰れ!」という場合、それは頭は悪いのですが、頭が弱いではありませんでした。一方で、神秘主義に関わる文献に詳しくて、怪しげな宗教に引っかかるような人は、頭は良いのですが、頭が弱いのです。

この「頭が弱い」ということは、脳が弱くなることとぴったり重なります。

そのことはまた以降に解説されますので、この段ではひとまず一つのことだけあなたは確実に掴み取ってください。あなたがパケット情報に没頭しているとき、あなたの脳は情報飢餓に陥っています。



ケット情報は自意識を発達させる

さてでは、なぜそのケット情報などに、人間は没頭してしまうのでしょうか？ ここまで、ケット情報は情報量としてゼロで、率直に言えばカスだとかゴミだとか指摘しています。にもかかわらず、なぜ人がそれに没頭してしまうのかなのですが、これについてあなたは、単純明快な知見を得てゆかれるべきです。

- ・全体的情報は"脳"に入る
- ・ケット情報は"自意識"に入る

こういうことなのです。ケット情報に没頭しているとき、脳は飢餓状態なのですが、自意識のほうは、酒池肉林というよな興奮状態になるのです。だから人はこれに没頭してしまいます。

あなたの家に犬や猫がいたとして、その犬と猫は、あなたの家でテレビをまったく見ないのではないのでしょうか。あれだけ、動き回るものが好きなのは猫が、テレビの映像が動き回ることにはまったく無関心です。なぜなのだろう、と考えられたことが、誰でも一度はあると思います。

それは、犬や猫といった動物にはほとんど"自意識"が無く、脳しか機能していないため、ケット化された情報を受け取る機能が無いのです。犬や猫の目からは、テレビなどというものは、何か知らない、チカチカ光る板だというふうにはしか見えていません。テレビモニタそのものがごそごそ動くのであれば興味を持ちますが、本体はじっとしているものなので犬猫は興味を持ちません。

あなたのスマートホンだってそうなのです。我々は自意識を持っているため、そこに表示されるケット情報に引き込まれてしまいますが、あなたの脳だって実は、それを四角くて鈍く光る板としか感じ取っていません。ケット情報を受け取っているのは自意識であり、脳はそれを受け取っていないのです。だから前回の講義で、「IT端末から得られる情報量はゼロ」と申し上げたのでした。あくまで脳の立場に立つて、と。

四角く光る板を何時間も見つめているだけという、脳が、どれだけ退屈してもらえるか、わかってもらえるとします。なお、動物が自意識をほとんど持たないのは、動物が言語を持っていないからです。これ以上はむづかしくなるので話せませんが、どうやら自意識は言語の所有を基にして発生しています。

脳が情報飢餓になれば、脳は弱っていくと申し上げました。一方で、自意識はケット情報を酒池肉林に与えられるのですから、自意識のほうは発達してゆきます。

これによって、現代の人間は、「頭が弱く」「自意識は発達している」という、旧来の精神バランスと違うものになっていくのです。

現代と恋愛というタイトルでお話しさせていただいています。まだ焦って話すことではないですが、ここで差し当たり言えることは、現代の人間がそのように変質していくなら、もっとも直接な話、「あなたは、頭が弱くて、代わりに自意識は発達している人と、交際しなくてはならない」ということになります。これについて、さあどうだ、ということ、現代人は見つめないといけないし、答えなくてはならない。

もちろんこんなことは誰にとっても不本意です。誰だって、「あなたは頭が弱くて代わりに自意識ばかり発達しているね」と言われるのを、褒め言葉とは受け取れません。とはいえ、これは唾を吐いて終わりにできることではない。これを実際どうするかという問いかけに向かうための、正しい知見の土台になりうるよう、本講義集が書かれています。

とはいえ差し当たり、この段では、あなたは間違いようのないことを獲得してください。全体的情報は脳に入り、ケット情報は自意識に入ります。そしてケット情報だけ与えられると、頭が弱くなる一方、自意識だけが発達してゆきます。



ケット専門人の誕生

それで実際に、脳が弱くなってしまったとしましょう。いくら望ましくなくても、そうなってしまったとしましょう。

では、そうして弱くなってしまった脳に、あえて全体的情報を与えると、どうなるのでしょうか？ それは当然、処理できなくなります。寝たきりの人を無理やり立たせたとて、転倒するしかないように、弱くなってしまった脳も、今さら全体的情報を処理はできません。どうなるかという、脳はもう混乱するしかありません。せいぜい、その全体的情報の中から、無理やりパケット情報をつまみ出すぐらいしかできなくなります。

あえて説明の簡略のために、節度のない言い方をすることを許してください。寝たきりの人のことを、立てない人・歩行ができない人と捉える代わりに、「寝ころび専門の人」と捉えることも可能なはずですが。どうかこのことが、やむなく伏臥されている方に対する侮辱と誤解されることのないように願っています。さて論理上はそう言い得るように、全体的情報を処理できなくなった人のことを、パケット専門の人、と捉えることも可能であるはずですが。脳が寝たきりになり、代わりに自意識ばかりが発達する、その自意識でパケット情報を楽しむことだけを専門にするというような人が、現代には誕生する仕組みがあります。

実際そのような人はすでに散見されています。それもきつと、一般の想像を超えた程度に、その特徴を顕現させている人が、実はすでにいるのです。驚いたことに、彼の部屋のドアをバン！と蹴っても、彼はあまりびっくりしないのです。ドアが蹴られているという音に現実感が無く、当人にじっくり来ていない。それは一見、極端に落ち着いた人に見えますが、本当にはそうではなかった。

彼は頭が悪いわけではなく、自意識における知能は高い場合もある。それによって、ときにナチュラルに、「全体性って何ですか？」ということ、真剣にわからないといった様子で訊くことがあります。

(※以下、少しむづかしい話を挟みますので、読み飛ばされても結構です)

(彼はゲシュタルト(全体性)の機能を失っており、彼が飲む熱いスープは、果たしてどのような感触で飲まれているのか、それはクオリア問題なのでわかりません。ただこのことについて、思春期に限っては、誰でもこのような状態に一時的に陥ることはあるようです。思春期は人格形成において壮絶な時期で、特に自意識が急激に発達する時期なので、自意識側の機能ばかりが過熱し、一時的に全体的情報の処理機能が落ちこぼれることがどうやらある。これは医学的な知見でなく経験論なので責任あることとしては言えませんが、思春期にそのような状態に陥ることがもしあっても、成熟と共に次第に健全な状態に回復していくようです。ただしそのような時期により自意識を刺激するパケット情報端末を誰もが持っているということのリスクは十分にシリアスと言える程度潜在していると言われるべきです。)



「頭

が弱い」ということ

脳が弱ってしまい、パケット情報しか処理できなくなるとどうなってしまうか。このことは簡単に例が出せませすし、あなたにも心当たりがあると思います。

たとえば、いかがわしい商売に勧誘されたときなど。彼らは口先では、「いかにも儲かりますよ」という、上手いことを言いますが、しょせん悪徳商法です。見ず知らずの他人が儲け話を持ってくるわけがない。儲け話がもしあったら、彼が一人で独占しているでしょう。そんなことはもう言わずもがなのことです。

脳は全体的情報としてそのようなことも含めて判断します。例えばそういうセールスが家に来た場合、「儲け話があったら自分で独占するだろ」というのもそうですし、「実際歩き回ってこの人はヘトヘトじゃないか」というのも情報として脳は受け取っています。そして笑顔の不自然さや、決して本当のところには近づいてこようとしてこない距離感、自信を持っていない人の顔つき、何か肝心なことを隠して話さない人の目の動き。必要以上に信頼されようとしている話し方。暗記してある文言を話すだけの口調。やけにこちらの気配をうかがい、何かダメならさっさと逃げようというような及び腰の感触。あるいは、こちらの訊くことなど本当には無視して、暗記されたセールストークだけを言うように決めている不自然な話の脈絡。

どう考えたって、自信のある商品を売りに来たセールスマンではありえません。そうなると、もう自意識のほうは、一応向こうの話にフンフン頷いていますが、内容はもうまったく聞いていない。内心では、「お前をどう見たってリッチには見えないけどな」という、哀れみしかありません。「確かに顔はイケメンだけれど、こいつを信じるといこうに無理がある」と。そうしてこちらが呆れ返っていると、さすがに向こうにも経験があるので、さっさと引き取ります。むしろこっちが「いや、もういいわ」と言うと、いっそ助かったというような気配で帰っていきます。

ところが、脳による全体的情報の処理ができていないと、なんだかんだで話を聞いてしまい、その話をパケット情報として処理するため、「あれ、本当に儲かるかも」という気がしてきってしまうのです。向こうもプロなので、パケット情報としてはいかにも儲かるように聞こえるよう、工夫してあります。

悪徳商法の彼らが持ってくるお話は、いっそ「すばらしいお話」というべきです。すばらしいお話だからこそ、だまされる人はだまされてしまう。ただこちらの脳が機能している分には、「すばらしいお話だけど、要らない」となります。欲しいのはすばらしい収入であって、すばらしいお話ではないのですから。

悪徳商法に騙されるような人は、そういうのに騙されてはいけませんよ、ということは、テレビで聞いて知っているのですが、騙されてしまいます。彼らはテレビの言うことを真に受けて、同時に、セールスの言うことも真に受けるのでした。

このように話せば他人事に聞こえて気楽ですが、同じようなことが恋愛でもあります。全体的情報としては、明らかに不誠実にしか見えない男性が、女性に「大切にするから」みたいなことを言うと、コロッと行ってしまう女性がいるのです。そのノロケ話を聞かされるこちらは、閉口し、「いかにも彼が言いそうなことだな」「そんなセリフを思いつきで言えるとは相当不誠実な奴だな」としか思えないのですが、彼女はそのセリフのパケット情報を重視しています。

それで（すぐ）後になって、「裏切られた！」というふうになる。「他に女がいたの！」と。こちらは思わず、「いやそうじゃなくて、お前が他の女だろ、彼にとって」「他に女がいた、って、それ一人とか二人の数じゃないだろあいつの場合」と言いたくなる。その男は、いっそ「見たまんまの奴」だったのですが、全体的情報が処理できないと、その見たまんまの地雷を踏みに行くことがあります。

地雷に「ウェルカム」と書いてあっても踏みに行ってもはいけません。そういうのは、男運が悪いのではなくて、申し訳ないのですが、頭が弱いのです。

学歴について嘘をつく男性は少なくないようです。なぜか意地のように「早稲田卒」と言うのですが、それを言うタイミング自体がおかしいので、脳は全体的情報において彼を「おかしい人」としか捉えません。全身がいかにも嘘をつく挙動をしているので、嘘をつくんだな、というふうにはしか見えない。それでこちらが付き合っ、「学部は？」「ゼミは？」「キャンパスはどっちだった？」と訊くと、もうぐちゃぐちゃになります。

馬鹿馬鹿しい話なのですが、そんなつたない彼の嘘にさえ、だまされてしまう人はいます。そういう人は、心が綺麗で純粋だからだまされてしまう、というのではなくて、単に脳が弱っています。全体的情報を受け取れていない。

典型的な「頭の弱さ」についてお話しました。少し悪口のように聞こえてしまうのはご容赦ください。

典型的なものについてはわかりやすいですが、もう少し微妙なものもあります。たとえば、あなたがある部活動に新入部員として入ったとしましょう。あなたは初めて部室にゆきます。

ある先輩が、どうぞ座って、ゆっくりしたらいいよ、と言ってくれました。ところがもう一人の先輩は、あなたと、あなたと同じ一年生を指差し、「おう、新入りと、お前とで、ジュースでも買ってこい、喉渴いたわ」と言いつけました。

あなたはどちらの先輩をいい人だと思いますか。表面上は先の先輩のほうがいい人に見えます。

ところが後のほうの先輩は、あなたをさっさと仲間入りさせて、あなたにとって早く部活動の居心地が良くなるように、そのような言いつけをしたのでした。あなたは実際、言いつけにしたがって、二人でジュースを買い出しに行きます。道中できつと、「あのね、困った先輩でしょ」「うん、びっくりした、いきなりだったから」「でもあの人がキャプテンだから」「えー」というような話をします。それで結果的に、部員同士として親しくなれています。

あなたの脳が処理しなくてはいけない全体的情報はこうです。初対面ですが、その人の向けてきた眼差しや振る舞いは、「陰険な人のそれではなかった」「無神経というのも少し違った」「常識が無い人の感じではなかった」「誰とも親しめるような屈託のなさがあった」というようなことです。あくまでこれらの全体的な情報の上に、「ジュース買ってこい」というのが乗っかっています。そこまで処理できる脳の活躍があつて初めて、後者の先輩を、「あ」、と、いい人だと発見します。

前者の先輩のほうに、「気を遣ってください」とお礼を言うと、「当然のマナーでしょ」と気さくに言いました。後者の先輩に「気を遣ってくださいました？」と訊くと、「そんな義理は無え」とぶっきらぼうに言いました。

こうなると実践的な話になってきますね。あなたが恋人にするならどちらですか。

脳が弱く、パケット情報しか扱えないと、確実に前者の先輩を選びます。パケット情報としては後者の先輩に良いところはありますが、後者の先輩は論外になります。でもその先輩は「論外」にして本当によいような人でしょうか？

そうして"大魚"を逃している場合、やはり男運が悪いとは言えないでしょう。

あなたの脳が処理しなくてはいけない全体的情報は、そこに立っている自分自身も含めてです。あなたから見て先輩が二人いる、というだけでなく、あなたもいる、ということも、全体的情報に含まれねばなりません。

あなたが逆に先輩の立場に立ったときに、あなたはその先輩のような計らいができるかどうか。いかに先輩だからといって、初対面の人にジュース買ってこいと言いつけるのは気楽なことではありません。勇気が要りますし、二人で行かせたらその道中でその悪口が話題になることもわかりきっています。

それでもそのように、その先輩はしたのだということです。そこまで含めて、全体的情報の処理です。その全体的な情報が処理されてこそ、あなたがその先輩にこれからどう接したらよいかが決まってきます。

話が長くなってしまいました。次にゆきましょう。



本 来の脳が担う仕事

脳という言葉と、自意識という言葉と、ここまで対比してお話してきました。では、そのあなたの「脳」がどのような仕事を担うかということなのですが、それについてあなたはぜひこう鵜呑みにしてください。鵜呑みにしてからのほうが、理解をしていただくのが容易だと思います。

「脳の仕事は脈絡を超えること」

「脈絡」ということなのですが、自意識が認める「脈絡」というのと、脳が発見する「脈絡」というのは、性質が異なるのです。自意識が脈絡を認めている場合、そこに脳の出番はあまりありません。

自意識からは脈絡が破綻しているに見える場合、脳の出番となります。自意識はパケット情報を扱い、脳は全体的情報を扱うと申し上げました。自意識の小さな情報量では脈絡が見つからないところを、脳は、その一兆倍の情報量をもって、そこに脈絡の成立を発見するのです。

実はそのことので分かりやすいサンプルをすでにお話ししています。

・初対面→どうぞ、ゆっくりしたらいいよ→いい人

この脈絡は簡単です。脈絡がつながって見えます。これは自意識の扱うパケット情報でも脈絡を見つけることができます。

ところが、

・初対面→ジュース買ってこい→いい人

こちらのほうは、表面上に脈絡が成立しません。「なんで初対面で人をパシリにするような人がいい人なんだよ」と反論できてしまいます。脈絡としてはまったくそう。

ですが本講義ではずっと、「あなたの脳の立場に立って」ということをお願いしています。

あなたの脳の立場からは、脈絡というのは、そういう小さい範囲では捉えられていないのです。

もう一度、あらためて、脳の捉えている「全体的情報」というのを思い出していただきます。脳は、自分の心身に浴びているものを、小分け（パケタイズ）して受け取ることはできませんでした。熱いスープの味と熱さは分離できないように。ですから、初めて部屋に行ったとき、その空気、自分の足元、人人の表情、その体つきや肩の力の入り方、声の感触や眼差しの色合いといったものまで、全てまとめて全体を受け取っています。あなたの自意識がそれを知らなくても、脳は勝手にそう機能しています。

それで、脳が脈絡を発見するという事はこういうことなのです。確かに、初対面でいきなり「ジュース買ってこい」と、いわゆる「パシリ」にされました。ですが脳は、そのように言った先輩が、単に無神経であるとか、単に横暴であるとか、陰険であるとか、親しみづらいであるとか、そういうことではない、ということ、情報として受け取っています。いやらしい人の声をしていなかったというのを脳は見逃していません。もちろんその先輩が本当に喉がひたすら渴いてジュースを飲みたいだけということではないというのでも脳は気づいています。そんなに喉が渴いていたらさっさと自分で買いに行っているでしょう。

脳は全体的情報の中で、本当にはそれらのことを知っています。だから、途中で気づきます。ジュースを二人で買いに行く道中、「でもあの人キャプテンだから」「えー」と、ふと、目の前の人と一歩親しくなったことに気づき、喜ぶと同時に、「あ」と、脳が全体性の整合をあなたに教えます。脈絡が発見されるのです。こうして二人で悪口のようなことを言いながら、早く親しくなって、早く居心地がよくなればいいさと、そう計らってくれたんだ、ということに。

そこまで含めてようやく、

・初対面→ジュース買ってこい→いい人

という"全体的脈絡"が成立します。

このことは、情報量がゼロというような、パケット情報のやりとりでは決して起こりません。自意識の扱う範囲内では、どうしても彼がいい人だなどという脈絡は成立しない。誰かに説明されたら少し立ち止まりはしますが、結局自分の発見ではないので完全な納得はしないでしょう。

パケット情報では脈絡が発見しえないというのは、例えば次のように示せます。インターネットの掲示板に、次のような相談・質問があったとしましょう。

「みなさんは初対面でいきなりパシリにされたことってありますか？ 年上の先輩なんです。正直不快でした。みなさんはどう思いますか」

このようなパケット情報の質問において、当の先輩が「いい人」だという脈絡を発見することは不可能です。いい人「かもしれない」とは言いえても、いい人だ、と発見することはできません。

この質問にはきっと次のような回答が返ってきます。

「先輩風を吹かせたかったんじゃないですか。そういう人って多いですよ。どうか気にしないで」

初対面でパシリにされた→先輩風を吹かせたかったのだろう、という話は、脈絡がつながって見えます。

ですから自意識のみではこちらの脈絡を採用してしまいます。

ここまで話せば、あなたには、その自意識の脈絡にのみ縛られるのがいかに貧しいことかを、ご理解いただけていると思います。ですが実際にはそんなことをいちいち誰かが説明してくれるわけではありません。誰だってその現場で「あ」と気づくしかないのでした。そしてそれを気づくのは脳なのです。

脳は自意識を超えて脈絡を発見します。それはいわば、脳という有能なヴェテラン刑事が、新人の浅はかな刑事とは違う、膨大な全体的情報を処理して、「事件の真相にたどりつく」というようなことです。そのとき、事件を糾弾してやまない、当人は真剣であるつもり新人を、ヴェテランが真相をもって諫（いさ）めるのはごく当然のことでしょう。新人はそれによってすぐにヴェテランになれるわけではないですが、ひとつの経験を積みます。「いかなるときも、浅はかに思い込んではいけないのだ」と、戒めを持っている新人に成長します。

たとえば新入社員が若気の至りで、会社の重役を前にして悪態をついたとします。その途端、課長が立ち上がって、新入社員の頬を張り飛ばしました。課長は重役に向けて「大変失礼いたしました、教育不足でした」と頭を下げて詫言います。張り飛ばされた新入社員としてはどうでしょうか。

彼は腹を立てるかもしれません。友人とでも、インターネット上の相談でも、「いきなり暴力とかありえないだろ」「それってもう警察に訴えたほうがいいんじゃない」「裁判にしたら勝てるだろ、訴訟しろよ」というような意見が飛び交います。

ですが全体的情報が正しく処理されていれば、「事件の真相」はそんなことではなかった、ということが浮かび上がってくる。たとえばそうしていきなり張り飛ばされたからこそ、彼の舌禍（ぜっか）は、若気の至りだなということで大目に見てもらえることになったのかもしれないのです。つまり左遷されたり出世の道を断たれたりということ、その張り手の一撃でまぬがれたのかもしれない。企業の権力構造を甘く見てはいけません。合法の範囲内で、粛清（しゅくせい）が直ちに行われることは、冗談ではないどころか"常識"です。重役というのは正当にその権限を与えられている権力者です。課長はもちろんそのことをよく知っています。（舌禍というのは舌が災いするという意味です）

事件を大きくせずにその場限りのことにしてしまうためには、そうするしかない、と課長がとっさに判断した。それで張り飛ばした。もちろん課長だっていきなり人に暴力を振るえば、自分が社会的なリスクを負うことは知っています。けれどもそれを踏み越えて彼を救おうとした。

仮にあなたが課長であったとして、とっさにそのような判断ができるでしょうか。また判断できたとしても、本当にいきなりそうして人を張り飛ばすようなことができるでしょうか。ふつうできないものです。

自意識的脈絡しかない場合、一般的に彼の舌禍はこう扱われます。「彼も一人前の大人なんだから、自己責任でしょ」「むしろ課長まで立場がヤバくなっていい迷惑、会社勤めに向いてないわ」。舌禍→粛清→自己責任という、目に見える当たり前の脈絡があるのみ。

でも、そんな当たり前すぎる脈絡をニマニマ眺めて、本当に私たちは何か楽しいのでしょうか？ 脳が本当は見抜いている全体的情報はまずこうです。「十分に常識人である課長が何の理由も無いいきなり暴力の用途になるわけがない」。あなた自身が無意味にいきなり暴力の用途になるわけがないのと同じようにです。

もっとも実用しやすく、また忘れにくいように、僕はこの表現を用いました。「脳の仕事は脈絡を超えること」です。あなたはどうかこのことを持ち帰ってください。もしあなたが、目に見える脈絡しか当たり前に見えないときがあったら、あなたが脈絡において賢いのではなく、ただ脳が停止して頭が弱いだけなのです。

（なお、脈絡を超えるというのは逆方向にもあります。悪徳商法のセールストークは脈絡を伴っています。楽に儲かる商売がある→販路の拡大が必要で→あなたもどうですか、と。脳は全体的情報から今度はその脈絡の"破綻"を見つけます。つまり、「あなた楽に儲かっていないじゃない」と。）



脳

の知識と自意識の知識

面白い話をしましょう。現役の東大生と専業主婦のおばさまがいたとします。頭の良さで言えば東大生のほうが抜群に賢いと思えます。ですが「脳」ということにおいては必ずしもそうとはいえません。

たとえば東大生に、魚の図鑑を見せて魚を覚えさせます。これはイサキでこれはサヨリ、これはキスでこちらはカマスだと。同じく写真を見せて、この切り身はカンパチでこちらはブリだということも覚えさせます。頭が良いので彼らはそれらの知識を吸収し、記憶するでしょう。

ですが、そこにある情報はパケット情報です。パケット情報だからこそ、猫は魚の図鑑にかじりついたりしません。パケット情報は自意識に入ってゆきます。彼らは頭が良いので、自意識でパケット情報を取り扱う能力に優れています。ちょうどコンピューターのようにです。

とはいえ、いざ魚屋に行って、魚をズラッと見たとき、たとえ東大生であっても、「えーっと、これは確かサヨリですよ」「これはイサキでした」「これは……メバル？」という感じになります。

このとき彼が何をしているかという、目の前にある全体的情報から、記憶してきたパケット情報と適合する部分を探し、照らし合っているのです。その作業をしているので「えーっと」となります。

専業主婦のおばさまには、その「えーっと」がありません。彼女は図鑑で研究してきたわけではないですが、毎日スーパーに行き、鮮魚のコーナーを見ているし、それを買って調理し、食べています。心身から直接、全体的情報を脳に与えていることになります。彼女の脳にとってたとえばイサキがどういうことになっているかという、それが「イサキに見える」のです。魚を見てそれがイサキだと判別できる、というのではなく、「あ、イサキだ」と見える。逆にいえば、それはイサキ以外の何物にも見えない。

たとえばあなたも今、自分の「手」を見てください。あなたはそれが「手」にしか見えません。図鑑に載っていた情報と照らし合わせて「えーっと、これは手、ですね」と判別できるというのではなく、手が「手」に見えて、それ以外の何物にも見えなくなっている。

専業主婦のおばさまにはイサキがそのように見えていますし、魚屋さんにとってはさらにそうです。たとえば中卒で「勉強はからきしダメだったわあ」という魚屋さんでも、イサキを見てイサキとわからないというようなことはありません。脳という立場から見れば、魚ということに関して、東大生よりもおばさまが優れていて、魚屋さんはずっと優れているのです。

「この魚はウロコを取るのが大変だけどこれはもう取ってあるし、すだちをつけて食べるとおいしいわ、そして大ききの割にはこの値段はお買い得だし、ちょうど旬のころなのよね今、そしてなによりこの太り方はおいしそうなんですもの」

こういった情報処理は、いくら頭の良い人間でも、パケット情報を寄せ集めては成立しません。

もし、おいしいマグロの目利きというのが、マニュアル化してパケット情報化できるのなら、東大生は即日でも仕入れの名人になれるでしょう。でも、おいしいマグロの目利きというのが、たとえば「尻尾の赤みがきれいなもの」といったって、どれがどのようであったらきれいなのかということ自体がわからない。大量のパケット情報で分析すれば、さんざん時間をかけて、このマグロは良い味と推定できる、という程度にはなっても、職人がパッと見て「これはすごい、旨そうだな！」と判断するようなことはできません。

もしパケット情報処理でそれが済ませられるのなら、尻尾の切り口をデジカメで撮影すればよいのです。そしたらただちに「目利きアプリ」が、そのマグロの品質を数値化して答えてくれるでしょう。でもIT技術はそんなことをまったく出来ていません。たぶん現状では、その「目利きアプリ」なるものを作ったとして、本マグロとミナミマグロの区別さえできないのではないのでしょうか。

クラシック音楽を愛好する人が、「このバイオリンがいいんだよね」というとき、吹奏楽部にいる中学

生が、「これはビオラだよ」と指摘して言うことが、ままあります。もちろんそのことは"音楽鑑賞"とは関係ありません。別にそれがバイオリンでもビオラでもどちらでもよいではないですか。ただ鑑賞においていい音なら。

ただそこにはやはり、パケット情報と全体的情報の差が現れています。吹奏楽部の中学生は、ただそれが「ビオラに聞こえる」というだけです。寿司職人にとってカンパチが「カンパチに見える」というのと同じに。吹奏楽部の中学生は、楽器の音色を聞き分ける聴音の訓練を受けたわけではないですが、とにかくバイオリンとビオラが鳴る現場に身を置いています。そのとき脳は情報を吸い上げていますから、バイオリンはただバイオリンに聞こえ、ビオラはビオラに聞こえるのです。

それはたとえば我々が、大阪弁が「大阪弁に聞こえる」というのと同じです。これに比べて、外国の言語学者は、いかに知識が正確であっても、それが「大阪弁に聞こえる」ということはないでしょう。我々の脳は常に全体的情報を吸い上げているので、「考えるまでもなく」、標準語と大阪弁は明らかに違う、と聞こえます。

言語学者が分析したら、標準語と大阪弁は、しょせん同じ日本語なのですから、99%同じだ、と結論するかもしれませんがね。ですが我々の脳はその結論に「はあ？」としか言いません。標準語は標準語に聞こえるし、大阪弁は大阪弁にしか聞こえないからです。吹奏楽部の中学生には、バイオリンが標準語に、ビオラが大阪弁に、というふうには聞こえるだけなのでした。

面白いお話をしましょう。コカ・コーラや、ケンタッキー・フライドチキンなど、よく知られて飲食業界を席卷している商品があります。それらのスパイスの配合がどうなっているのかを知る人は、世界中で数人しかいません。究極の企業秘密だからです。これがバレたら世界中で同じものを作られてしまいます。スパイスを納入する倉庫なども、各所に分散され、それをハンドリングしている企業ですら、スパイスの配合は知りえないようになっています。

もちろんこれらの商品を、ガスクロマトグラフィなどの高度な分析器にかければ、その成分の99%以上を正確に分析することができます。ところが、その最後の1%が違っていると、それはもうまったく別の味の食べ物や飲み物になるのです。理屈では「もうほとんど同じだろ」と思えるのですが、舌がそれを味わい、脳が情報処理をすると、「これは全然違うものだ」と脳が答えるのでした。標準語と大阪弁が我々にとって「全然違う」ように。

それで企業が結局どのようにして飲食物の成分を決めているかという、官能士という職業の人が、自分の舌と鼻で研究して、決定しています。彼らの鋭敏きわまる味覚と嗅覚、そしてそれらの情報を処理する脳が、結局のところ頼みの綱なのでした。スコッチウイスキーのブレンダーなどもそうです。分析器で味を調えることなどできないので、彼らの脳でブレンドを決定してもらうしかないので。ブレンダーはカレーやワサビなどの刺激物を代表に、およそ世界中の半分の食べ物を食べることができないそうです。それらを禁じて高精度の舌と鼻を維持しています。彼らにとって、同じウイスキーのA樽とB樽は、標準語と大阪弁のように、「まったく違う」と感じ取られています。それだからこそ、AからZまである樽をどうブレンドするかを彼らは決定できるのでした。

「脳」がする情報処理と、「自意識」がする情報処理の違い、その処理される情報量の貧富の差が、いよいよわかってもらえると思います。いくら分析器にかけてパケット化した情報を集めたってやはりダメなのです。あなたは何につけ、分析士になるのではなく官能士になるべきです。そのためには、あなたは脳を鍛えるしかない。全体的情報を得続け、その情報処理を課され続ける、ということで、あなたの脳は鍛えられます。あなたの脳を鍛えるのは、あなたが心身に浴びる情報です。それを分析などと、横着なことをしないのです。

二 二 セモノがニセモノだとわからない！

たいへん実践的なことをお話します。少し長くなりますが、このことを持ち帰ることはあなたにとってとても有益で、かけがえのないことです。

僕があなたの前に、"マネキンの手"をゴロンと置きます。僕はそれについてあなたに、「これは手です」と言います。あなたは、「そうね」と言いますが、同時に「マネキンの手よね」と言います。

それでも僕は、「いや、これは手だ」と言い張ります。あなたは「手だけど、マネキンというか、"模型"よね?」と言います。それで僕はいっそ、「はあ?」と怒り出します。「手だって言っているだろ。手のひらがあって、指が五本あるだろうが」。僕がそう食ってかかっても、あなたは、「何を言ってるの。それでも模型は模型じゃない」と言うでしょう。

「はあ? じゃあ逆に聞くけど、手のひらがあって、指が五本あるのに、手じゃないものってこの世にあるんですか?」

「だから、手だけど、これは模型でしょって言ってるじゃない」

こんな感じになります。

重要なことは、当たり前なのですが、こんなことを僕がどれだけ言い張っても、あなたはそんなことで決して騙されないということです。僕がどれだけそれを「手」であると説明しても、あなたは「でも模型だし」としか思わない。それはなぜなのでしょう。そのことに改めて気づかれることはあなたにとって大切なことです。

あなたが騙されっこないのは、それが「模型にしか見えない」からです。何をどう言われようが、あなたは、「この人は模型を持ってきて一体何を言っているのかしら?」としか思えない。

この、極めて当たり前に見えるようなことが、実はたいへん重要なことなのです。あなたがそれを「手ではなくて模型だ」と確実に知っているのは、それを自意識ではなく脳で知っているからなのです。自意識よりも一兆倍の情報量を扱えるのが脳でした。確かに手の形をしている。手のひらがあり指が五本ある。表面もそれなりに人体に似せてはいる。が、"全体として、これは手ではない"ということ、あなたの脳は知っています。一兆倍の証拠があって言っています。「これは模型よ」と。

もし、コンピューターに安物の形状認識ソフトみたいなものがあったとしたら、マネキンの手も「手」だと認識するでしょう。手のひらがあって指が五本ある、これは「手」だな、と。コンピューターは、複数のパケット情報を集めて判断、というようなことをしていますが、それではその"全体として、これは手ではない"というミエミエのことさえわからないのでした。

今度は極めて精巧な模型を持ってきます。パッと見た感じ、それは本当の手に見えます。それはデジカメで撮影してツイッターにアップロードすると、本物の手にしか見えないので、「誰かの手の写真だね」と扱われます。

ですがあなたの脳は全体的情報を扱うのでした。手はテーブルにごろりと置いてあったりはしません。いくら表面を精巧に似せても、触ればたちどころにバレます。感触が違う。温度がない。関節や筋肉の動きもない。なによりこれは生きものの感触でもなければ、人間の手の感触ではない。だからやはり、"全体として、これは手ではない"。

騙されっこないのです。それはあなたが、脳の知識として「手」を知っているからです。「手」とはどのようなものであるかを、あなたは全体的情報として知っている。あなたは人間の「手」というものについて特別に研究なんかしたことがないと思いますが、脳は勝手に情報を吸い上げて、いっそ知り尽くしています。そこにパケット情報で茶々を入れられても、情報量は一兆倍も違うので話にならない。たとえ事故で指を数本失っていたとしても、それは"全体として、これは手だ"と見抜くでしょう。

では次に、あなたが脳では知っていない、自意識での知識ではどのようになるかをお話しします。あなたはブランデーというお酒があるのを知っていますし、ラムというお酒があるというのもきっとご存知です。そしてどちらもアルコール度数の高い、強い酒ということをなんとなくご存知です。詳しい方なら、ブランデーの原料は葡萄で、ラムの原料はサトウキビだにご存知かもしれない。そしてどちらも、わりと甘みのある酒だということもご存知かもしれない。

でもそこで、「どうぞ、ブランデーのVSOPです」といって、ラム酒を出してみる。いんちきであり、ニセモノのブランデーということになります。ところが、あなたはそれを飲んだとき、「度数の高いお酒だな」と感じ、「甘みがあるな」と感じます。そして、あなた自身の口から、「おいしいブランデーですね」ということになりかねない。

これはあなたが、人間の「手」というほどには、「ブランデー」のことなど知ってはいないということなのでした。ブランデーの原料が葡萄で、アルコール度数が高く、甘みがある、琥珀色の洋酒だ、ということを知っていても、それは小分けにしたパケット情報です。自意識の知識として知っているのみ。脳で全体としての"ブランデー"をご存知ではない。だからニセモノがニセモノだとわからず騙されてしまうのでした。

脳は心身に浴びた全体的情報を処理すると申し上げました。だから実際にブランデーやラムをよく飲む人なら、その違いは明らかにわかります。あなたが「これは模型よ」と言うときと同じように、当然すぎるようなこととして、「これはブランデーじゃないでしょ」と言います。

なぜその差がわかるのか、という話ですら、それは無くて、ただブランデーからはブランデーの味と香りがし、ラムからはラムの味と香りがするというだけです。ラムはラムにしか見えないのです。いくら、「これはブランデーだ」と言い張られたとしても。

僕自身はスコッチが好きなのでスコッチをよく飲みます。そして、スコッチもバーボンも同じウイスキーですが、この二つの区別がつかないということは決してありません。標準語と大阪弁のように、それは区別するまでもないものです。もし「スコッチです」といわれてバーボンを出されたら、グラスを口元に近づけただけで「え？」となります。「ワテ、東京人でんねん！」と言われたときにあなたがする反応と同じです。実はスコッチとバーボンは液体の色も違い、バーボンはスコッチの色には見えません。黒い画用紙が海苔の色には見えないように、色がそもそも違う。ちなみに海苔を食べない文化圏では、海苔はしばしば「カーボン・ペーパーに見える」と言われます。たとえ「スシには海苔を使うんだろ」と知っていてもです。

あなたが本当に"知っている"こととは、そのように、脳の知識として知っているということなのです。全体的情報として知っているということなのです。海苔はどう見たってカーボン・ペーパーではない。そういったものはたくさんありますね。造花というのは見た目にはよく似ていますが、その茎を手を持ってしまえば造花だとすぐわかります。何が違うというのではなく、全体的にこれは生花ではない、ということがわかります。アルミ缶とスチール缶もわかりますし、ガラスとアクリルの違いもわかる。どれだけ食品に似せた蠟細工も、手で触れてしまえば一撃です。自分の母親とそっくりな人を連れてこられても、確かに顔は似ているかもしれないが、目つきが違うし身長も少し違うし声が違うし仕草も違うのですぐわかります。"全体としてお母さんじゃない"。そういう影武者は、テレビモニタを通して遠くからの映像という程度でしか騙せません。いくら整形して仕草を真似させたとしても身近な人にはバレバレです。

インテリアや小物を扱う人なら本皮と合成皮革は触れただけでわかるでしょうし、木工職人が家具の展示場を歩いているとき、そこに使われている木材がスギなのかブナなのかタモなのかサクラなのかケヤキなのかマホガニーなのかラワンなのか、全てミエミエで歩いています。専業主婦のおばさまが、鮮魚売場を歩きながら、それぞれの切り身をスズキとメバチマグロとソイだと見ながら歩いているように。

そして、そういう脳の知識を持っていない人は、パケット情報に引っかかってしまいますので、ニセモノの桐ダンスを買わされてしまいます。桐というのは発泡スチロールみたいに軽い木なのですが、その感触を身に浴びたことがないために、ずっしりと重いタンスに「桐」と書いてあると桐ダンスだと思って買ってしまう。実際にはそういうタンスは、取っ手の一部分だけが桐でできている、というようなマガイモノです。「桐」というシールが貼ってあるところは確かに桐だ、という。本皮、というシールが貼ってあると、

またその貼ってあるところだけが本皮だったりする、そういうバッグを買わされてしまいます。

このことを、あなたはどうか、紛れの無い形で、持ち帰ってください。何も難しい話ではありません。たとえばイカの話をししましょう。あなたが自分でよくイカを買い、自分で調理して食べる人でなければ、あなたはきっと、スルメイカとケンサキイカとヤリイカとコウイカとアオリイカとソデイカの区別が付きません。全部「イカ」としか見えないはずです。ヤリイカは槍先に似ているからヤリイカと言いますが、そんなことを言えばイカはだいたい槍先に似ています。でもこれらのイカだって自分で手づかみにして調理して食べたりしていれば、間違えっこないものになります。僕はコウイカが好きなので鮮魚売場にコウイカがあると「おっ」と思います。それをスルメイカと見間違ふことはまずありません。だってそれはチワワとプードルぐらいまったく違うものだからです。脳の知識として知っているというのはそういう状態です。

「桐」というシールにだまされて桐ダンスを買ってしまう人のことを、もう一度よく見ておきましょう。一見、気の毒に、という気がするのですが、あなたは同情するべきではなく、正しく本質を見抜くべきです。

なぜその人は、ニセモノの桐ダンスを買ってしまったか。それは決まっています。「桐ダンスは高級品」というパケット情報を持っているからです。ニセモノの桐ダンスを買ってしまったおばさんは、悪徳商法に騙される前に、自分で自分を騙してしまっています。桐ダンスは高級品……ということをおばさんは心身に浴びて知っているわけではなかった。知りもしないのに、パケット情報だけで、知っているフリをした。そここのところを悪い業者につけこまれているのです。

もし、そもそもの「桐ダンスは高級品」というパケット情報がなければ、業者もおばさんを騙せません。もし、そのパケット情報なしに、目の前のダンスを手でいじくって、「高級品か？」と訊かれたら、おばさんは「さあ」と答えます。「欲しいか？」と言われたら「別に」と答えたでしょう。

だからあなたはこのおばさんに同情するべきではありません。あなたはひよっとすると、アオリイカが「イカの王様だ」ということをご存知かもしれません。パケット情報として。でもそれは、あなたが自分で自分を騙してしまう入口です。僕はスコッチが好きだと申し上げました。スコッチの中で、マッカランという銘柄は、「スコッチのロールスロイス」と呼ばれます。これは今でもしばしば聞かれる文句ですが、僕の知る限り、マッカランがスコッチのロールスロイスであったのは、きっと何十年も昔のことです。個々人の趣味でそれが好きだということには、僕は口出ししませんが、僕自身はマッカランを高値で買ったことはありません。何しろ僕はロールスロイスを乗り回したこともないので、キャッチフレーズはピンと来ませんでした。むろん「イメージ」はわかりますが、それは僕が知っている何かではありません。

さて、あなたはたとえば、誰か人に本気で怒られたことがあるでしょうか。あるとしたら、それは幸運なことです。人があなたに怒るということをお、あなたは心身に浴びることができたからです。あなたはそれにより、脳の知識として、人の怒りというものを知ることができました。あなたは人の怒りというものを知ることができましたし、それによって、人の心というもの、また人そのものということについても、脳の知識として知ることができたのでした。

ここで仮に、「怒るふうの演技」をする人がいたとします。Aさんとしましょう。Aさんは過去に、「女にはガツーンと言ってやったほうがいいんだよ」と知人に吹き込まれたことがあります。そして言われたとおりにしてみて、うまくいったことがあり、それ以来"味をしめて"いるところがあります。

あなたがこのAさんと待ち合わせをしました。あなたはその待ち合わせに少し遅れてしまいます。遅刻はよろしくないことです。Aさんはここぞとばかり、「お前おれのことナメてんのかよ！」と怒鳴りました。ところが……

あなたは脳の知識として、人が怒るというのがどういうものであるかを知っています。ですから、そのAさんが芝居がかって"ガツーン"とやったときに、驚きはしますが、騙されることはないのです。

彼の大きな声、しかめた顔、睨みつけてくる目、厳しい文言、それはわかります。わかりますが、
「それは模型でしょ」

とあなたの脳は言うのでした。"全体として、これは人の怒りではない"と。そうして見抜かれてしまったらもうAさんはおしまいです。どれだけ「怒っているふう」の証拠を次々に見せても、それは一兆倍の情報

量を誇るあなたの脳を覆すことはできません。怒りの模型、怒りのマネキンです。

もちろん怒りのことだけではありません。喜び、悲しみ、楽しさ、笑い、やさしさ、厳しさ、愛情、なんでもよいのですが、あなたが本当のそれを心身に浴びることがこれまでにあったなら、それらは全て貴重なことでした。あなたは脳の知識として「人」を知っています。人の心を知っています。喜ぶふう、悲しむふう、楽しいふう、笑うふう、やさしいふう、厳しいふう、愛情ふう、といった、全てのニセモノに、もう騙されることがありません。どれだけ騙しにこられても「それは模型でしょ」でおしまいです。「模型にしか見えない」のだから騙されようがない。

そして同時に、人が本当に自分に心を向けてくれたとき。本当に心を開いてくれたとき、そのことを見逃さずにいられます。人があなたに向けて、本当に笑ってくれたとき。本当に喜んでくれたとき。本当に悲しんでくれたとき。本当に怒ってくれたとき、それらを見逃さない。初対面で「ジュース買ってこい」と言ってくれた先輩のやさしさを見逃しません。どれだけ表面上はぶっきらぼうで、やさしさの反対側にいるように見えたとしても、それは"全体的に、やさしさだ"という全体的脈絡を発見します。

その代わり……ささやかな代償ですが、"しょうもない小芝居"みたいなものが、目の前に展開されたとき、あなたはそれに陶酔することができません。それはメディアであっても実際の生活においてであってもそうです。目の前で「感動ふう」のことをされても、あなたにはそれが模型にしか見えないので、あなたは苦笑いすることしかできなくなる。わりと厄介な代償であるかもしれませんが、これはしょうがないことです。周囲と話を合わせるしかないときは、やはり合わせるしかないでしょう。そのようにしている人は、あなたの周りにも誰かこっそりいるはずです。

脳が本来の機能を失い、「頭が弱くなる」、そして自意識でポケット情報しか扱えなくなることの最大の問題は、ここにあります。ニセモノがニセモノとわからないのです。人の心ではなく、人の心「ふう」のものを真に受けてしまう。

恋愛でいえば、愛されている「ふう」のことに騙されることになる。そのまま騙されつづけてゆけるかという、そんなに甘くはなくて、いつか必ず……破綻するというのもない、当人がいつか「もういやだ」と膝を折って倒れてしまいます。そしてそうして倒れた人はもう当人が回復を望む気力を残していません。そのことはまた以降の講義で説明しようと思います。



ネ

ズミを獲れなくなったフクロウ

脳が扱う全体的情報と、自意識が扱うポケット的信息。それらが、性質が異なるということ、それも極端に異なるということが、わかってもらえたと思います。よくよく見たら「まったく別の現象じゃないか」ということが。

最後にひとつ、怖い話もしておこうと思います。ある実験の話ですが、健常で生まれてきたフクロウに、生後まだ目が開かないうちから、目隠しをしてしまいます。そしてそのまま、たとえば二年ぐらい、目隠しをしたまま、食餌を与えて生育させます。それからようやく目隠しを外したらどうなるだろうか？ という実験です。

フクロウは別に病気ではないので、目隠しを外せば目は見えます。目下にネズミが走り抜ければ、そのネズミを目で追うことができます。

ところが、それで本能のままにネズミに飛び掛るのですが、そのフクロウはネズミを獲ることができないのです。なぜか。それは、目の機能は健常で、目は見えているのですが、その目から得た情報を、脳が処理できないのです。それで、「ネズミを捕らえるように飛び掛る」ということが実際にはできなくなる。

動物は、発達の過程において、「この機能は必要ない」と判断されたものは、機能を丸ごと捨てるようにして発達していきます。フクロウは生後長い間目隠しをされていたので、視覚情報を脳で処理する機能は「必要ない」と判断され、その機能は捨てられてしまったのです。その後、訓練によって機能が取り戻されるのかどうかは定かではありません。ですが常識的に言って、その機能は「損傷」ではなく「喪失」したのですから、それが回復されるということはもう無いと見なくてはなりません。このフクロウは、見えてはいるが見えていないというような、本来の姿ではない、哀しい生き物として生きてゆくこととなります。

ひいては、人間だって、脳の本来機能である、全体的情報を処理する機能、これを発達の段階で「必要ない」と判断させてしまうことは、取り返しのつかないこととなります。これは僕の考え方が残酷なのではなくて、生命そのものがそうして残酷に作られているということでした。

人間は言語を持ち、自意識を持ち、それを高度に機能させて社会を形成しているので、パケット情報の取り扱いができなくては、社会的に生きていくことができません。簡単に言えば、青信号が「進んでよし」とわからなければ、社会的に生きていくことはできないということです。犬などでも青信号でわたる犬はいますが、それは周囲が進むのに合わせて進んでいるだけで、青信号をパケット情報として処理しているわけではありません。

しかし、青信号の理解が必要であっても、同時に、「あやしい挙動の自動車が急接近してきた」というときは、その全体的情報の処理を優先させねばなりません。脳が全体的情報を処理しているからこそ、その挙動が「怪しい」と見えるということです。

「笑顔が大事ですよ」と教えることも大事かもしれません。笑顔であることをまるで、「心の青信号です」「だから進んでよしなのです」と教えることは、きっと無益ではない。

けれども、全体的情報においては、あえて笑顔に頼らない誠実さの人もいるかもしれない。その全体的情報を脳が処理できなければ、そういう人のことを見落としてしまいますし、小ざかしく笑顔の造形だけを利用してくる人にだまされてしまいます。"怪しい"挙動の接近があるのに気づかず、ただ「青信号だから進んだ」というような形で。

子供の教育のみならず、自分で自分を教育するというようなことを、人はします。しかしその教育というのは、自意識に有益なパケット情報を詰め込む、ということに限らないはずで、脳のほうを教育することがありえますし、むしろそちらの教育のほうが大切だ、というのが本講義の趣旨でした。

脳の教育、脳を教えるということが、どういうことか、ここまで読み進められたあなたには、もうあなた自身として言いたいことがあるはずで、心身に浴びうる情報を与え、それを分析に逃げさせないことだと。全体的情報の処理を続けていないと、ただちに落第するような何かの環境を与えてやることだと。そこで落第を喰らいまくることは、教育上決して悪いことではないのでした。僕は子供の教育に進言できる立場ではないので、人がそれぞれ自分を教育することについて進言しています。

第

二講は以上です、お疲れ様でした。長い講義になり、そしておそらくこの講義が全体の中で最長になりますのでご安心ください。最長になったのは、ここが肝だということでもあります。

第二講のタイトルは「頭が弱くなる時代」ということでした。このタイトルは、それだけで、なんとなく分かる気がするわと、了解されうるようなものです。ですが、そうして分かった気になることには、利益が

ないだけでなく、分析的逃避に陥るだけの、むしろ重大な害があります。頭が弱くなるということが、本当にはどういうことなのか、そしてどれくらい恐ろしいことなのかを、あなたは正確に知る必要がありました。恐ろしさを分析することが大切なのではなく、恐ろしい、と感じていることが大切です。そのためにあなたはこの長ったらしい解説に付き合ってきたのでした。

あなたがこの講義で持ち帰らなくてはならないものを整理しておきます。ひとつ、自意識の機能と脳の機能はまるで違うということです。自意識の機能が活躍することは、脳の活躍にはまったくなっていません。それで脳に活躍をさせていないと、脳が弱っていき、本来の機能を喪失してしまい、「頭が弱い」という人になるのだということでした。

そして頭が弱くなると、肝心な人を見落とし、しょうもない人に引っかかる。"ニセモノがニセモノだとわからない！"。「現代と恋愛」という大タイトルにおいてはそこが重要になるでしょう。人がする"模型の行為"に騙されてしまう。「模型でしょ」と気づくことができず、また自分自身も、その模型的行為を続けてしまいます。それらは全て、自意識の知識だけがあり、脳の知識が無いことが原因でした。

実際のこととしてはきっと、「脈絡を超える」ということが、引き続き大きな手がかりになると思います。あなたはまず、自分のひどい程度の「脈絡好き」に気づいてください。それは脳が機能していないことの証拠でした。あなたは脈絡を超えていなくてはならない。僕があなたに、「このブスめ、かわいい顔しやがって、死ぬ、百五十歳まで生きろ」と言いますから、あなたはそこに脈絡を探してはいけません。あなたは脈絡を探すのではなく、あなたが僕に"どう答えるか"を探し、発見しなくてははいけません。それを探すとき、脈絡というのがいかに無力か、いやがおうにも理解されるでしょう。

では引き続き第三講にどうぞ。第三講は短くなりますので、このまま勢いで踏み込むことに適しています。

あなたはこの長かった第二講を自分の中でまとめたという衝動に駆られているかもしれません。話が長く、広くなりましたから……ですがそれは、大掃除のときに、まずこの本棚の整理を完璧にしたいという衝動に駆られるのと同じで、最終的な失敗に結びついています。そのことに気づいて、あなたはひとまずここはこのままにして、さらに先を進み、全体を片付けてから、またここに戻ってこられるべきです。講義の終盤に確認問題という意地悪なものも設けてありますので、あなたはどうぞそのときにこの第二講にも戻ってこられるはずです。

あなたの知見を実用的にまとめたという衝動について、きっと僕は今のあなた以上に苦慮を忍ばせているつもりであります。どうかそのことにご高配くださって、しばし僕のことを信用して今は先に進んでください。

第三講

人が最大の情報源である

さ

て前回までの内容を振り返りましょう。情報にはパケット情報と全体的情報があるのでした。パケット情報は"自意識"に入り、全体的情報は"脳"に入ります。情報「量」としては、後者のほうが一兆倍も多い。パケット情報はまるで砂粒のようなもので、IT技術はその情報「数」を集めるのが得意なだけで、ということでした。だから端末でパケット情報数に遊んでいると、自意識では楽しいのに、脳はひどい飢餓状態になります。それによって、自意識が膨らみ、脳は弱くなってしまった人格が出来上がってゆきます。弱くなってしまった脳はもう全体的情報を処理できなくなるので、その人格は「パケット専門人」になってゆく。パケット専門人は、表面的脈絡しか見えなくなり、全体的脈絡を発見できない人になっていく。頭が弱いので、表面上の脈絡から逸脱すると、すぐについてゆけなくなり、それで本当に面白いことや本当にいい人のことを見落としてしまう。そして表面上の脈絡が整っているだけで、悪徳商法や悪い論調にあっさり騙されていってしまうのでした。

"脳の知識"と"自意識の知識"がある。心身に情報を浴び、脳に全体的情報を吸い上げさせることで、人は本当の知識を手に入れていきます。自意識にパケット情報数を与えても、それは本当の知識ではないのでした。たとえば我々の耳が標準語と大阪弁を「まったく別物」とただちに聞き分けるのが脳の知識でした。比べて、「シャンパンとスパークリングワインはまったく別物なんですよ」というパケット情報は自意識のもので、本当の知識ではありません。舌に触れさせてみても「まったく別物」とは感じられないので、それでは本当の知識ではないのです。心身に浴びて得た脳の知識しか本当の知識ではない。たとえば我々にとって、「海苔」と「黒い画用紙」はまったく別物です。ところが海苔を食べない文化圏の人たちにはそれが「カーボン・ペーパー」に見えるのでした。

我々が本当に知っていること……たとえばマネキンの手は模型であって本当の「手」ではない。これはどうやってもだまされない。見た目はごまかせても触れてみれば一撃です。脳にある一兆倍の情報を騙すことはできません。それと同じように、たとえば人の笑顔だって、「これは本当の笑顔ではない」「笑顔の模型だ」と、脳は本来見抜く力を持っている。それは笑顔「ふう」なだけだと見抜いて騙されない。ところがパケット専門人になり、心身から脳へ本当の情報を浴びていないと、人はその笑顔「ふう」にも騙されるのでした。いい人「ふう」に騙される。それで交際すると恋愛「ふう」になり、充実「ふう」になる。けれども「ふう」でしかないので、いつか人は倒れてしまう。「ふう」のものなんて、人は本当は「要らない」からです。自分自身もいい人「ふう」であったなら、何年もかけて、ついに自分自身を「要らない」と感じてしまいます。

それが前回までのお話でした。それで、パケット専門人に好んでなりたい人はいないでしょうから、脳を鍛えなくてはならない、ということでした。ではそれで、鍛えるというのはいったいどうやって、ということになるのですが、それを鍛えてくれるのは、なんだかんだで結局人です。そのことについてお話しする必要がありますだろうということで、この第三講が書かれています。それではどうぞ、簡単な講義です。



人の脳は人間の情報を得意分野にしている

猫はどれだけ居眠りしていても、ネズミの足音がするとただちに跳ね起きて、迷うことなく、音のしたほうへまっすぐ歩いていきます。そして何時間でもそのあたりを周回し、ついにネズミを見つけて捕まえてしまう。これは猫が生きていくために本能に宿された機能でした。猫の脳は、ネズミの物音について情報処理することを特に得意にしていると言えます。

それと同じように、人間の脳にも得意分野があります。人間は、人間同士の集団で生きていくので、人間そのものの情報についてが得意です。例え話をするとこれはわかりやすい。

たとえば透明人間がいたとします。透明人間が、後ろからあなたの肩をぼんと叩いた。あなたは振り返りますが、そこには誰もいません。あなたは驚き、恐怖します。「今のは誰？」と。

でも不思議なことに、そこには誰もいないにも関わらず、肩を叩いたのが「誰か、人の手だった」ということだけは、間違いないと判断しているのです。それは、人間の手が自分の肩に触れて呼びかけてくるときの感触について、脳が情報処理することを特に得意にしているからです。不思議なことだと思いませんか。たとえ満員電車で振り回されて、全身をこづかれるようであっても、その中で肩をぼんと叩かれたら、その感触は「呼びかけられている感触だ」とただちに感じ取ります。

たとえば通学路で、友人に後ろから肩をバシんとやられても、「うわあ」とびっくりはしても、同時にそれが打撃や攻撃でないというのただちに感じ取っています。そしてそのバシンの感触から、それが友人であるか先輩であるか教師であるかというようなことも、感じ取っている。同じ肩を叩くのも、親愛のそれもあれば、何かしらの警告という場合もあります。肩を叩かれた感触だけからでも、その感触がとっさに男性か女性かということも感じ取っているところがある。これに比べると、たとえば壁に立てかけてあったものが倒れる、それが肩に当たったら、「いてっ」となります。そして振り向いて確認しないと、肩に何が当たったのかわからない。人間の手で肩を叩かれたときほどには、脳は情報を豊かに処理していないのです。別に肩を叩かれることに限らず、後ろから「おーい」と呼びかけられたときでも、それが親愛の呼びかけなのか警告の呼びかけなのか用事の呼びかけなのか、ちゃんと感じ取っている。脳はそういう、人間同士のやりとりについて情報処理が得意です。これには合わせて、ツイッターで「おーい」と呼ばれても、それがどのような声なのかはわからないということも見ておきましょう。パケット化した情報は、自意識にはわかりやすくても、脳には豊かな情報を与えてくれません。

あなたの「脳」が、人間についての情報を得意分野にしているということがわかってもらえたと思います。それはあなたに具わった本能でもありますし、与えられた環境でもありますし、その分野こそをあなたは伸ばしてゆかねばならない、というものでもあります。

もちろん脳の機能自体は、どの分野に向けても発達していきます。心身に情報を浴びれば浴びたぶんだけ。たとえば釣りの達人は、魚が針にかかると、その糸を引かれるサオの感触だけで、だいたいかかった魚の種類がわかるのです。これはフグだ、これはベラかな、これはメバルだろう、これはタイが来た、というふうに。ほとんど針にかかった瞬間にわかるようです。釣り人はその糸を引かれる感触を心身に浴びてきたので脳が鍛えられたのでした。

あなたにはそんな釣り人の能力はなくても、ただの人としての能力があります。たとえば見知らぬ子供が後ろからあなたの手をつかんでくいくいと引っ張っても、あなたはその感触をただちに「子供の手だ」と感じ取ります。見間違うわけがない、と。まるで魚が針にかかった瞬間のように、「これはコドモだろ」と手の感触でわかります。あなたにはもともとそういう得意分野があるのですから、脳を鍛えるといえばそこを鍛えるのが第一の選択肢です。

関

わりのある人だけが情報をくれる

とはいえ、駅前ですれ違うたくさんの人が、みなあなたに大量の情報を浴びせてくれるわけではない。はっきりいって、彼らは何もあなたに与えません。それは駅前ですれ違うとき、人は人同士、基本的に無視しているからです。心理学では没人格化というのですが、そのことはまた次回以降にお話しできるでしょう。

簡単に言って、人が最大の情報源であるといっても、あなたと関わりのある人しか、あなたに情報はくれません。あなたの心身に情報を浴びせてはくれない。だから駅前に座り込んで過ぎ行く人の人間観察をしていても何も情報は得られませんし、何も脳が鍛えられはしない。

関わりがあるとはどういうことを指すか。それについてお話しする前に、今一度、このことのご確認をあなたにお願いしておきたいと思います。「関わりのある人だけが情報をくれる」ということ。その関わりは脳の問題であって、社会的な立場の問題ではありません。たとえば家族だって、夫婦だって、教師と生徒だって、情報をくれるとは限らない。あなたと彼が「脳」で関わっていないかぎり、どのような立場の設定も無意味です。あなたがすでにご存知のとおり。

一日中、スマートホンを握り締めていたとします。そして一日中、熱心にネットサーフィンをした。没頭した。丸一日というのではなくても、気づけば半日もそうしていた、という人は少なくないはず。その間、自意識は情報数によって酒池肉林ですから、満足し、興奮し、何なら陶酔しています。でもあなたの脳はひどい飢餓になっています。

これに比べて、誰かの手を一日中握り締めていたならどうか。ときに強く握り、ときに弱く触れる。いたずらでつねってみたり、つねられて、逆にやさしく撫で返したりもする。何も話さずにそんなことをしている。

その穏やかな時間には、何の情報も無いように見えます。ですがそうではないのです。自意識から見たら情報はまったくなしです。が、脳は一日中、豊かな情報を受け取っています。手を握って仲良し、ということではありません。そういうわかりやすい小分け情報の話ではない。

脳は全体的な情報を受け取りますから、その手のつながった先、人の心身、そこにある匂い、取り囲む季節、ソファの感触、温度、呼吸の音、それぞれの皮膚のなめらかさ、細い髪の毛の擦れる感じ、骨と関節の細さとたくましさ、ささやかな動き、肌の茶色みと白さと血の透けたピンク色、空をゆく飛行機の音、遠い雑踏、カレンダーに並んでいるゴシック数字の几帳面さ、そういったものの全てを、小分けにせず丸ごと受け取っています。一方その間、自意識はすることがないのでまるで眠るようになります。

たとえば恋人として関わりがあるというのはそういう状態です。別に恋人同士という立場でなくてもよい。ただ、スマートホンを握り締めていた一日との違いをよくよく見ておいてください。そこにある興奮の違いも。後者の一日には何の興奮もありません。穏やかで、陶酔というのありません。

パケット専門人に、パケット専門の一日があるなら、一方でこれは、「脳専門」の一日を過ごした、と言えるでしょう。仮にこの翌日、友人に「きのう何してた？」と訊かれても、答えられません。「別に何もしてなかった」としか言えない。じっさい自意識では何もしていないのですから答え方は正しい。何をしていたのかはパケット的には説明できません。

「いろいろ見ていたら、あることに興味が出てきちゃって、調べ物してたの、それでちょっとそのことに詳しい友人に相談もして、さっそく通販サイトで注文もしちゃったわ」

スマートホンを握り締めていた一日というのはたとえばそんな感じ。このことには実に問題のない表面上の脈絡があることにも注目しましょう。見ていた→興味が出てきた→調べた→相談した→注文した。これは自意識の一日です。

手を握っていて、人の心身、匂い、取り囲む季節、ソファ、温度、呼吸、皮膚、飛行機、雑踏、カレン

ダー……こちらのほうには何の脈絡也没有。ときどきつねったり、やさしく撫で返したり、というのにも、表面的な脈絡はない。脳の一日に脈絡は要らないのです。注目とか動機とか興味とか結果とか、そういった脈絡の連結は要らない。注目とか動機とか結果とか、別に企業広告じゃないのですから、必要ありません。

脳と脳の「関わりあい」

つまらない図式を説明します。これはつまらないぶんだけ、理解も簡単なものです。人には脳と自意識の両機能があるので、人と関わるということも、それぞれどちらの機能において関わるのかということによって差がある。それは当然ながら次の四通りになるはずで。

自意識－自意識
 自意識－脳
 脳－自意識
 脳－脳

「自意識－自意識」という関わり。これは役所の手続きや、弁護士との法律相談、あるいは何かしらの情報交換会、などがそうです。これ自体は何も悪いものではありません。役所は必要ですし、弁護士も必要です。情報交換も必要なことです。

ただ、これはパケット情報を扱う関わりなので、できれば「コンピューターのような」人のほうが望ましいのです。役所の人や、業務上の専門知識を完璧に知っており、すばやく説明できるということ。弁護士がコンピューターのように過去の判例を頭の中で検索できること。情報交換といって、その情報の持ち主がいまいで不正確な情報しか持っていないのでは役に立ちません。役所や法律事務所に行ったとき、人が一番喜ぶのは、「一瞬で終わっちゃった、さすがにプロだなあ」というときです。こんなものはコンピューターで済めば一番よいので、役所の手続きも次第に電子化が進んでいます。

この関わりにおいては脈絡こそが評価されます。弁護士などは特にそうですね。圧倒的に明瞭で滑らかな脈絡が突き抜けて進むほうが、こちらの関係においてはよいのです。

次に、「自意識－脳」「脳－自意識」の関わり。これは一言でいえば「ちぐはぐ」です。我々に心当たりがあるのは、たとえばサッカーの試合でスーパープレイを見せた、試合直後の選手に向けての、レポーターのインタビューなど。職業上の役目なのでしょうがないとは思いますが、明らかに激しい試合の中で脳をフル回転させたばかりの爛々とした目の選手に、「今後の課題は？」みたいなパケット情動的質問をぶつけるのを見ると、何かちぐはぐだなあと誰もが感じてしまいます。

あるいは、スマートホンを覗き込んでいるところの女性に、ある芸術家が「あのクスノキをごらん、雄大だ！」と指を震わせて言ったとしても、「んー？ ああそうだね、でっかいねえ」と言われておしまいです。これもちぐはぐです。

最後に、「脳－脳」の関わり。本講義で、本来の意味で「関わり」と呼ぶのはこれだけです。脈絡ということには引き続き注目しててください。「あのクスノキをごらん、雄大だ」というのに、「そうね、すばらしいわ」というのは、割と脈絡がつながってしまっています。

「あのクスノキをごらん、雄大だ！」

「風に、潮の匂いが混じっているわ！」

こういうほうが、きっとあなたに感じを掴んでいただきやすい。ぜひアクセルを踏みすぎて、ドライブ

ウェイを走り抜けているところにそういうやりとりが挟まれたらいい。あなたはバツと前方を指差し、見つけたそれに「飛行機！」と勢いのよい声を発する。そしたら彼が、「おれたちや自動車！」と答えてアクセルをさらに踏む。

説明が続きます。さしあたりあなたはここで、人こそがあなたの脳に情報を与えてくれるということ、ただしそれは、自分と関わってくれる人に限るということ、そして、その関わりというのは脳と脳の関わりを言うのだということ、覚えていってください。

さきほど、一日中手をつないでいた恋人同士のことをお話ししました。彼らは恋人同士として関わりを持っている。そのことをあなたが正しく捉えるのに一番スマートな言い方はきっとこうなります。

「彼らは一日中、脳と脳をつないでいた」

単に手をつないでいたというだけではなかったのです。だからそれは、おじさんとホステスさんが腕を組んで歩いているデートは違うのです。

手をつなぐのか、唇をつなぐのか、互いの性器をつなぐのか、その箇所はさして問題ではありません。本当の焦点は、手を媒介にして、唇を媒介にして、性器を媒介にして、脳と脳が繋がられるか、ということにあります。全て、人と関わりを持てるか、ということなのでした。

全体的脈絡は、本当に自意識脈絡の一兆倍ありうる

少し余談じみていますが面白いことがあるのでお話ししましょう。

あなたが僕に「1たす1は？」と訊きます。僕は何と答えるでしょうか。

ふつう、「2だ」と答えます。これは何も間違っていない。脈絡どおりにいくならまさにそのとおり。

ですが、あなたは本当に、それ以外の答え方が無いと思われるでしょうか？

もし、どうしても、それ以外に答え方はありえないように思えたなら、それは残念ながら、あなたの「脈絡好き」が深刻にあなたに染みこんでしまっています。もちろん、 $1 + 1 = 2$ という数学的な解答は変化のしようがありません。でもそういうことではなくて……これはきっと答え方を見てもらったほうがわかりやすいでしょう。

「1たす1は？」

「算数だな」

たとえばこういう答え方もあります。「 $1 + 1$ 」は確かに「算数」です。答えは間違っていない。

あなたはもしこういう答えが返ってきたら、ちょっと意表を突かれて笑うと思います。「確かに間違っていないけど」と。

「1たす1は？」の問いかけに対して、答え方は「2だ」だけではありませんでした。ここではそのことが重要です。あなたの友人が百人いたら、百人とも「2だ」と答える……ということでは、実はなかったということです。

それぞれの場合について、あなたの脳が——死んでいなければ——一瞬に描き出す全体的脈絡の幽玄を、どうか見逃さないでください。あなたの脳は別に表面的な脈絡なんか欲しがっていないのです。

「1たす1は？」

「足し算だな」

「1たす1は？」

「たとえばお前のおっばいだな」

「1たす1は？」

「偶数だな」

「1たす1は？」

「もっとだ」

脈絡を外した答えに触れるたび、あなたの脳はとっさに、「フッ」「フッ」とですが、全体的脈絡を掴もうとするはたらきをするはずで、あなたはの中で、ありもしない正解を、どうか探さないでください。正解といえば「2」しかありえません。ただその正解を堂々示したとして、あなたはその人を「頭がいい」なんて思わないはずで、

「1たす1は？」

「算数だな」

「え？ どういうことですか？」

こういう人はいかにも「頭が弱い」。その頭の弱さについて、あなたは何か「危なっかしい」、「怖い」「不安だ」という印象を覚えませんか。

「1たす1は？」という問いに対して、自意識の脈絡は「2」という答えしか持ちません。けれどもそんな脈絡を外してしまえば、答え方はいくらでもある。一兆個でもあります。だから本当に、脳の情報処理規模は自意識の規模の一兆倍あるのです。

あなたはこのように捉えても構いません。

「脈絡で答えるなら脳は要らない」

まさに1+1がそうであるように、脈絡で答えるなら脳は要りません。電卓で十分です。電卓は、一個しか答えがないとか、二つか三つか、とにかく数えられる程度の答えしかないときに、すばやく答えを出すのに優秀です。その演算をさせたら、人間が電卓に勝てるわけがない。

あなたが男性を飲みに誘ったとき、

「飲みに行きませんか」

「いいね、行こう」

こういう答えしか返ってこない、そういう空間にあなたがいたなら、あなたは存分に残念がるべきです。答えは本当に、二個しかないのか。イエスとノーの二個しかないのか。

「飲みに行きませんか」

「おれビールね」

「注文が早いですよ」

たとえばこうして脈絡をジャンプすると、脳がフッとほらいて、全体的脈絡を掴みなおします。イエスとは言っていないけれど全体にイエスが含まれています。このときあなたと彼は脳でやりとりをしているのです。

あなたは自分の自意識が意地っ張りであることを本当には自分で誇らしく思っていないはずで、いきなりというのはきっとむづかしいですが、あなたは人と脳で関わり、またあなたを脳で迎えてくれる人を見つけ、脳を鍛えていってください。



脳

同士なら全ての人がまったく違う

二人の男性についてお話しします。Aさんは、二十代の男性で、好ましい顔をしており、人当たりがよく、スポーツがそこそこ好きで、仕事熱心ですが、おしゃれのセンスはありません。頼りないところもありますが、人柄はけっきょく誠実です。女性を口説くのは不慣れなのですが、結婚したら奥さんを大切にして、幸

せな家庭を作れたらいいなあと夢に描いています。

Bさんについてお話しします。Bさんは、二十代の男性で、好ましい顔をしており、人当たりがよく、スポーツがそこそこ好きで、仕事熱心ですが、おしゃれのセンスはありません。頼りないところもありますが、人柄はけっきょく誠実です。女性を口説くのは不慣れなのですが、結婚したら奥さんを大切に、幸せな家庭を作れたらいいなあと夢に描いています。

あなたが今読んだのは誤植ではありません。AさんとBさんのことについて正しく点描しました。あなたに不毛な作業を与えてしまって申し訳ないですが、講義のためなのでご容赦ください。

このようなAさんとBさんがいたとして、何がおかしいでしょう？ 二十代の男性……誰だって一時期は二十代です。引きつった顔をしていなければ、ふつう若者の顔は好ましいものです。人当たりはふつう良くするようにしますし、スポーツは誰だってそこそこ好きです。仕事は熱心にするのが当然です。おしゃれのセンスが本当にある人なんてそんなにいません。頼もしい男性なんて世の中に少ないですし、誠実でない男性より誠実な男性のほうが大多数です。女性を口説くのに慣れていないなんて大半が男の思い込みです。誰だって結婚したら家族を大切に幸せにありたいなあとは、子供のころから思っています。

つまりこんなものは、個性でも何でもないのでした。まるで乗用車の説明のようです。乗り心地がよくて、よく走り、そこそ可燃費もいい。長持ちすればいいなと思う。乗用車なのだからそれが当たり前です。

脳が弱くなり、自意識でパケット情報しか処理できなくなると、こういうパケット情報の断片でしか、人を見られなくなります。特に、女性が今でいう「婚活」などで焦っていたりすると、年収がこれこれ以上で、酒と博打はやらない人、たばこはこっちが我慢しよう、安定した仕事をしている人で、女ぐせが悪くない、何歳から何歳までで……と、まるでそのパケット情報に該当する誰かを「さっさと検索で出したい」と望むようになります。

こういう人に話を聞いてみれば、別に問い詰めるまでもなく彼女のほうから白状します。「正直、別に誰でもいいと思うの。ごく普通の、誠実な人であれば」。それは別に責められるようなことではなく、彼女の現在のまったくの本音だと思います。

ただ、「誰でもいいからあなたにするわ」というのを、当の婚活相手に言うわけにいかない以上、やっていることは何かおかしいわけです。明らかに本道から外れている。本音のところでは「正直、誰でもいい」と思われているのに、やれ指輪を買わされたり式を挙げさせられたりしたら、とんだ茶番で、ピエロです。だから、「正直、誰でもいい」というのが本音だったとしても、それに付き合わされる相手は馬鹿馬鹿しいので付き合っていられないし、だからこそ本音を隠して建前を押ししていくわけですが、そうなるともうその建前に騙されるような人としか付き合えなくなってしまう。こんなことはもう、とにかくおかしいわけです。

「正直、誰でもいい。条件にそこそこ当てはまれば」というのは、彼女の本音に聞こえるのですが、本当にはそうではないのでした。脳が弱り、今やパケット情報を自意識で捉えているだけなので、もう「誰でも同じにしか見えない」のです。AさんとBさんがパケット情報ではまったく同じ人間であるように、彼女の眼には多くの人がまったく同じ人間に映っています。

パケット情報での人間認識は、せいぜい「〇〇系」という程度の、組み合わせパターンしかありません。「雰囲気イケメン系で、自営業のややリッチ系？」というように。「萌え系」とか「ツンデレ系」とかいうのも同じです。草食系、肉食系、脱力系、オラオラ系、ちょいワル系、いい人系、母性本能系、職業ならデザイン系とか飲食系とか……パケット専門人はそういうふう人間を認識しています。だから、そのお目当ての〇〇系がある程度当てはまるなら、本当に「誰でもいい」し、正直なところ「誰でも同じ」になります。もうどんな映画を見ても感動は「感動系」にしかありません。ヒューマン系、サスペンス系、アクション系、どんな名作でも〇〇系です。

そのことが、いいとか悪いとかではなくて、脳が弱ると、そう「なり」ます。本人の意志に関わりなく、そういう機能の人間になるのでした。

もちろん本当には、人間には個性がないとか、〇〇系に当てはめて後は同じとか、そんなことはありません。確かにパケット情報しか処理できないとそうなりますが、脳と脳とで関わりを持つ場合は、情報量が一

兆倍も違うのですから、そんなことにはなりません。

仮にAさんとBさんの"脳"を解放したとして、彼らが朝起床して、まっさきに叫ぶことは何でしょうか。たとえばこのようであつたらどうでしょう。

A 「……あああ～カステラが～食いてえ～！！！」

B "...Fuckin' peaceful, shiny day... Ah..."

僕はAさんBさんが必ずしも日本人であるとは申し上げていません。パケット情報がいかにも思い込みを貼り付ける性質があることに注意してください。Bさんは青い眼で金髪のアメリカ人です。

二十代の、好ましい顔の、けっきょく誠実な男性が、ふとカステラを食べたくなり、ブーツを履いて駆け出すのはおかしくないですし、朝の光を喜んだり、そこに言葉のリズムとしてファッキンという語を差し挟んだり、昔から枕元においてあるぬいぐるみの頭を眠気のままに拳でぐりぐり挨拶したりするようなことは、別におかしいことではありません。

このAさんとBさんが「同じ」に見えるのはおかしいことです。

今やAさんとBさんを同じ「〇〇系」でくくれる気がしないように、脳と脳とで人と関わりを持つ限り、個性的でない人間とか、〇〇系でくられて済むような人間は一人もいません。



ケット人間界と脳人間界

日本人の脳には虹が七色に見えます。でも別の国だと四色に見える民族もあるようです。それは色を捉える文化の程度がそれぞれで違うからですね。日本はどうやら青の分解能が文化的に高いようです。青色、水色、空色、群青、藍色、紺色、紺碧、浅葱色、瑠璃色、などなど。日本が青色の情報処理に長けたのはきっと四方を海に囲まれていたからでしょう。大陸の内陸部には、青色といえばきっと空の青しか天然には存在しなかったはず。青色というのは動植物の天然には存在しにくい色で、だから我々は青い食べ物を食卓に見ません。一方で、血液に神の存在を信じる部族などでは、赤色の分解能が文化的に発達しています。

色を専門にする職業、たとえば服飾のデザイナーなどがそうですが、彼らは色に対して脳の情報処理が鍛えられています。色辞典に詳しいのではありません。目で認識する色の分解能が高いのです。色彩官能士と呼ぶべきか、いわば色のブレンダーでしょう。彼らはPCでデザインをしますが、PCのモニターが正確な色を発してくれるとは限りません。それでデザイン用途専用のモニターを使います。色を正しく発色する高性能のモニターです。

でもそれでデザインしたデータを、染色業者のところへ発注に出しても、向こうのモニターが正確に発色してくれるとは限りません。ですから彼らは、高精度に印刷されたカラーパターンを郵便で送ったり、色見本から番号で指定したりします。

その色見本からたとえばシャツを染色するのですが、染色は化学的な工程ですので、これが狙ったとおりの色に染まってくれるとは限らない。染め上がりを見て、素人にはまったく見本と同じ色に染まっているように見えても、プロの眼には「全然だめだ」と映ります。素人にはどう見えても、プロの脳にとってはそれは同じ色「ふう」でしかないのです。

もし、このことになぞらえるとすると、人間の色は何色あるのでしょうか。十人十色といいますが、でももし人間が10パターンしかないなら、百人でも千人でも10色です。

説明のしやすいように、「パケット人間界」と「脳人間界」という、二つの世界があるとしましょう。パケット人間界では、人間は人間をパケット情報の組み合わせで認識します。〇〇系という数十のパターンが

あり、それらを組み合わせることで数百のパターンを作り出します。

ある男性がC子さんのことを好きになります。C子さんは彼から見て、「黒髪の、清楚系で、ちょっと天然の癒し系」でした。彼はしばらくC子さんにぞっこんでしたが、あるときC子さんが髪色を明るく脱色しました。すると彼は途端に熱が冷めます。黒髪の清楚系でなくなったからです。

天然の癒し系かと思っていたが、最近ハスキューバダイビングというアクティブなこともしていることを知りました。彼はますます熱が冷めます。そして彼女は意外と、飲み会ときには煙草を好んで吸うのだという、そのことも現場で見て知ってしまいました。すると彼はもう、熱が冷めるどころか、「もういいわ」、さらには、「煙草吸う女って結局最低だと思う。さっさとやめたほうが自分のためだと思うよ。絶対ビッチくさく見えるし」みたいなことを、どこかに撒き散らします。熱が冷めるどころか、軽蔑と攻撃というあたりまで転じるのです。

これが、冗談でも誇張ではなくて、「マジ」なのだと、僕はもう現時点で言わねばなりません。現代と恋愛という大タイトルでお話をさせていただいています。過去にも勿論そういう人はいましたが、今はもうそれが珍しくないと言わねばならない。珍しくない、どこではない、とも言わねばならない。

彼はC子さんが好きだったのではなくて、黒髪の清楚系、プラスちょっと天然の癒し系が好きだったので。その〇〇系がズレたら、それはもう彼の好きな人ではなくなってしまうのでした。逆にいえば、黒髪の清楚系で癒し系なら、別にC子さんでなくても誰でもよいのです。先ほど婚活女性が「正直誰でもいい」というのを本音にすると申し上げました。それと同じです。

今度は逆に、すでにやさぐれてパチンコ通いが好きな、やる気はないが計算高い女性がいたとします。彼女は最近フリーターから事務職に転職しましたが、業務に要求されるレベルが思いがけず高かったので、「マジはやく結婚して仕事早く辞めたいわー」としか思っていない。それで彼女は友人としゃべりながら、作戦会議のようなことをします。「結局オトコってさあ、清楚系みたいな好きじゃん。おとなしい系で、箱入りっぽいのかさあ。結婚するとしたらそっち選ぶじゃん」みたいなことを結論付けます。そして黒髪に染め直して、「それ系」にイメージチェンジします。

そのようにすると、先ほどの彼ですが、彼はその女性にコロッと騙されるのです。もちろん彼女は彼の前では煙草なんか吸いませんし、パチンコ通いもバレないようにしています。ちょっと天然ふうであるとか、清楚ふうであるとか、その程度の演技ができない女性なんていませんから、彼女もそうします。彼女の友人はその清楚キャラにガラガラ笑うのですが、彼はすっかりその気です。彼女は友人と作戦会議で、「あとはこれで妊娠しちゃえば勝ち組じゃね」「だよ、彼絶対それで落ちるもん」「よーしわたしの卵子ガンバレ〜」「超ウケるんですけど」「だって結婚しちゃえばいたい同じなんじゃん、ぶっちゃけ」みたいな話をしています。「彼、いいんだけどさ、ちょいちょい説教してくるのがウザいよね」「まあそこはキャラ的にしょうがないよね」みたいな話を。

ポケット人間界というのはそういうところ。誇張でも何でもなく。念のため申し上げますと、彼らはそのように「落ちぶれた」のだとは思っていません。もともと"こういうもの"だと思っています。この世界と人間について。

さてでは、もう一方の「脳人間界」のほうから、その猫かぶりの上手な女性を見てみます。猫かぶりは上手かもしれませんが、女性の全てにはその程度の猫かぶりの能力は具わっていますし、それがいくら上手でも、猫かぶりは猫かぶりです。いくら清楚ぶっても、姿勢や箸使いや言葉遣いや目の色まで清楚になるわけではない。清楚「ふう」にできるだけです。脳はポケットの一兆倍の情報量を処理しているのですから、清楚と清楚「ふう」とに区別がつかないわけがありません。

ですから、こちらからは、その女性が「怖い」と見えます。いちいち疑って見ているわけではないのですが、「何か知らないが怖い」のです。何か異様な雰囲気がある。「何かずっと怒っている気がして怖い」と。それはそうです、彼女はずっと猫をかぶり、自身の性格からは不本意なことをしているのですから、不満が溜まっていて当然です。何しろ煙草ひとつでさえ隠し持って隠れて吸わねばならないのですから面倒くさくてかなわないでしょう。またそういう面倒くさいことが本来大キライなのが彼女の性格です。

仮に、僕と彼女が正直に話し合うことになったら、僕は彼女に、「それって幸せになれるのかなあ」と、単純な疑問を呈するでしょう。そしたら彼女はきつと——僕は何度もこれを聞いてきました——「だって幸せとかって、わっかんないんだもん」と答える。そういうことはとても多かった。彼女にだって疑問がないわけではない。そして僕は立場の無い干渉が正義とは思えないので、ポリシーとしてそれ以上は不干渉を選びます。たとえ黄金に価値があったとしても、何にでも黄金を塗ってよいとは限らないと、僕は思うからです。彼女の人生は最後まで彼女の人生であってほしい。「わっかんないんだもん」と言われたら、僕だってわっかんないです。

立場の無い干渉が正義とは思えないので、僕はふだん、こういう干渉的なことを言いません。だからこそ、これは「講義」だと繰り返し申し上げてきています。講師と受講生という立場においてなら、僕はこの干渉的な話をしうるでしょう。あなたはぜひ、パケット人間界などに行くことなく、脳人間界に居てください。

パケット人間界が〇〇系の組み合わせで数百の人間認識パターンを持つなら、こちらは数百兆の人間認識パターンがあることとなります。そこまで拡大してあるものはもうパターンとは呼びません。あなたと同じ系の人など存在しませんし、あなたはパターンの中のどれかではありません。

そして同時に、あなたにとっての誰かも、一人として「〇〇系」などではない。一人一人が、パケット情報処理などでは済ませられない、巨大な情報の塊です。

その上で、この脳人間界において、脳と脳とで人と関わりを持つということの、インパクトの大きさを見てください。巨大な情報の塊と巨大な情報の塊が接続するわけです。しかも人間の本能は、その人間の情報を吸い上げるのを一番得意としているのでした。それは巨大な掛け算になるでしょう。

だからこの第三講のタイトルは、「人が最大の情報源である」でした。人こそが最大の情報源であり、その情報処理が脳を鍛える。それはあなたが人を鍛えるということでもあります。あなただって人に対して最大の情報源です。だからどうぞ、人の心身に巨大な情報量を浴びせるようであってください。

そのような形で、あなたは人を必要としていますし、人もあなたのことを必要としています。あなただけが人の手を握るようなことはできず、そのためにはあなたの手も人に与えねばならないのでした。

「もう一通り知っている」という典型例

ひとつわかりやすいお話をしておきます。パケット人間界では、しょせん数百程度のパターン化で人間を認識していたと言いました。〇〇系の〇〇系、というふうにです。でもこれらのパターンはあまりに有限です。すぐに枯渇します。枯渇するとはつまり、「もう一通り見たし、一通り知っている」という状態になることです。これはパケット人間界に起こる典型的な心境ですので、指標に知っておくとよいでしょう。パケット人間界では、だいたい二十代の中頃までにでしょうか、用事とストレス発散以外にはもう人と会う理由を失います。「もう一通り見た」と。体験すべきパターンが枯渇するのです。

それはたとえば、「もし世界中の飲食店全てが、限定的なチェーン店に支配されたらどうなる」と、想像される様相に似ています。もう世界中のどこに行っても、すでに行ったことのあるチェーン店です。なんだから、工夫はしてあっても、〇〇系列チェーンの同じ味しか結局しない。アフリカに行こうがヨーロッパに行こうが同じです。これはつまらないですね。外食に行こうという気がなくなります。用事がストレス発散しに行くかたし、もう外食というのは行かなくなります。初めのうちは便利で楽しくても、すぐに全てが「もう一通り食べた」になってしまいます。

もし人間がそんなことになってしまったらどれだけしんどいことでしょう。新入社員が来るたび、いちいち初対面からやりなおさないといけない。どうせ何の変わりばえもないのにです。初対面のストレスしかそこにはない。でもパケット人間界というのは本当にそういう世界です。一通り見てしまったら、後はもう人

がどう入れ替わっても、新しい体験なんか無いのです。それでもそのあと何十年間も生きるのですから、それはもうしんどい。「付き合ってもさあ」「デートしてもさあ」「セックスしてもさあ」と、もうやるべきことが枯渇しているのだからその先にはおっくうさしかありません。

何もかも「もう一通り見た」「もう一通り知っている」という感じがするのは、脳が弱まったときに現れる典型的な症状です。それで対処法があるわけではないですが、自分に対する診断に、このことは指標として使えるでしょう。

第 三講は以上です。お疲れ様でした。

そろそろ、一息入れましょう。たくさんのお話していますが、本当にはそう広大な話はしていません。どこまで行ってもあなたの「脳」の話です。現代と恋愛、という大タイトルですが、何のことはない、現代は脳が弱くなる時代で、脳が弱くなると恋愛には大変まずいという、それだけの話でした。

「田んぼ」には何が必要でしょうか。肥料は必要かもしれません。でも第一に必要なのは水です。あなたは農家さんが田んぼに水も入れずに肥料だけ熱心に入れていたらどう思いますか。それは間違っているでしょう。「田んぼ」というものの機能を生かすにはそういう使い方はしないはずです。

あなたの脳はちょうどその「田んぼ」のようなものです。水はどうやって入れますか。ホームセンターや農協で買ってくる、わけではないはずで、田んぼにはもともと水が引いてあって、あとはその水門を開くだけです。

ところが現代、肥料が発達したために、人人は肥料にばかり関心を持つようになりました。それでいつの間にか、水のことを忘れてしまったのです。稲はどんどん枯れていきます。それでどんどん肥料を足すのですが、稲が枯れるのは止まらないわけです。

長い間、水に触れていないので、農家さんは「水ってどれだ？」という状態になっています。それでホームセンターに買いに行くようなことをする。でもそこで何かを買ってきたら、それはまた肥料です。水門の開け方もよくわからなくなっていますし、何より、「水には何の栄養もないのだから、稲が育つわけがない」「脈絡がない」と思っています。「むしろ水を入れたらせっかくの肥料が薄まってしまう」とも。

その田んぼはあなたの持ち物です。が、あなたの「思い通りになるもの」ではありません。ここには重大な差があります。どの肥料を買うかとか、どの程度撒くか、というようなことは、あなたの思い通りにできます。けれども、あなたの田んぼが稲を育てるといのは、田んぼの機能であってあなたの機能ではありません。あなたは田んぼを扱うことができるだけで、あなた自身が田んぼになれるわけではないのです。あなたの頭から髪の毛の代わりに稲が生えてきたりはしないように。

あなたは自分の田んぼをまず眺めてください。それは自分のものですが、もともとは、自然に与えられたものです。あなたの脳もそれと同じなのです。あなたの脳も、もともとは自然に与えられたもので、そこで作物がどう育つかというようなことは、あなたの思い通りにはならないのでした。ただあるのは、正しい扱い方だけです。最も重要なのは水を入れることです。田んぼの水を枯らした状態で、あなたがどう歯軋りしても、それで稲が実ったりはしません。

そういうことを、ずっとお話ししています。では一息入れられたら、第四講へどうぞ。あなたが、半ばヤケクソでもいい、水門を開いて田んぼを水まみれにする、そして肥料はやらないという、ひと夏を過ごされるかどうかは問題です。

第四講

営みの魅力が失われる



こまでの復習を少ししましょう。ある意味、当たり前のことばかり話しています。標準語と大阪弁をあなたは聞き間違えるわけがない。マネキンの手と人間の手を、握って区別できないわけがない。東大生がハモとサヨリを間違えることはありえても、お母さんがそれを間違えるわけがない。日本人のあなたは、海苔をカーボンペーパーに見間違えることもなければ、三味線をギターと見間違えることもありえないのでした。「どう違うのデスカ？ ヒョウジュンゴと、オオサカベンハ？」。外国人にそう聞かれたら、説明はしにくい。けれど、あなたの脳は間違えない。「だって全体的に違うもん」。脳はそうして"全体的"情報を処理しており、それは自意識のするパケット情報処理とはまったく機構が違います。脳は心身に浴びた情報を全体的に吸い上げるだけなので、あなたは仮に誰かに説明されても、イギリス英語とアメリカ英語の訛りの違いに自信がもてません。それは標準語と大阪弁のように英語を心身に浴びていないからです。

模型の手と本当の手は区別がつくのに、模型の笑顔と本当の笑顔の区別がつかないということがある。模型の愛情と本当の愛情の区別がつかないことがある。なぜそんなことになるかということ、言うほどそれを心身に浴びてきていないから、脳がその全体的情報を知らないのです。模型のそれと本当のそれは「どう違うのデスカ？」と訊きたくってくる。ですが訊かれても説明はしにくい。「だって全体的に違うもん」としかいえない。全体的情報は、情報量としてパケット情報の一兆倍あるので、それをパケット的に説明しきすることは不可能です。

パケット情報をすばやく取り扱うのに、便利なテクノロジーの革命が起こりました。IT革命です。これは大いに便利で、またパケット情報を処理する自意識機能を大いに夢中にさせました。夢中になり、そのぶん自意識は発達します。ところが一方で脳の機能のほうは長い飢餓にさらされることになりました。飢餓によって脳は弱くなっていく。それはやがて、弱りきった足腰のように、もう本来の機能を失ってしまいます。そうすると自意識の機能が残るだけで、こういう人はもう自意識だけの人、パケット専門の人、という具合になります。

パケット専門の人は、パケット情報だけを処理し、また自身もパケット情報のみを発信します。これらの人同士が多く交流することで、そこにはパケット人間界が生まれました。パケット人間界ではパケット・コミュニケーションが行われ、一方の脳人間界では全体的・コミュニケーションが行われます。パケット情報と全体的情報では情報量として一兆倍の差がありますから、そこにある両者を「どちらもコミュニケーションだろ」とは言えません。どちらにも人同士の関わりがあるには違いありませんが、「どちらも人の関わりだろ」とはやはり言えない。

現代と恋愛という大タイトルです。恋愛は、人の関わりであり、コミュニケーションであるに違いない。でもそれを自意識が担うか脳が担うかで、そこにある関わりとコミュニケーションはまったく別種になるのです。あなたは選べるならどちらを選びたいか。その選択は簡単です。ですが、その選択は簡単ですが、実現は簡単ではありません。特にこの現代においてはとてもむつかしくなりました。とはいえ、簡単でないからあきらめよう、ともあっさりとは言えない。そういう話をしてきています。

では第四の講義を始めましょう。人人はこれまで無条件に恋愛をしたいものだと思われてきました。けれども本質を言うなら、人は"脳をやりたい"のであって、単なる恋愛をしたいものではありませんでした。恋愛に限らず、全ての営みは、"脳をやりたい"ということだった。ところが現代は全ての営みが自意識化しています。それで、現代に営みは残っているし、何なら活性化もしているのに、営みの魅力は失われているのです。



脳に触れられるよろこび

あなたにとって最も有益な講義になるために、あなたはひとつのことを鵜呑みにする必要があります。それは人間にとって「脳に触れられることはよろこびである」ということです。夢のように美しい景色があり、すばらしい清涼さの空気が吹き抜けています。遠く活気のある市場から外国語の雑踏が聞こえる。「なんて美しいのかしら」とあなたはわけもなく震えて感動する。このようなとき、何がどう「良い」というのでもないのです。全ての情報が脳に受け取られて、身の回りの全てがあなたの脳に触れてくる、そのことがひたすらよろこびなのでした。

コメディアンがいわゆる「ボケ」をかまします。コンビニで客が雑誌を買う。店員がそれを会計し、「こちら暖めますか」と訊く。客は「なんでやねん」と突っ込む。これは初歩的ないわゆるボケと突っ込みですが、この漫才がわずかにでもあなたを喜ばせるのは、あなたの脳にこれが触れてくるからなのです。コンビニで雑誌を買うというところまで脈絡は正しい。店員の接客態度も脈絡は正しく、店員のそういう口調をわれわれはよく知っています。ただ一点、雑誌を暖めるというのはおかしい。そこだけ脈絡が壊れているので、そこだけあなたの脳に入り込んでくるのでした。気の利いたツッコミなら、「なんでやねん、暖めたら記事がホットになるんかい」とでも言うでしょう。つづいて店員が「そんなわけないでしょう！」と急に笑う。ツッコミが「いやいや、お前が初めに暖める言うたんや」と重ねて言う。

これは脈絡と非脈絡を混ぜ込んであなたの脳に触れてきているのです。脈絡としては、雑誌を加熱しても記事の内容は変化しません。当たり前です。が、脳の側は、加熱する→ホットになる、という脈絡を「全体的に成り立つな」と認めてしまう。だから可笑しい。同時に、そこは脈絡が壊れているのに、言い出した当人が急に「そんなわけないでしょう！」と脈絡の立場に戻る。そして彼が脈絡の立場に戻ることが、今度は脈絡が合わないので、これもまたあなたの脳に触れてくる。漫才というのもそういう機構で成立しています。漫才師はもちろんそれをパケット情報化して分析しているのではなく、脳で“全体的”に発想しているのでした。

まだ少年のような特攻隊員が出撃していく飛行場があります。あなたは女生徒として彼らの出撃を見送ります。隊員たちの表情はどのようであったでしょう。今から死に行くという悲しみを表しているか、投げやりになっているか、あるいは死んでやる、殺してやると、闘志に燃えて怒っているか。

でもあなたが見上げた先、隊員の誰かはさわやかに、透き通った笑顔であなたを見返してきました。むしろ彼のほうこそ、あなたのことを気遣うような、やさしく思慮深い眼差しがあった。あなたは、「元気でいなさい」という、彼の声を聞き取ったような気がした……

そのようなとき、あなたはそこにもものすごい物語を見つけるのでした。今から特攻にゆき、もう帰ってこないというなら、そこにさわやかな笑顔や人を気遣うような眼差しがあったらおかしい。脈絡としては合わないことになります。ですが、あなたの脳はハッと気づき、そこにあるもっと大きな全体的脈絡に到達するはず。じっさい当時の記録には、そうして超克した笑顔で飛び立っていった少年たちがいたという記述もあります。

このようなことはいくらかでも例があります。例があるというよりは、見逃せない全てのことはこれで成り立っているのですから、あまり例を挙げていってもキリがありません。だからあなたには、なにはともあれ、最短経路としてこのことを鵜呑みにし、鵜呑みにしたら直ちに納得していただく必要があります。「脳に触れられることはよろこび」です。



脳

的会話とパケット的会話

男が「好きだよ」といい、女が「わたしも」と言う。それで二人は抱きしめあう。これは悪くないように見えますし、実際悪くありません。なかなかよいものです。ですが、そこには脈絡が成立しています。好きあう二人が抱きしめあうのは当たり前のことですから。もちろん脈絡があるのが悪いわけではなく、ただ「脈絡しかない」ということについて、あなたには慎重になっていただく必要があります。

男が「バカ」といい、女が「バカ」と言い返す、ところが、二人はそのまま抱きしめあった。とするとどうでしょう。こちらは脈絡が合いません。脈絡が合わないのに、「あれ？」と、あなたはここに何か本当に愛し合う二人の気配を感じ取るはずです。彼女は夜眠るときに、彼のことについて、「もう、いつもバカだね、わたしの大切な人……」と心につぶやきながら眠ります。脈絡で言うなら自分の大切な人をバカ呼ばわりするのはおかしいことです。けれどももちろん、あなたは彼女のその心につぶやきに、否定的な気持ちをぶつけようとはしないのです。

人間は自意識の機能と脳の機能を持っています。そして自意識だって大事です。自意識がなければ青信号を「進んでよし」とは判断できないのですから、社会的に生きてゆけない。ですが、自意識の機能と脳の機能、その両方があるのに、自意識「だけ」、脈絡「だけ」というのでは、営みが片手落ちになっています。それは例えるなら、「ドライブに行こう」と言って、ドライブの一日中、決して車から降りないというような偏りです。確かにドライブというのは車を乗り回すことを一般に言います。でも「ドライブなのに車から降りてどうする」と、彼が大真面目に言ったらどうですか。その人はただのアホじゃないですか。確かにドライブという言葉を厳密にみたら、車から降りないほうが脈絡としては正しいのかもしれない。でもあなたは、その脈絡「だけ」ということのむなしさについて、きっと彼に説明する気もなくなるでしょう。

脈絡を、わからない人はもちろん困り者です。赤信号で飛び出したら事故になるという脈絡がわからないではひたすら困る。でも脈絡というのはあくまで人間の機能の片方でしかない。しかも小さいほうの機能であり、ずばり行って本質の側の機能ではありません。だって本当は、信号など無いところを走るほうが楽しいのですから。

脈絡なんかにこだわることはないのです。ドライブの最中、海岸線に叙情的な単線電車がゆっくり走っているのを彼がを見つけました。「あれ、乗ろう！」。そう切り替えたって何もおかしくない。車なんかそのへんに停めてしまっ。

それで遊んで帰ってきて、「いやあ楽しい"ドライブ"だった」と彼が言えば、あなたはきっと「そうね」と笑って喜びます。「おれは運転が上手だったろ」と彼が言うと、あなたは「しびれちゃった」と答える。彼は「早く煙草を吸わないと酸欠気味だ」と言ってもいいし、「冷静になるためにまずビールを飲もう」と言ってもいい。そしてあなたを押し倒して「この犯罪者め」とあなたに言ってもいい。そうして脈絡を外されるたびにあなたの脳は新しい全体的脈絡を結びます。それはあなたのよるこびです。

脈絡においては、1 + 1 は2だという話を前回しました。それは世界中誰に聞いたって同じ会話になりますが、あなたと彼のデートにおける会話は世界中のどこを探してもありません。それはあなたと彼だけの会話です。脈絡を外したとき、人の脳がどう遊ぶかということに、その人の個性が表れてきます。その個性を互いにぶつけあい、それを重ねていくことで、二人だけの"特別な脈絡"というのが育ってゆきます。

彼の脈絡というのはテレビ裏に電気配線をするときにだけ発揮されればよいのです。こんなものは、彼がやっても父親がやっても電気屋がやっても同じです。配線の仕方は電気物理の脈絡においてひとつしか選びっこない。

僕とある女性と、年少の男性とが、お店でお酒を飲んでます。あるときアクシデントで、女性がロング

グラスを倒してしまいました。そのとき僕は、彼女の隣にいた年少の彼を責めることにしています。もちろん責められた彼にとっては、一瞬何のことだかわかりません。

でも僕が、「いかなる理由があれ、女性のグラスが倒れたら、それは隣にいる男の責任だ」と言います。そう言うと、全体をハッと気づく男性がいましたし、また、「よくわからないんですが」と理解に苦しむ男性もいました。

その全体をハッと気づくということを、これまでもっとも鮮やかにしてみせたのは、ある十八歳の男性でした。まだ子供のようなところもありましたが、彼は実に賢い少年だった。

「いかなる理由があれ、女性のグラスが倒れたら、それは隣にいる男の責任だ」。彼はこれについて、直後、まったく鮮やかな表情に切り替わって、「まったくそうですね」と言いました。そして彼は倒れたグラスと周囲を手早く片付けてから、「たいへん失礼しました」と、その女性に小さく頭を下げたのでした。まだ子供のはずが、見事、女性に「物も言わせぬ」凛々しきで、それを押し切ったのです。

もちろんグラスを倒したのは彼ではありません。彼がそうして謝罪する脈絡はありませんが、じゃあこの少年は「バカ」でしょうか？ 彼には何の魅力もなく、彼の振る舞いは意味不明の無脈絡で、ひいては、そこに起こった営みには何の魅力もなかったのでしょうか。

僕はそうではないと思うのです。そしてこれは"講義"なので、「そんなわけはない」と僕はあなたに言うのでした。

ふつう女性がグラスを倒せば、隣の男性は気遣って、「大丈夫？」「濡れなかった？」「気をつけなよ」「いいよ、おれが拭くから」と言ってくれます。重ね重ね、それは何も悪くない。ですが、そろそろズバリ言いましょう、それは実は面白くもなんともないのです。僕にとってではなく、あなたの脳にとって。その彼のいい人ぶりはわかりますし、いい人だなあとあなたも思うのですが、喜ばしいように見えて、実は脳はなんにも喜んではいないのです。

この講義があなたに有益になるように、言い方をこう工夫もしてみましよう。あなたの脳の話ですが、「あなたの脳がそんな簡単に喜ぶと思ったら大間違いだ」。いい人だったとか、気を遣ってもらえたとか、好意的に振る舞ってもらえたとか、そんなことは、あなたの自意識を喜ばせるかもしれませんが、あなたの脳を喜ばせはしないのです。

「そんなチマチマしたことでああなたの脳が喜ぶかよ」。はっきり言って、男がいい人ぶるのは一時的にもすごく簡単なことです。女性がいわゆるぶりっ子をしたり、天然っぽく振る舞ったりする、その一時的なことと同じぐらい、男がいい人ぶるのは簡単です。そんな簡単なことでああなたの脳は喜んでくれない。できるのはせいぜい、あなたの自意識をだまくらかしてあなたにゴマをするぐらいのことです。グラスが倒れたのは隣の男の責任、そうでなければ重力の責任です。「女がグラスを倒すわけがないだろ？」。せめてこれぐらい脈絡は壊していかないと、あなたの脳は喜んでくれないのです。

恋愛であっても、それ以外のことであっても、人の営みは、脳の営みであることに魅力があります。営みのジャンルに魅力があるのではありません。ですからいかなるジャンルであっても、またそこにいかに良心的な態度を盛り込んでも、そこに脳に触れてくるものが無いかぎり、営みは魅力を失っていきます。



脳と自意識とはセックスまで変わってくる

講義なのでこのことははっきりお話ししておきましょう。自意識でも脳でも、どちらでもセックスすることはできます。が、自意識でするセックスは別に楽しくありません。これははっきり申し上げてよいことです。楽しくないし、別に言うほど気持ちよくありません。

パケット人間界のセックスと、脳人間界のセックスは、まったく別物です。セックスは本来、互いの全身を互いの全身に、生身で浴びせあうものですが、そうして浴びせたところで、パケット専門人はすでにその浴びせられた情報量を脳で処理することができません。だから官能がないのです。

あなたの思い込みを破壊するために、強調しなくてはならないのはこうです。「セックスは身体であるものだから、それは脳うんぬんと関係ない」というのは誤解だということです。キスにせよ愛撫にせよ挿入にせよ、その具体的な感触が変わります。「身体であるものだから関係ない」というのは大嘘で、人間の身体というのは、脳と全身がつながっている全体をさして「身体」というのです。

あなたがベッドに寝転がったとき、シーツの感触は気持ちよいでしょう。ですが、そのベッドの中に入っている綿やスプリングは関係ありませんか。あるいは地面がナナメになっていてもベッドは気持ちいいですか。そんなことはないはずで、水平の床の、清潔な部屋に、どっしりした造りの土台があり、しなやかなスプリングが機能していて、それが綿を支えて、上にシーツが敷かれていること、それが「ベッド」であるはずで、人間の身体というのも、そうして内部の機構である脳との接続まで合わせてを「身体」と言うのです。

中のスプリングがぐにょぐにょで、バネに穴が開いているようなベッドを、「別に中身は関係ないでしょう」と、あなたは高値で売りつけられてよいのでしょうか。あなたは納得しないはずで、あなたを包み込むような、というなら、別に身体の大きな人間なら誰でもできます。身体の問題は脳の問題とは別だというのは、あなたを包み込むためならゴリラでいいだろというような話の仕方です。

セックスは身体であるものですが、身体とは脳と全身の接続された全体のことを指します。

パケット人間界では実際のところ、たとえば男性はもう、女性とセックスするより"オナホール"のほうが気持ちいい、と断言しています。彼らは強がりです。それを言っているのではなく、本当に正直な本音としてそれを言っています。そういう器具はシリコン技術の発達に合わせて発達していっているでしょうから、単なる人間の粘膜より具合良く作り上げるのは難しくないことでしょう。女性のヴァギナよりもオナホールのほうが気持ちいいのはいっそ「当たり前」だと言ってよい。女性のほうもすでに、電動のマッサージ器を股間に押し当てられるほうが「たまらなくいい」と正直に告白してやみません。彼女らも嘘を言っているのではない。電動器具のような、細かく安定した刺激を、人間の手指で作り出すのは不可能ですから、いわゆる「電マ」のほうが気持ちいいのは当たり前です。彼女らが求めるのはただ、それを男性の手によって股間に押し当てられるという淫靡な雰囲気作りだけです。淫靡な雰囲気は、自意識を陶醉させるので、より電動の刺激に没頭するのに具合が良いという、ただそれだけのことでした。

針で皮膚を刺されて痛くない人間はいません。それと同じように、性感帯を摩擦なり振動なりさせられれば、その感触は当然にあるのですが、その感触自体は別に大したものではないのです。男性は射精するときの筋肉の動き、女性も似たような筋肉の動きでオーガズムに到達しますが、これだってただ筋肉の動きにつれて快感が伴うというだけなら、正直どうでもよい。それはどうでもよいことなので、人は自慰をしたり器具を使ったりして、遊んだり気を紛らわせたりします。それはカラオケ遊びと似ています。ワーツと声を出せば、すっきりしますし楽しいです。またそれを聴く側もヤンヤンヤとやる、これだって楽しい。

でもそれは歌手や音楽家が歌うというのとは違います。技術の問題ではなくて、「何か根本的に違う」ということを、あなたはどこかで知っているはず。特に往年の歌手の名前は、一種の伝説のようになり、音源と共にその名前は保存されています。彼は声と歌を通して、多くの人人と脳でつながれる人たちでした。優れた歌手のレコードを数回聴いていると、聴き手は不思議なことに、その会ったこともない歌手について、「自分はこの人のことを知っている」という感触を得ます。まるで古くからの友人のように、その人のことを「知っている」という感覚になる。それは彼の声と歌を通して、脳と脳とがつながりを持つことができたのでした。脳の処理できる情報量はパケット情報の一兆倍もあります。それだけの情報を脳が得たなら、自分は今彼のことを「知っている」のです。これに比べれば、履歴書やプロフィールのパケット情報がいかに大量に書かれていたとしても、それらが一兆ページもあるわけではなし、パケット情報では誰かのことを「知っている」という状態には到達しません。

歌手の歌声がカラオケ遊びの歌声と感触が違うように、脳人間界でするセックスとパケット人間界でするセックスは感触が違います。触れる指先や唇や性器の感触が具体的に違うのです。歌手の歌声と同じように、あなたはそれを体験すれば、やはり「何か根本的に違う」と感じます。その何がどう違うか、パケット化して誰かに説明する必要はありません。ただ、何かが根本的に違うわけで、だからこそ、そこに電動の器具を使うような遊びは、本質的じゃないし、ほどほどにしてよ、ということになります。最近では歌手といっても、人間の声を非常に上手に真似てあるボーカロイドというのが出てきました。それはとても聴きやすい声に聴こえます。でもこれもいわば電動器具のひとつです。彼の愛撫より「電マ」のほうが気持ちいいという、パケット人間界の感覚なら、やはりボーカロイドのほうが気持ちいいということになるでしょう。

そして、歌手の歌声がそうであるように、脳と脳をつないでセックスができたとき、あなたはやはり「自分はこの人のことを知っている」という感触になります。たとえ、名前も知らず、年齢も職業も住所も知らなくても、自分はこの人のことを知っている。パケット情報はゼロでも、全体的情報を直接得たからです。自分はこの人の「何を知っている」とは言えない。そういうパケット化で説明できるところは何もない。ですが、自分はこの人のことを知っている、そのことには間違いない感触が残ります。

人間は古代にも暮らしていましたし、国や地名や民族名がまだ定められていない時代であっても、彼らには彼らの「地元」があったでしょう。自分のよく知っている町、あるいは村。それが「何であって」「何を知っているのか」ということは説明できません。まだパケット化された情報が与えられていないのですから。ただ彼が自分の生まれ育った町や村のことを知らないわけがない。

あなたも一度、自分の地元のことをスマートホンで検索してみたらよい。それなりに情報がワッと出てくるはずですが、でもそれらのパケット情報を見て、スマートホンはあなた以上にあなたの地元のことを「知っている」と言えるでしょうか？ 仮にSFのように、神経を直接インターネットにつないで、ダイブした電脳世界からダイレクトに情報を得られたとして、その人はあなた以上にあなたの地元の町を知りえるでしょうか。秋の夕方に駅から路地をいくとビル風が強くて雰囲気は暗くなる、身体が冷える。でもなぜかそれがきらいではなかった……というようなことを、ネットダイバーは得ることがあるでしょうか。

脳人間界でのセックスではそのようなことがあるわけです。この人に触れると、何か不安な気持ちになる、身体が冷えてプラスチックのようになる、でもなぜかそれがきらいではなかった、身体の内側だけが熱で溶けそうになる……というようなことを身体で得ます。そして地元のそういう町を知っているように、彼のことを知っている、という状態になる。

それが、生を豊かにするということであり、そして「脳に触れることはよろこび」なのでした。セックスに限ったことではありませんが、「セックスはこういうもの」「性感帯を刺激すると、男性は勃起し、女性は濡れて」「刺激を加え続けるとオーガズムに到る」「愛し合っているからそれを確かめあうためにするのよ」みたいなことは、全てパケット情報です。脳が弱った人がこれに頼るだけです。パケット人間界でセックスをいくら重ねても、セックスについてのパケット情報が無数に得られるだけで、セックスを知ったり誰かのことを知ったりすることがありません。そのようなことに官能はないのでした。



仮

説、娯楽メディアの変質

パケット専門人が増え、パケット人間界が人口の全体のうち多くを占めるようになったとします。すると、たとえばマスメディアは「マス（大衆）」のメディアなので、以降はパケット人間界向けに情報を発信することになります。それは彼らの業種形態なのであるが、娯楽情報を発信するとして、これまで脳に触れてくる娯楽であったものを、自意識に触れるような娯楽に切り替えていかねばならない。

そのことが今まさに、我々の知っている範囲で進んでいます。中には完了しているところもあります。

たとえば、マスメディアのうち、テレビはよく漫才を娯楽としてオンエアします。ところが、パケット人間界は自意識専門の世界で、基本的に脈絡を最優先するのに対し、漫才の本質は脈絡を外すことにあります。では、漫才があまりに大きく脈絡を外すことがあると、パケット人間界からは「意味がわからない」と言われるようになってしまう。かといってももちろん、その脈絡を外すところが冴えないと、今度はそれ自身が漫才ではなくなってしまうから、今度は脳人間界から「面白くない」「漫才じゃない」と言われてしまうこととなります。

その二律背反を整合させるにはどうするか。それにはたとえば、漫才に審査員をつけて、その獲得スコアを競争させる、というようなやり方があります。漫才そのものは脈絡を外す娯楽であっても、その審査結果、獲得スコアを競うというのは、競技であって脈絡の範囲内のことです。審査員が何点をつけたか、その総計はどうで、誰が結局一位か、そのことは単純な数字の算数なので脈絡の外れようがありません。自意識の側にもわかりやすいことです。

だから、実際のこととして、漫才やコントと言ったものに興味がない人でも、その「グランプリ」には興味を持ちます。漫才の内容は見えていないが、審査結果が出たとなったら、「誰が一位になったの？」ということは聞きたがる。それで、その一位の漫才を観たいかということ、「それは別にいいや」というのです。あるいはそれを観るにしても、「審査結果は妥当だろうか？」という視点でそれを観ます。それは純粋に漫才が好きな人の見方ではもちろんありません。

今のところ、そういうグランプリがあったら、果たして全体のうち何割の人が、そうしてスコア競争をメインに観ているのか、実際には誰にもわからない状態です。仮に、そうしてスコアで評定する「漫才グランプリ」と、評定をしない「漫才大会」が、まったく同品質で同じ時間にオンエアされたとしたら、人人はどちらを好み、またどちらに注目を集めるのか。もし実験できたら興味深いですが、きっと勝つのは今グランプリのほうです。わからないというのは、その両方でどれほどの差がつくのかはわからない、ということでしょう。

もちろんこのことは漫才やコントだけの話ではない。

あなたにひとつ、イメージでけっこうなので、「怒った人の顔」というのを、想像してください。許せない！と怒っている顔です。簡単な空想だと思います。この空想がこの先あなたの理解に少し役立ちます。

たとえば「刑事コロンボ」というアメリカのテレビドラマがありました。ピーター・フォークという名優が刑事を演じています。演技が達者すぎて、もはや彼をフォークと呼ぶ人はいなくなって、どこに出ても「あ、コロンボだ！」と呼ばれるようになってしまいました。それほどの名演がそこにはあったのです。すでに他界されて故人ですが、亡くなられたときにはロサンゼルス警察から「偉大な同僚の死を悼む」というコメントが出されています。

さてこのコロンボ警部なのですが、普段は温厚で、素朴な、田舎っぽい、穏やかな人です。それでいて事件の捜査となると、頑固で、手のつけようがないほどまっしぐら、ということもあるのですが。それにしても、コロンボはどう見ても怒りっぽいような男ではない。非常に好感の持てる、困り者だが憎めない人です。

ところがこのコロンボ警部、殺人犯に自分がおちょくられるようなことがあったりすると、内心ではものすごい怒りの炎を燃やします。また、訳あっての殺人というのでない、情状酌量の余地がない身勝手な殺人に対しても、その怒りは燃え上がります。そして特にですが、自分の犯人への追求が間に合わず、犯人に第二の殺人を許すことになった場合、コロンボはもう猛烈な怒りの炎を噴き上げます。犯人を「許せない」と感じ、また自分の力不足で罪の無い人を死なせてしまったと、自分自身に対しても「許せない」のです。

こうなるとコロンボは、もう犯人と刺し違えてでもこいつを有罪にしてみせる、という血相になります。コロンボは全身全霊のプライドの炎を噴き上げて、犯人と正面衝突する。

……なのですが、このときのコロンボの「顔」はどうかというと、別に怒りに引きつったりはしていません。「ああこの人の顔は怒っているな」という、記号的な表情が出てくるわけではないのです。

ただ、明らかに気配が違う。コロンボの詰め寄り方、話の切り込み方、動作、目の色、使う言葉、口調、声、全てがもう、「温厚なコロンボ警部」ではない。怒りに煮えたぎっているのがわかる。温厚なコロンボが突如本性を露わにしてきたので、犯人もさすがに青ざめます。これからコロンボ警部を甘く見た報いを受けるであろうことを、むしろ犯人が一番感じ取っているというような青ざめ方。そこからドラマはいよいよクライマックスに入って行くのでした。

そこまでの全体を含めての「コロンボ像」があるので、「刑事コロンボ」は大ヒットしたのです。大ヒットというよりは、コロンボという刑事が世界に出現して、人人に愛された、とあってよいでしょう。ロサンゼルス警察の追弔コメントはいかにもそのことを反映しています。

ところがです。そうして同じ「刑事コロンボ」を観ていても、コロンボのその猛烈な怒りが、見ていてわかる人とわからない人がいます。ポケット情報としては、彼は記号的な「怒り」の表情をしていないからです。「許さんぞ！」と大きな声を出すわけでもないですし、殴りかかったり襟首を掴んだりするのではないからです。全体的な「コロンボ」という人間を理解していなければ、彼の所作が改めて怒りに満ちているということが感じられません。

コロンボはどんくさい「ふり」をした、その実きわめて冷徹で伶俐な刑事であり、犯人と"勝負する"男ですが、その彼が怒りを露わにしたときはすごい迫力です。冷徹の極限と炎の極限を同時に持っているような。何回かそのドラマを観ているうちには、こちらもコロンボのことをもう「知っている」ので、むしろ犯人を心配するような心情になってくる。「そんなことしたらコロンボは絶対に余計に怒るよ……」と、犯人の悪だくみを諫（いさ）めたい気持ちになってきます。

こうしたドラマは娯楽として優秀です。脳に触れられることがよるこびですから、これがあるのはよるこびです。ただ、ポケット人間界が進行していくなら、ドラマ一つにしてもそういう作り方はできなくなります。「怒っているなら怒っていると言えよ」、あるいは「怒っている顔をしないとわからないだろ」ということになります。

マスメディアとしてドラマ娯楽を提供していくならば、そのように、自意識に理解のしやすい造りのものに、切り替えていかないといけない。それで、例えば誰かが怒るシーンとなれば、「この野郎！」と激しく大きな声、殴りかかるような動作、怒りに引きつった記号のような顔を、わかりやすく示すしかなくなるのでした。ただこれらはわかりやすいぶん、脳には触れてこない。大きな罵声→殴りかかる→引きつった顔→これは怒りだな、と、脈絡で理解されるだけです。ベンチに座り込んで俯くコロンボが、犯人のそらとぼけるのを無視して、「あんたが犯人だ」とボソリと言うときのような、ぞっとするスリルはありません。初めにあなたに想像していただいた「怒っている顔」のイメージとは、きっとコロンボの顔つきは違うのでした。

僕はマスメディアに携わる人間ではないので、現場の実際がどうであるかの視点から、このことをレポートとしてお話しすることはできません。ですから仮説としてお話しする程度のことになります。ですが同時にこの仮説は、じっさいに我々が目にする違和感についてよく説明すると思います。テレビメディアが視聴率を下げているのは事実のようなので、メディア娯楽を楽しむという営みから魅力が失われてきたというのも事実ではあるでしょう。



巻

き込まれるという前提において

ポケット人間界に、営みが無い、ということではありませんでした。ポケット人間界にも営みはありますし、脳人間界にも営みはある。ただ、自意識のポケット情報処理と、脳の全体的情報処理では、処理される情報量が違いすぎますから、同じ営みでもまったく別物になるということで、ポケット人間界はその営みの

魅力を失うということでした。

そして最も注目すべきは、パケット人間界がどのようであれ、営みはあるのであり、我々はそれぞれに、その営みに巻き込まれざるを得ないということです。多数の人人で我々は暮らしていますから、それがどのようであれ、営みに参加しないわけにはいかない。仙人か世捨て人のようになるか、あるいは特別な立場を築き上げるのでなければ、我々は世間一般の営みから自分だけ無縁であることはできません。そしてそうして巻き込まれるのですから、そこから受ける影響がゼロというわけにもいかない。脳人間界に飛び込めば脳人間化が鍛えられるように、パケット人間界に飛び込めばそのぶん自意識人間化が鍛えられます。

本講義は、一番初めに、IT技術を槍玉に挙げましたが、単にIT端末というなら、ご老人はあまりそれを手にされることがありません。携帯電話は使っていても、動画サイトやSNSに入りびたるということは無いです。せいぜい家族とメールするぐらいだと思います。ではご老人はパケット人間化に無縁かという、そうでもない。むしろ、心身に新しく物事を浴びることがなくなった、ご老人のほうが直撃されます。ご老人はよくテレビをご覧になって過ごされますし、割としょっちゅうマクドナルドなどにも行きます。若い人より行くかもしれない。

テレビ娯楽は、気楽に楽しめる娯楽として、ご老人の時間の多くを占めていますから、先ほど「娯楽メディアの変質」で申し上げたとおり、テレビメディアの提供してくる情報がパケット人間界のそれになれば、ご老人はそれに直撃されます。一日に何時間も、それを毎日ということになるでしょう。それだけテレビを観るからにはむしろ、そのテレビを「楽しめる自分」にならないとしょうがない。営みに巻き込まれるというのはそういうことです。

たとえば大学生が新たに就職します。彼の指導員が鋭いビジネスマンだったとしましょう。

「君のキャリア構築だが、どうする？ゼネラリストにゆくか、プロフェッショナルにゆくか。そういうことは早く決めておいたほうがいい。どの専門知識を身につけるか方策が変わってくるから。また結婚はどうする？海外の長期出張となれば数年は帰ってこられないから。所持持ちと所帯なしじゃ実際会社の人事は変わってくるのが常識だ。あと財務の実地を積みたいなら簿記会計の資格を取ったほうがいい、それを取ったということが転属希望の意志として会社側には受け取られるから。なんであれ不明瞭なのはいけない、社会人なんだから自己PRをクリアに持たないと、プランも立たないし外に向けても説得力がない」

こういうふうには彼は指導を受けます。この指導は何も間違っていない。青信号は「進んでよし」という、その脈絡世界の、もっと複雑な実践版です。

彼にはその他、指導員から、実務上の指示や確認もピンバシ飛んでくるのですから、それに早く即応できる人間にならないといけない。そうでないとただのボンクラです。ビジネスなのですから、これは正しいことです。仕事を「自意識ではっきり」掴んでいなくてはならない。そうでないと、いわゆる大人になれません。

彼に親身になってくれる指導員は、彼を食事や飲みにも誘ってくれるでしょう。そしてまた、そこで大人としての話を、ピンバシ彼にぶつけてきます。彼にとってはありがたいことです。そういう経験を一度も与えてもらえない人もいるのですから、それに比べれば本当に恵まれています。だからこそ、その受ける恩には応えてゆかないといけない。

でもそうして鍛えられていくのはやはり、基本的には自意識のほうです。彼は自分をフェイスブックに登録して、たとえば「三年以内に会計士を取りたい人のコミュニティ」みたいなところに所属するかもしれません。そこで情報交換会の告知があれば、彼はフットワークを軽くして参加するかもしれない。もちろん、だからといって生活が仕事のことにのみになるわけではない。フェイスブックに登録したら旧友との接続もあるでしょう。ジョギングやフットサルをしているという旧友のチームがあれば、彼も参加するかもしれず、その中で誰か魅力的な女性を見つけるかもしれない。自分は〇〇の仕事をしていてさ、という話があって、会計士を取らなきゃ、という、彼女は簿記の一級なら持っているという。それでお互いに、「この人をパートナーにアリかも」というようなことを思う。そこからお付き合いしようかということになり、翌年には「ゴールイン」というのは、何も珍しくない。お互いに、「いよいよ地盤固めができたって気がするね」と

通じ合っている。

それがいわゆる「リア充」です。もちろんこうして「リア充」になることに、何も悪いことはありません。ただ気づくと彼は、長らく自意識の機能ばかり発達させている。よくよく見てください。初め彼に恩恵を与えた指導員の指導も、いかにも現代的であって、十数年前にはそういう理念やマインドはわれわれの世界にあまりありませんでした。彼にしてもその指導員にしても、常識に沿っているように見えますが、それはあくまで"現代的常識"に沿っているにすぎません。本当にそれで人間全体はよいのかという問いについては、人類社会まるごとがまだ解答の出掛かりさえ得ていないところです。

昔はたとえば、新人が来たら、頭をぐしゃぐしゃに搔きむしって、「よく来た、地獄の底まで付き合え」と、ヒゲがぼうぼうになるまで泊り込みの仕事に付き合い合せていました。それでフラフラで客先に行くと、客先は絶句して、でもプツと笑います。彼が今どういう状態にいるのか、どの程度でこの仕事に向き合っているのか、何も言わなくてもわかります。新人だからといって軽視する気もなくなるでしょう。

でもそれは、電子メールがなくて、いちいち客先まで足を運ぶことが多かった時代です。現代はそんな悠長なことをしているヒマはありませんし、そんなことに不毛なコストを割いてられません。商用の的確な情報を電子メールで送れるのだからどんどんそうする。そうするのですが、そうして送れる情報はポケット情報のみでした。彼がフラフラのヒゲぼうぼうであることは伝わりません。フラフラだと、「こいつのメールは文面がおかしい、バカなんじゃないか」としか受け取られないでしょう。

だから彼だって、フラフラのヒゲぼうぼうだが眼差しは鋭い、というような説得力を自分に宿すのではなく、自意識ではっきり仕事を把握できているというスマートさのほうを、説得力として自分に宿そうとします。彼がそう望んだというのではなく、そうすることでしか役に立てないからです。彼はまったくそうなっていくのですが——今回の講義の主題です——やはり営みの魅力が失われていく。なぜとはなく、しかし確実に、「なんでこんなことしているんだろう」という感触が、やがて避けがたく迫ってくるのです。

ビジネスはビジネスなので、基本的に脈絡のカタマリです。採算、利益、道義、安全、合理化、社会的貢献、そういった脈絡でプランを立てて実践していくのがビジネスですから。ただ人間の生来の機能というのは、純粋にビジネスに特化するには不向きなのです。人間はきっと、過去の芸術家や宗教家のように、すべての脈絡のこだわりから離れて、ひたすら歓喜の中をゆくということが、突き詰めて言えばできます。ですがその逆、過去の芸術家や宗教家を否定して、すべてを脈絡で捉え、ひたすら陶酔を求めてゆくということが、突き詰めて言えばできないのです。生来に与えられた機能の問題として。

脈絡世界を行き、リア充になり、それを拡大していくことに、陶酔はあってもよろこびはない。人間は本当はそのことを知っています。生まれたての赤子に「リア充になりますように」とは母親は言わないからです。「この子に多くよろこびがありますように」としか母親は願えません。

もちろん、かといって、脈絡世界を行かずにゆくわけにはいかないですし、リア充にまったくならないというのも、実際に生きていく上では問題です。ですから、巻き込まれていくしかないし、巻き込まれてよいのですが、かといって巻き込まれるだけでは、どうやらやはりよくないようなのでした。

「営みの魅力が失われる」という題で、この講義を進めてきました。リア充になって、営みは増えていくのに、その魅力は失われているというのでは、本末転倒です。われわれは、それでもこれに、巻き込まれる側面をどうしても持たねばならず、かといって、それに身をゆだねてよいということでは、決してないのです。ただ何を考えるにしても、やはり巻き込まれることが前提です。その前提の上で、われわれは考えなくてはなりません。

第

四講は以上です。お疲れ様でした。

「現代と恋愛」という大タイトルで講義していますが、もし現代がどうあれ、恋愛その他の営みが魅力を失わないならば、何も講義するような必要はないでしょう。旧態の価値観など老人に任せて、ひたすらその魅力ある営みの中、よろこびに満ちてゆけばよい。ただ、その肝心のよろこびが無いのだ、ということがシリアスです。陶酔とよろこびは違うということも、また以降の講義で説明することができます。

営みに魅力があることは重要です。営みによるこびがなければ、人は自分が何をしているのか、自信を失って徐々にパニックになるからです。そこで「脳に触れられることがよろこび」と、せめてそのことだけでもわかっていれば、実現はむつかしいにせよ、慌てずに済みます。

特に女性にとって、セックスしたのによるこびがないということは、積み重なると、少なからず恐怖に育つようです。自分は無料で性風俗行為をしているだけなのではないか、と思えてきますし、自分がこれからずっと生きてゆくのに、何もよろこびは無いのじゃないのかと思われて、それが怖くなるのです。ですから方法論はともかくとして、誰もが一度は、脳と脳でつながった官能を体験されることがあればよいと、ひしひし思います。セックスに限らず、全てのことについて。よろこびの予感こそが希望であって、それ以外に希望なんて持ちようが無いのですから。

今あなたが眼をチカチカにして、それでもここまで読まれてきたということは、誇ってよいことです。権威あるスクールで受講したというならともかく、そういう品質の担保が何も無いところに、あなたはただ自分の直感を信じて、ここまで労力を割いてこられた。それは誰に教わったわけでもない、あなたの判断だったのです。ここには読み取るべきものがあると。そしてその判断はあなたが間違いでもなかったと、あなたは感じていらっしゃると思います。端々まで全部覚えてやろうとは思えなくても、少なくともわかる、「自意識と脳は別だ」ということ。「こんだけしつこく言われりゃそりゃ覚えるよ」と、あなたは苦笑されるかもしれません。ですがそのようなことを、明確に知っている人がはたしてどれだけいるのでしょうか。自意識と脳の区別などというのは、にわかには話そうとすると厄介な、あいまいに思えるものです。ですがあなたは今それを、明確に人に話すこともできる。「たとえば標準語と大阪弁があったとしてね、あなたはそれを聞き間違えないじゃない？ でも外人さんにはそれは聞き取れないことでしょうか？」。すでにそうしてあなた自身の口から話されることに、重要な希望の断片が浮いています。わたしたちの営みはもっと巨大なよろこびを得うるのでは、という予感の希望です。

ではお疲れ様でした。引き続き第五講にどうぞ。

第五講

わざとらしさが横行する

現

代の用語というと、「萌え」や「リア充」が目立ちます。「婚活」や「〇〇系男子」というのもよく聞きます。「勝ち組」「セレブ」という言い方はもう常用ですし、「雰囲気イケメン」といったような工夫した言い方もあります。今や七夕の短冊にも、子供の字で「セレブになりたい」と書かれていることは少なくありません。「女子会」は今でも活発のようです。

これらの現代の用語は、ただひとつ、「わざとらしい」という一点で共通しています。なぜ「わざとらしい」とかという、自意識から生まれた用語だからですね。「わざとらしい」という前に、まず「わざと」という言葉があります。これは「故意に」という意味ですから、「自意識で、意図的に」ということを指しています。時代が自意識の時代になるにつれ、用語も自意識出身の用語に切り替わっていたというところですが、ただそれは、冷静に見てみれば誰から見ても「わざとらしい」のです。

「わざとらしい」という言葉には、改めて注目すべき価値があります。わざとらしさを生み出すのは自意識ですが、それを「わざとらしい」と見抜くのは脳のはたらきです。もしあなたが、自分はわざとらしい人間でよいというなら、この話は必要ではありませんが、そうでない限りは、このことはしっかり講義する必要があります。それでは講義を始めましょう。

白

意識は「行為」する。脳はただ「はたらき」を持つ

「びっくり箱反応」と、僕が呼ぶ現象についてお話しします。きわめて簡単な話です。ですが、簡単なだけにわかりやすく、誤解のしようもないので、改めてお話しします。

あなたがびっくり箱を開けると、中からバネ仕掛けのおもちゃが、音を立てて飛び出します。あなたは「うわっ!」となる。それを見て、周囲は笑います。これが「びっくり箱反応」です。なんの珍しさもない、当たり前のことですね。

では、もう一度、まったく同じことをやってみたらどうでしょうか。あなたがもう一度びっくり箱を開けます。たいてい、茶筒などの日用品に似せて、それは作られています。それを開けると、やはりバネ仕掛けのおもちゃが飛び出してくる。あなたは「うわっ」と言います……が、あなたはもう、それがびっくり箱であることを知っています。あなたはもうびっくりすることはできないので、びっくりした「ふり」をしています。

こうすると、周囲は誰も笑ってくれません。少々の演技なんかしても無駄で、それはただ「わざとらしい」と、周囲の輦蹙（ひんしゅく）を買うだけです。

この当たり前のようなことをちゃんと見てみましょう。なぜ表面上はまったく同じことをしているのに、「びっくり箱反応」は笑ってもらえて、その「ふり」や「演技」ではまったく笑ってもらえないのでしょうか？

それはやはり脳と自意識との差によります。脳に触れられることがよるこびだと前回お話ししました。びっくり箱は、あなたの知らないところで、いきなり飛び出してくるので、自意識が入り込む余地がありません。ただびっくりします。その「びっくりする」というのは、あなたの自意識の仕事ではなくて、あなた

の脳の「はたらき」なのでした。

一方で、びっくりした「ふり」というのは、あなたの自意識の仕事です。あなたが「自然に茶筒を開けるふりをしよう」「そして驚いたふりをしよう」「うわっ！ と声を出そう」と、意図的に、企んで、その「行為」をしています。この「行為」というのが自意識の仕事です。

今、あなたに、「慌てて後ろを振り向いてください」とお願いしたとします。あなたは一応、それっぽい演技というか、それっぽいフリをしてくれます。「慌てて後ろを振り向く」という演技です。

それはなんとなく、よく出来ているように見えます。見えなくもない、という程度ですけれど。よしそれで、合格、と僕が言います。ところがそのときあなたの後ろで、大きな花瓶が棚から落ちて、「ガッシャーン！」と割れました。

そのときこそあなたは、本当に"慌てて後ろを振り向き"ます。それに比べたら、先の演技など、やはりわざとらしいものでしかないのした。

「慌てて後ろを振り向くという"行為"」は、自意識の仕事です。ですが本当に「慌てて後ろを振り向く」というのは、あなたの反応で、あなたの脳のはたらきによります。ガッシャーン！ という音が、ただちに危機的な、急いで確認すべきものだと、脳が判断するので、脳があなたを振りむかせるのです。脳の情報処理能力が自意識のそれとは比べ物にならないというのは、もうお話しする必要はないでしょう。

自意識は「行為」をします。一方、脳はただ「はたらき」を持っています。あなたがその「はたらき」によって動かされるとき、あなたは「わざとらしくない」のでした。



脳がワットなるということ

びっくり箱を開けたとき、あなたの脳は「ワット」となっています。心身に浴びた情報を丸々受け取って急激に処理している、その感触が「ワット」という感じになります。詳しくはまた次回の講義でお話しする予定ですが、あなたの脳がそこに「ワット」となり、活躍しているということは、周囲の人の脳にも「見える」のですね。あなたの脳の「ワット」が、周囲の人の脳にもちゃんと届いている、という感じですよ。そして「脳に触れられるのがよこりび」ですから、みんな笑います。あなたの脳と周囲の脳が交歓したと言ってよいでしょう。

一方で、自意識のほうで、その「演技」をした、びっくりした「ふり」をした、というのはどうでしょうか。自意識は脈絡の機能を持つと申し上げました。脈絡というのは、「何も知らず茶筒を開けるならこんな感じだろう」「そして驚くという挙動はこんな具合だろう」「驚いたときはウワットと声を出さだろう」というような脈絡です。あなたはその脈絡どおりに演技をするのですが、これは脈絡なので、周囲の脳ではなく自意識のほうへ届きます。周囲は、あなたの脳がワットとなった「びっくり」ではなく、「びっくり箱+わたし=びっくりした挙動」というような脈絡式を実演で見せられているように感じるのです。何もその数式が間違っているわけではない。間違っているわけではないのですが、それは脈絡なのでひたすら自意識にしか届かないのでした。

ウソ泣きなんかが典型的にそうですね。「わたし、そんなひどいこと言われたら、泣いちゃう」と言い、両目に手を当てて「ふえええーん」と泣きます。「ひどいこと+女の子=泣く挙動」という数式の実演です。わざとらしい何も、ウソ泣きはれっきとした「わざと」です。その自意識の「わざと」が、周囲の自意識に、いっそ"ちゃんと"届きます。それでも涙が出ていれば一応泣いていることにはなりますが、脳がワットとなったり、脳に触れられるよこりびがあったりはしません。向こうの自意識に、「あーあ、泣いちゃった」と届くだけです。

「脳がワットなること」は重要です。まさに要（かなめ）だと言ってよいでしょう。ある朗らかな人が、友人であるあなたを見つけ、「おーい！」と呼びかけてくる。伸びやかに手を振ってくる。顔が笑っている。そういうとき、彼は「笑顔になろう」としてそういう行為をしているのではない。あなたを見つけ、脳がワットになってしまい、笑顔になってしまうのです。だから彼の笑顔はあなたにとって嬉しい。彼は「わざと」そうしているわけではないので、わざとらしくはない。それで彼の笑顔や身振りはあなたの脳に届きません。脳に触れられるよろこびがあります。あなたが彼の笑顔について笑ってしまうのは、社交辞令とか空気を読んでとかのことでありません。びっくり箱反応に人が笑ってしまうのと同じ原理で笑ってしまっています。



意識は「習慣」になる

悪徳商法のセールスは、自然な笑顔を見せることに慣れています。彼らこそ、それを持っていないでは商売にならないでしょう。ですが、彼らのその一見自然に見える笑顔は、本当に"自然"でしょうか。そんなことはありえません。ありえないのですが、同時に、彼らの笑顔が一見"自然に見える"のも事実です。

なぜこのようなことが起こるかという、自意識は繰り返しによって「習慣」を得るからです。「くせ」と言ってもよい。初めはきつとぎこちない作り笑顔だったでしょうが、繰り返しているうちに、自意識はそのパターン行為を覚えます。とにかく客に会ったら笑顔になる、という「行為」。それが習慣によって"自動的"になる。これは彼の職業的な技術であり、訓練によるものであり、また政治的な技術でもあります。

そして悪徳商法のセールスでなくても、あなたに向けられる笑顔と、またあなた自身誰かに向ける笑顔には、そのような習慣のものがあえます。強引にまとめて言えば、笑顔には三種類があると言ってよいでしょう。「脳からの笑顔」と「ぎこちない、意図的な作り笑顔」と「自然に見える、習慣的な作り笑顔」とです。

ですが、いくらそれが一見自然に見えたとしても、やはり作り笑顔は作り笑顔です。いっそ作りすぎた笑顔というべきで、多く本人もそれがもう自分の本当の笑顔なのか作り笑顔なのかわからなくなっています。この習慣に完成させられた作り笑顔を、それでも「わざとらしい」と見抜くのは何かというと、やはり脳のはたらきでしかありません。いくら習慣で完璧に見えたとしても、それが脳に届いてくるかということ届いてこない。笑顔なのでひとまずの安心感がありますが、そこによろこびがあるかということ、やはり無いのです。びっくり箱反応にあるような、こちらがつい吹き出してしまうというものがない。

所詮、自意識の「行為」、いかに手馴れていたとしても、作り笑顔なのです。脳がその程度のことでだまされることはありません。いくらそうして習慣で完璧な笑顔を作らせたとしても、それが脳から起こっていないということはすぐにバレます。笑顔のパターンが数パターンしかないからです。喜怒哀楽、どのパターンを取ってみても、数は限られています。我々が箸の持ち方を何千パターンも持てないようです。たとえば、「いい天気ですね」と話を向けてみたときに起こる笑顔と、「鼻毛を切っていたら鼻の中ケガしたわ！」と話を向けてみたときに起こる笑顔とで、あまり差が無い。脳につながっていないので、脳の変化に笑顔が変化しないのです。

そのように、脳は結局だまされないのですが、それは逆に言えば、脳が弱ければだまされてしまうということです。

わ

ざとらしさが横行する現代

「リア充」であるとか「萌え」であるとか、「婚活」「女子会」「〇〇系（癒し系とか和み系とか）」といった表現は、時代に現れてきた当初、そのわざとらしさから嫌悪されました。けれども次第に慣れてきた、慣れてきて一般的になってきた、という気がします。でもそれは単なる慣れだけではありません。そこには、脳が弱くなることで、わざとらしさの読み取りが出来なくなってきた、ということも平行して起こっています。

昔から、美男子、優男、二枚目、ハンサム、伊達男、色男、そういった眉目秀麗な男性は、女性に当然の人気がありました。かといって、女性は同時に、彼がキザであったり虫の好かない男だったりすると、逆に彼を軽蔑もしたのです。「カッコツケ」という表現に覚えがありませんか。少し前はそういう言い方をしました。たしかに顔は整っているかもしれないけれど、それを鼻にかけている、「わざとらしい」、そういうものを「彼はカッコツケだわ」と否定してきた。それは彼の姿が、整えられているだけで、男らしい脳につながっていないもの、「自意識君だね」、という厳しい指摘でした。

もし、その「わざとらしさ」を見抜く脳のはたらきが弱っていれば、女性はその「カッコツケ」と本当に魅力的な美男子との区別がつかなくなってしまう。いやいや、カッコツケがわざとらしくないなら、どんどんカッコツケをしたほうが、彼はきゃあきゃあ言われてモテることができます。人気商売なら当然そちらを採るでしょう。凛々しい眼差しの男性が女性をドキッとさせるのは当然のことです。ですが、それが「わざと」でもバレないということなら、別に脳から凛々しくなる必要もない、ただ凛々しい「ふう」の目つきを、形だけなぞればよいのです。そんなものは鏡の前で三分も練習すればだいたいわかる。はじめはぎこちなくても、習慣になれば「一見自然に見えるようになる」とお話ししました。

どれだけ報道が警告しても、あいかわらずご年配がオレオレ詐欺にひっかかる被害は減らないようです。おかしい話だと思いませんか。いきなり息子や孫から電話が掛かってきて、何のあいさつもなしにいきなり「お金がいるんだ」と。仮に、電話口で息子や孫の声がわからなかったとしても、脳が健全なら、いくらなんでも「わざとらしい」と気づくはず。ところが脳が弱っていると、そのわざとらしさに気づけません。犯人らはその芝居に慣れているのでしょから、きっとその語り口はぎこちなくは無いのでしょ。でもぎこちなくなくても作り物は作り物です。オレオレ詐欺や振り込め詐欺といった類が横行できるのも、わざとらしさが「わざとらしい」と見咎められず横行できるということが土台にあります。

「萌え」であれ何であれ、僕は人の趣味にケチをつけるつもりはありませんが、いかにもわざとらしいものがわざとらしいと見えないなら、それは単純におかしいと思います。そのわざとらしさが逆にいい、というなら話はわかる。僕の趣味ではありませんが、そういう趣味の人もいらっしゃるでしょう。ですが、たとえばアイドルで言えば、本当に「控えめで清楚で弱気で臆病」だったら、そもそも自分からそんな世界へのオーディションに踏み入ったりしないでしょう。控えめで弱気な職業や、その道筋を、少なくとも選ぶのではないのでしょうか？僕はいわゆる典型的なオタク向けアイドルであったとしても、その女性がたくましい精神で活躍されているなら、そのことには尊敬の念を覚えます。ですがそのパフォーマンスが「わざとらしい」ものだったら、そのわざとらしさに気づくな、と言われても、それは僕には不可能なことです。僕に不可能というより、人間の脳には不可能なことです。人の本当の笑顔を受けて、よろこびを覚えるな、笑うな、と言われているのと同じですから。それは人の脳には不可能なことであって、本来、あなたの脳にも不可能なことです。

あなたの脳に問います。「リア充」といって、ありふれた会合をイベント仕立てにし、その写真を撮ってSNSに見せびらかすというようなことは、本当の本当に、「わざとらしい」と感じていらっしゃるいませんか。大きな声でイエーイと言いつつ、カメラに向けてVサインを揃ってするようなこと。「マジうぜ

え」と大声で言って独特の雰囲気を作る男性のこと。「超ウケるんですけど」と言い、「ウチらリア友だからさあ」と言うようなこと。それらは本当に「わざとらしくない」ですか？「マジうぜえ」という彼の声が、ただの手馴れた「習慣」の口調でしかなく、彼の腹には何も燃えたぎるような怒りなどないということ。あなたは本当に見抜いていらっしゃるか。サッカーの試合ごとに異様な雰囲気になる渋谷の夜は本当にサッカー・ナショナリズムに対する熱狂なのか。「わざとらしく」ないのか。ライブ会場で無理やり「盛り上がってこーぜー！」とパフォーマーが言い、「イエーイ」と仕込まれたように答える儀式のようなもの、それは本当に「わざとらしく」ないのか。

わざとらしくても、そのように遊んでいるのだ、と言われる場合については、そのことには僕は何も申し上げません。それはここでの講義に該当するテーマではなくなりますから。趣味の問題だ、とここでは済ませてしまってよいでしょう。ただ、あなたの脳と自意識をテーマにして話しています。あなたの脳は、そこに自意識行為の「わざとらしさ」を本当に見抜いていらっしゃるか。見抜いていない、わざとらしいとはまったく思わない、と言われるのであれば、僕はこの講義において、あなたの脳は弱っている、全体的情報を心身に浴びていない、と指摘せざるを得ません。そして、「本当はわざとらしいと思っている」というのであれば、何も問題はなくて、ただあなたが日々ずっとウソをついて過ごしているというだけです。〇〇のフリ、というのをずっと続けていらっしゃる。ずっと、自分でもわざとらしいとミエミエに思える、何かの芝居を続けていらっしゃるようになります。それがなぜなのかという、理由は、きっと僕よりあなた自身のほうがご存知でしょう。

前回までの講義で、「巻き込まれる前提で」というお話しをしてあると思います。それらがいかにか「わざとらしい」ものであったとしても、そのような形態がすでにあるというのが事実で、それにいくらか巻き込まれないではいけないというのも事実です。ただ巻き込まれた上でどうするかというお話しでした。巻き込まれて、一緒に沈んでよい、という話ではありませんでした。あなたが最終的にご自身を、わざとらしい人間にしたくないと言われる限り、あなたは巻き込まれながらも、窒息死してはいけません。脳に酸素を送り続けるために秘密の呼吸を続けていくよりないのです。サッカー日本代表が勝利したとき、そのサムライの戦いぶりに感激したなら、お酒を呑んで大騒ぎするだけが感動の仕方ではないと思います。たとえば受験生が震えるようになって、テレビ中継をプツツと消し、「自分も今の自分の戦いをつらぬく」と、静かな決意で学習機に向かうことも、あってよいはず。 「もう誰に話す必要もない」「だからもう誰も話しかけないでくれ」と。それは彼がサッカー日本代表に「勇気をもらった」ということではありませんか。あなたの脳がどちらによるこびを見つけるか、またあなたは本当にはどちらと付き合ってゆきたいか、少なくともあなたがあなた自身にウソをつかれることだけは、されないようにお願いしたいと思います。

第

五講は以上です。お疲れ様でした。

この第五講は、短くまとめることができましたが、重要な講義でした。一連の講義の中で、一つの本丸であったと言ってもよいと思います。現代と恋愛という大タイトルの中で、「わざとらしさが横行する」ということをピックアップしました。恋愛でいえば、本来、わざとらしさは大敵のはずです。いかなるロマンチックの風情も、そこにわざとらしさが見えたら途端にしらけます。しらけるどころか女性は軽蔑さえする。ところが、そのわざとらしさがバレないのだとなれば、もうわざとらしいことをやった者勝ち、みたいに

なってしまうのです。でもそのわざとらしさというのは、自意識の「行為」であり、意図的に、そう狙って、わざとやったことに過ぎないので、彼の脳につながったものではない。言ってみれば聞きかじりでもできることですそれは。「こうするとロマンチックだよ」という情報誌か何かのパケット情報を真に受けて、それでロマンチックを意図的に"行為"してみる。これが女性にウケたら男性側はシメシメですが、それ、彼が自分であなたのために考えたものじゃないんです。それはいくらなんでも興ざめだと思いませんか。情報誌やインターネット相談でアイデアを借りてきてなぞるなんて、そのどこが「ロマンチック」なのかと問いただしたいところです。ロマンチックの真逆を行っています。だいいち、脳の弱りきったロマンチックなど見たくもありません。

自意識は「行為」をするということ、脳はただ「はたらき」を持っているだけだということ。このことを忘れないでください。あなたは本来、人に対して「行為」なんてわざとらしいことを、ほとんどする必要がありません。脳からあなたに笑いかけてしまう人のように、あなたが脳を健全にされて、脳が「ワツとなる」のであれば、その脳はあるていど勝手にあなたに本来の振る舞いをさせるように、もともと機能を持っています。"アピったり"しなくても、あなたは女として男性にアピールを起こすはたらきを本来は持っているのです。

仮にあなたの結婚式で、二人のなれそめを僕がスピーチするとします。そのとき僕が、「彼女は萌え系から癒し系に転向し、そこにちょっと天然を入れることで、愛されキャラとしてリア充の仲間入りができるようになりました。彼女は空気をちゃんと読める系です。またその後、女子会で婚活をマイブームにすることを教えられ、彼にアピることを繰り返し、今こうして雰囲気イケメンの彼とゴールインして勝ち組となったのです。彼女はリア友からマジリスpektされてます。彼女はこれから子供にキラキラネームをつけてママ友を増やし美魔女になってゆかれることでしょう」とスピーチしたらどうですか。とんでもない侮辱だと感じられませんか。でもこれらの用語は僕の使う用語でなく、どちらかというときとあなたか、あなたの周囲が使う用語群です。それらの用語群が侮辱性を持っているのは、別に披露宴のスピーチに限りません。

なぜか自意識はこれらの用語を使うのが大好きで、これらの用語を使うのをやめようとはしません。それがなぜなのかというのは、見つめなくてもこの先にますます勝手に見えてきます。それでは引き続き第六講へどうぞ。

第六講

脳は見えるものについていく

前

回の講義の復習をします。「わざとらしさが横行する」という話でした。もっともわかりやすい例に、びっくり箱反応、というのを取り上げました。びっくり箱に「うわっ！」となれば、周囲は笑ってくれる。あなたの脳がワッなるのが、周囲の脳に触れるから笑いが起こるのでした。それが、びっくり箱だと知っていて、びっくりする「ふり」とか「演技」をするのでは、だめです。しらけます。それは自意識の「行為」だからだ、ということでした。

自意識は「行為」をする。一方、脳はただ「はたらき」を持っているだけでした。自意識の「行為」は、意図的なものですから、「わざと」であり、「わざとらしい」。あなただって、誰かに笑いかけてもらえるなら、そういうわざとらしい「行為」ではなく、ただあなたを見て脳がワッとなってしまう、それで笑ってしまうという、わざとらしさの無い笑いを向けてもらいたい。それはそうに決まっている。そういうお話でした。

あなたが仮に、それをびっくり箱だと知っていて、それでも「きゃっ」と演技をすれば、脳の弱った誰かがあなたを「萌え」だとか「癒されるわあ」とか言ってくれるかもしれない。でもそれは恋愛ではないし営みとしての魅力もない。そう捉えるのが本講義の立場です。

それだけ復習して、では第六講に入りましょう。今回の講義は、いかにも前回の講義とつながっています。



脳

は脳が"見える"、自意識は自意識を"理解"できる

"すばらしい先生"がいたとしましょう。仮にA先生と呼びます。その先生のどこがすばらしいのかとあなたに訊けば、あなたはきっと「だってすごく熱心に教えてくれるのだから」と答えるでしょう。A先生は確かに、すごく熱心に、あなたに「 $1 + 1$ は2です」ということを教えてくれます。先生なのだから当然ですね。

さてあなたは、早速ですが、重大なことを発見しなくてはなりません。あなたがA先生をすばらしい先生だと思えるのは、A先生が「すごく熱心に教えてくれるから」です。これは、あなたの脳から、A先生のことが見えている」という状態です。「A先生がすごく熱心に教えてくれる、教えてくれようとしている」ということが、あなたの脳に「見える」のです。見えるというのは、もちろんあなたの眼と視神経を通してですが、最終的にそれを「見て」いるのは脳だと言えるでしょう。あなたはA先生の授業の内容以前に、まずA先生が熱心に「教えよう」としている、その姿が「見えている」のです。これが大変重要なことなので、あなたはこのことを忘れずにいてください。

このとき同時に、A先生が、熱心に「教えよう」とするのに、わざとらしさがない、ということも発見しておいてください。A先生は、わざとも何もない、ただ生徒を前にすると脳がワッとなり、「教えよう」としてしまうのです。だからこそ、すばらしい先生です。あなたはそのA先生の脳がワッとなるのが、自分の脳に触れてくるので、それ自体によるこびを覚えています。あなたは授業の内容以前に、A先生の授業が「好き」なはずで

一方でB先生というのを設定しましょう。B先生は真面目で、熱意もあるのですが、「熱心に教えなけれ

ば」ということで、その「熱心に教えるという"行為"」にこだわります。だからB先生の授業は熱心ふうなのですが、あなたの眼にはどうも「わざとらしさ」が映る。それであなたは、B先生について、悪い先生ではないけれども、そんなに好きかという、好きではない、ということになります。授業の内容は、「1+1は2」なので、さして変わりはない。変わりはないのですが、そこに「好き」や「よろこび」がないので、どうもあなたは勉強に意欲も湧かなければ、知識も頭に入ってこない。そもそも、どうしても、B先生の話真剣に聞こうという気持ちになれないのです。A先生が教壇に立つと、何か熱に巻き込まれてしまうのですが、B先生にはそれがない。B先生の真面目さや熱心さは、どうも空回りしているようにあなたの眼には映ります。

これはどういうことかという、あなたの脳に「見えない」のです。B先生が熱心に教えようとしていること、そのことは「理解」はできる。理解はできるのですが、あなたの脳には届いてこない。脳に届いてこないで、B先生の「熱心に教えようとしている"姿"」が「見えない」のです。「わかる」のですが、「感じられない」。

脳に届いてこないで、どうも他人事のようになります。B先生について、「いい人なんだろうけど」とは思います。少しフォローしてあげたい気持ちもあって、あなたは積極的にB先生の話聞く態勢になるかもしれません。が、それにしてもやはり、A先生とB先生とでは、あなたが体験するものは違うのでした。

A先生は脳からの熱心さです。熱心であろう、としているのではなく、ただ脳がワツとなり、熱心になってしまうのです。いわばAさんは"脳の人"なのですが、この"脳の人"の姿は、あなたの脳に「見える」のでした。"脳は脳が見える"と言ってかまいません。A先生の姿が、脳の現われとしての姿なので、その姿はあなたの眼から脳まできっちり届くのでした。それを本講義では「見える」と呼びます。

B先生は自意識で熱心たらんとしています。熱心であろう、という自意識です。その自意識のとおり「行為」しようと努めています。ところがこちらは「見えない」のでした。自意識は脳には見えないのです。"脳は脳が見える"なら、合わせて、"自意識は自意識を理解できる"ということになります。二種類のケーブルがあると思ってください。「見えない」ということは、脳に届いていないということであり、その代わりに、自意識に届いて理解はできる、ということです。

脳は脳につながり「見える」、自意識は自意識につながり「理解」できる。電子的な用語に置き換えていえば、それぞれフォーマットが違うということになるでしょうか。わかりやすいように例え話にします。たとえば"脳ケーブル"というのがあったとしたら、それを接続すると、テレビ番組が見えるようになります。一方"自意識ケーブル"というのがあったとしたら、それを接続すると、「テレビ番組表」がわかるようになります。実際、ご家庭のテレビにも、そのテレビ番組表を見るための機能がついていると思います。データ通信というやつですね。これもIT技術の一つです。

ですが、そうして番組表のデータを得ても、それではその番組を観たことにはなりません。番組が実際見えるかという見えませんね。番組表を見て、「これきっと面白いだろうな」というのはわかります。わかるだけです。番組は見えません。当たり前です。

番組を見るために必要なのは、まあ番組表もあってよいのですけれども、肝心の番組映像そのものが必要です。それが「見える」ようになるためには、脳ケーブルを接続するしかないというなら、それはもう、脳ケーブルを接続する以外に無いのでした。

そして正直、番組がきちんと観れたら、番組表というのは別になくてもかまいません。

脳ケーブルを自意識端子に接続したり、自意識ケーブルを脳端子に接続したりしても、何も映りません。これはただのちぐはぐであり、接続方法が間違っています。変な接続をすると機材に負担がかかり、機材を傷めるだけです。

その例え話のように、「脳は脳が見える」し、「自意識は自意識を理解できる」。"仮に言えば"二種類のケーブルがある。A先生は"脳の人"ですから、あなたはA先生を自分の脳で「見る」ことができます。「見える」のです。一方でB先生は"自意識の人"ですから、あなたの脳でB先生を「見る」ことはできません。

「見えない」のです。B先生に対してできることは、あなたの自意識で「理解する」ことだけです。

すこし先走りに言いますと、脳はそうして「見える」ものには「ついていく」ということができます。そう行為しようと思わずとも、ついていくはたらしが勝手に脳にあるのです。だからあなたはA先生の授業に「ついていく」ことができます。B先生のほうには、どうしたって「ついていく」ことはできません。見えるものがないので「ついていく」ことができないのです。あなたはただっ広い何もない空間で「ほら、ついていけ！」と言われてもどうしようもないはず。人間は「見える」ものにしかついていくことはできません。読み進めるほどにわかりやすくなりますから、引き返さずこのまま進んでください。



あ

あなたの脳が健全であった場合

あなたを混乱させないために、明快な説明が続きます。

あなたの脳が健全であった場合。まずこう、場合分けして考えます。あなたの脳が健全であった場合、あなたはちゃんと「見る」ということができます。"脳の人"の「姿」を見ることができる。本講義では「見える」と言います。一方、あなたの目の前に"自意識の人"がいたら、あなたはからはその人は「見えない」と感じられます。同時に、「わかるけれど」とも思います。

あなたの脳が健全であった場合、あなたは見えるべき人の姿が「見える」ので、あなたはそれに「ついていく」ことができます。「ついていく」というのは、ものすごいスピードで走る車の後ろを、あなたがびったり張り付いて「ついていく」ようなものだと思ってください。そうして「ついていく」ことができるのは、当然ですが、目の前の車が「見えている」からです。前の車が右にウインカーを出したらあなたにそれが「わかる」。でも、それでたとえ前の車が不意に左折としたとしても、あなたは即座に一緒に左折して「ついていきます」。なぜウインカーを逆に出したのかはわかりませんが、かまいません、とにかく「ついていく」ことはできているのですから。ものすごいスピードでびったり張り付いているので、周りのことは見えなくなります。ひたすらついていくだけで、あれこれ余計な事を考える余地はほとんどありません。また前の車も、あなたがびったり張り付いてきていることを知っており、「ちゃんとしてこい」と思っています。

あなたの脳が健全であった場合、実は当たり前ですが、あなたは人に「ついてこさせる」ことができます。先ほどの立場が逆転するだけです。あなたは"脳の人"なので、人から見てあなたの"姿"は「見える」ことになります。見えるものに、人は「ついていく」ことができます。あくまで、脳が健全な人は、そのときのあなたに「ついていく」ことができる、ということになります。

あなたの脳が健全であった場合でも、あなたは"自意識の人"の「姿」は見えません。「見える」というのは脳のはたらしなので、脳に届いてこないものは「見えない」。自意識の機能は「理解」や「脈絡」です。だからあなたは、"自意識の人"を「わかる」ことはできます。ただし、わかるだけで、それは「見える」とは別のことです。

あなたは"自意識の人"に「ついていく」ことはできません。「見えない」ものに「ついていく」ことは不可能ですから。もし"自意識の人"に仮にも「ついていこう」とするならば、それは先ほどとは違い、「地図に書いてある線をなぞって走る」という感じになります。のんびりと、自分のペースで行ってよいし、周りのことが見えなくなる、ということもない。これは「ついていく」ということとはまったく異なりますね。「ついていく」というのは、もう一瞬見失ったらおしまいですが、地図に線が書いてあるのをなぞるのは、少々道を間違ったとしても、引き返して途中からやりなおすことができます。立ち止まってもよい。おしまいになる、ということはありません。

このように、脳には「見える」「ついていく」という能力があります。自意識の側にはありません。……

少し先走りして申し上げておきましょう。あなたがものすごい速さの車にぴったり「ついていった」なら、あなたがその時間、脳で受け止めているのは前方の車の「存在」です。どう走ったかなんて覚えていません。

一方、自意識で地図をなぞった側が、その時間に受け取ったのは「道筋」です。道筋を理解したというだけで、そこに何かの「存在」は受け止められていない。道筋をなぞるのはそうして一人でできることです。誰でもできます。集中力も要りません。失敗ありません。手に汗もかいていませんし、心臓がドキドキもしていません。

あなたは読み進められるほど理解を容易にされますので、どんどん進んでください。



あ

あなたの脳が健全でなかった場合

あなたの脳が健全でなかった場合。つまり、あなたが"自意識の人"であった場合。あなたはそもそも、人や物事について「見える」ということがありません。「見える」は脳のはたらきなので、脳が弱りきっていたら、脳はその情報を受け取りませんし、受け取っても情報処理ができません。だからあなたの脳が健全でなかった場合、あなたは「理解」と「脈絡」の機能しか持っていないことになります。ものすごいスピードの車が走り抜けていったら、あなたは立ち止まったまま、ただ「わかるわあ」と「理解」することしかできないのでした。

「見える」というのは、単なる視力の問題と、「ついていけるかどうか」の問題に分かれます。簡単な話です。たとえば野球中継を見ればあなたはピッチャーの投げるボールが「見え」ます。これはただの視力の問題です。でもあなたがバッターボックスに立ったら、プロのピッチャーが投げる球は「見えません」。見えるというなら、打ってみろ、ということになります。それが打てるということが、「ついていけている」ということなのですから。

あなたの脳が健全でなかった場合、あなたはものすごいスピードで走る車に「ついていく」ということができません。視力としては車が見えるのですが、「ついていけるように見える」のではないからです。だから、車の走っていった痕跡を分析して、「ついていく」というよりは、追跡する、尾行する、道筋をなぞる、ということになります。でもそれは、手に汗を握って心臓をヒリヒリさせながら「ついていく」ということではない。

このように、あなたの脳が不健全であった場合、あなたは人や物事について「見える」「ついていく」という機能を失います。

同時に、このときあなたは"自意識の人"なので、あなたの「姿」は誰からも見えません。だからあなたは誰かを「ついてこさせる」ということもできなくなります。あなたは"自意識の人"として、人に「理解」はしてもらえないものの、それのみ、ということになります。

先ほど申し上げたように、"脳"は「存在」を受け止めるのでした。「存在」を受け止めるので、「見える」し、見えるからこそ、「ついていく」ことができる。ここで、あなたの脳が不健全であった場合、あなたは"自意識の人"になるので、あなたは人に理解はされるものの、その「存在」は受け止めてもらえないことになります。もしそうなった場合、このことはあなたを長く苦しめます。

人はあなたを理解してくれる。理解してくれるので、あなたはさらに理解を求める。でもそうして理解を拡大しても、あなたの「存在」は受け止められていません。あなたの「姿」はいつまでも誰の眼にも見えていません。こうなったとき、このことがあなたを苦しめないわけがない。

まだ説明が続きます。



力と出力の問題、「眼と姿」の問題

混乱を防ぐために、ここまで場合分けをして説明しました。「あなたの脳が健全であった場合」と、「不健全であった場合」とです。これに加えて、あなたの目の前に人がいたら、その目の前の人の側で、脳が健全か不健全かという問題があります。

また、これに加えて、実際のこととしては、「ついていく」のは得意でも、「ついてこさせる」ほうはからしダメ、というようなこともあるのです。脳のはたらきの"片方"だけ健全という感じです。それは、いざ人に「ついてこさせよう」としたとき、途端に自意識が立ち上がってダメになる、というようなことが、実際上の問題になるようですが……とにかく、あなたは本講義では混乱されないよう理解に努めねばなりません。

そこで整理すると以下のようになります。脳のはたらきについて、入力と出力とで、「眼」と「姿」とわかりやすい言葉を当ててあります。

<相手の脳が健全だった場合>

あなた（眼）ON — ON（姿）彼 : ○「ついていく」が成立

あなた（姿）ON — ON（眼）彼 : ○「ついてこさせる」が成立

あなた（眼）OFF — ON（姿）彼 : ×「ついていく」が成立せず

あなた（姿）OFF — ON（眼）彼 : ×「ついてこさせる」が成立せず

<相手の脳が不健全だった場合>

あなた（眼）ON — OFF（姿）彼 : ×「ついていく」が成立せず

あなた（姿）ON — OFF（眼）彼 : ×「ついてこさせる」が成立せず

あなた（眼）OFF — OFF（姿）彼 : ×パケット人間界

あなた（姿）OFF — OFF（眼）彼 : ×パケット人間界

本来、このオンオフの場合分けをきっちり書くと、16通りの煩雑な図になるのですが、それはきっと余計にあなたを理解に苦しめますので、差し控えます。仮に、あなたの姿がOFFでも、あなたの眼がONであれば、姿がONの彼にであれば「ついていく」ということは成立させられます。

あなたはこの場合分けを暗記する必要はありません。ただ、脳と自意識の問題は、自分の側だけにあるのではない、ということ知るために、このことが重要でした。たとえ自分の脳が健全で、眼と姿の両方がONであっても、相手側が両方OFFなら、やはり何も成立しないのです。

あるいは逆に、あなたが両方をOFFにしていれば、彼がどれだけあなたに誠実に向き合い、眼と姿をONにしているも、そこには何の営みも生まれません。

あなたは、「別に何も悪いことしてない」という自覚の中で、実はとてもひどいことを、人に行っている可能性があります。それはあなたが眼と姿を両方OFFにしている、両方をONにしている誰かのことを、知らず知らずに見捨てたときです。彼の姿はあなたに向けられ、また彼の眼はあなたの姿に向けられていたのに、あなたは彼の姿も受け取らず、また彼の眼に何の姿も与えなかった。

もしそれを、「そんなの知ったこっちゃない」と言われる場合、さすがに僕からは申し上げることがありません。「勝手に眼と姿を向けた人間の方が悪い」「そんなの向こうの自己責任でしょ」と言われる場合は、それはもう世界観なので、こちらからは何も申し上げることがなくなります。また、そろそろ勇気を出して

言えば、現代の世界観はすでにそちらが主流になりつつある。仮に本講義の趣旨から離れて、ある種のリアリズムに傾倒して申し上げるならば、そちらの世界観を採るほうが現実的で、生きていくのには有利だと言わねばなりません。

とはいえ、いくらその"酸味しかない"リアリズムに傾倒したとしても、それで営みのよろこびがあるかというわけではありません。それは世界観に関わらず事実です。営みのよろこびなど捨てて、単純な有利さを選ぶのだという場合は、それは世界観であり人生観であり、人それぞれの生き方だということでした。ただしあくまで本講義の立場では、僕はそのようなやり方を一切認めるつもりはありません。本講義は浅はかな理屈でなく正当な「人間の尊厳」の方を重く見るものです。

さてあらためて先ほどの8つの場合分けを見てみましょう。まず営みが「成立」しているのは、初めの二つしかありません。当然なのですが、「健全な眼 - 健全な姿」「健全な姿 - 健全な眼」の二つしか、営みの成立はありえません。脳の入出力の話なので、「壊れていない出力端子に壊れていない入力端子がつながる」以外にありえません。あとはそのときどきで、あなたと彼のどちらが出力で、どちらが入力になるかというだけです。

場合分けの、後半の4つを見てみましょう。全て×がつき、不成立となっています。相手の脳が不健全なのだから当たり前です。壊れているスピーカーに何をどうつないだって音が鳴るわけがありません。初めから不成立になるに決まっている。

相手の脳が不健全なら、こちらの脳だけ健全だと馬鹿馬鹿しい。そんな気がしてきます。そこから、じゃあこちらを脳を不健全にしていけばよいのだ、ということになりかねません。それで場合分けの最後の二つは、判定が「パケット人間界」になっています。もちろん営みは不成立ですが、それはパケット人間界というやり方が成立してきた、ということでもあります。

こうして場合分けをすることで、思いがけず話はシンプルになってまいりました。場合分けの8つのうち、あなたは上の二つまで上り詰めるのか、下の二つまで沈み込んでしまうのか、どちらだ、ということです。中央の4つは苦しい状態ですから、いつまでもそこにはおれない。上か下かのどちらかに、最後はたどり着く必要があります。

8つの場合分けをさらにシンプルに、本質的な三分割にすると、

営みのよろこび
↑
苦しいちぐはぐ
↓
パケット人間界

ということになる。

今きくと多くの人が、苦しいちぐはぐの中にまだいて、やがてはどちらかに行くことになるだろうという、予感を受け入れています。現代の環境・状況としては、上昇気流はお世辞にも吹いてはおらず、それどころか強烈なダウンバーストが吹き降ろしてきています。この講義でお話ししてきたことの全ては、簡単で、言われてみて当たり前のことばかりだったと思いますが、いざこのダウンバーストに抵抗してでも自己を上昇させられるのかと言えば、現実にはそれは容易なことではないのでした。

第

六講は以上です。お疲れ様でした。

さていよいよ、本講義群も、すでに山場は越えたといつてよいでしょう。すでにメインディッシュは終わりましたが、あなたはコース料理の途中で退席はせず、きっとデザートまで味見ぐらいはしてゆこうとされると思います。あなたは少し気を緩めてよいでしょうし、ここまで進めてきた僕も、なんとか話しかれた気がして少し気を緩めています。

「見える」ということと「ついていく」ということ。何よりこれが大切なことであり、あなたに大切なのは場合分けをナルホドと理解するようなことではありません。理解はされたらよいわけですが、それを土台に自意識を膨らましては本末転倒です。あなたの眼に人の「姿」が見え、あなたがそれに「ぴったりついていける」というとき、そこにかけがえのない営みのよろこびが伴うことを、僕は保証できるでしょう。むしろ心配なのは、そのときのあなたの胸がよろこびと切なさで張り裂けてしまわないかどうかということです。もしあなたが今までに、本当にそういう営みを持ったことがなかったのだとしたら、鍛えられていないあなたの心は、巨大すぎる熱と切なさに死にそうになってしまうかもしれません。それでもそうしていくより他はないわけですが。

あなたの「姿」が人に見えることも重要です。あなたの「姿」を見て、人がぴったりあなたに「ついていく」ことができるというのは、それもやはり営みのよろこびがあることです。あなたは生涯の友人と黄金の尊敬を得るでしょう。後ろからお尻を蹴りあったって失われることなどない尊敬です。それは人間が空を破壊できないように破壊できない関係であり尊敬なのでした。

「見える」ということに、どうか意気込まないでいただきたい、とも思います。見えるというのは脳の「はたらき」です。あなたの自意識の「行為」ではありません。あなたが意気込むというとき、たいてい自意識の側がやる気を出していらっしゃいます。それはそれで、しょうがないところもありますが……それでも「見える」というのは、脳の「はたらき」でしかなく、何が「見える」かといったら、当たり前なのが当たり前「見える」だけです。怒り狂ったヒグマが殺意を持ってあなたのほうへ突進してきたとしましょう。何が「見える」といって、決まっています、「殺される！」というのが見えるだけです。何もガンパって睨まなくても、見えるものはただ当たり前に見えます。

「見える」ものが何かないか……と、ウェブ検索を漁るのだけはどうかやめてください。それはパケット情報であり、自意識に流れ込むだけだと再三申し上げました。ただ、「作品」というのは、また別になるのですけれども、そのこともまた以降の講義でお話することができますので、今は置いておきましょう。ひとまず決して忘れてはいけないのは、あなたが脳に受け取れる情報の最大の情報源は「人」です。生身の「人」を心身に浴びることで、あなたの脳は最大の情報量を得ることができます。その情報量の膨大な蓄積の上、人が「見える」ということが生まれてきて、「ついていく」ということができるようになってくる。「ついてこさせる」もそうです。どうかあなたは、「脳の人」と出会われて、その人のことを心身に浴びてあなた自身も「脳の人」となってください。

いったん「自意識の人」である自分に慣れてしまうと、もうその自意識の立ち上がりを抑えるのはとても困難です。困難といっても、そうするしかないのですが、自意識を抑えるという「行為」をしようとするあまり、ますます……というような、悪いスパイラルに巻き込まれていきます。それでも何とかするしかないのが実情です。方法論はありません。死に物狂いでやってください。方法論をよこせと言ってやまないのはあなたの自意識です。それで自意識に肥料をやってもますます自意識が発達するので、最後はあなたがなんとかするしかない。自意識はあなたの自意識なので、あなたが管理責任を負うしかありません。あなたが本気でそれを根絶やしにしようとしたら、それはできます。あなたはうすうすそのことをご存知のはずです。

ではお疲れ様でした。クライマックスは過ぎましたが、そのぶん気楽になられて、第七講へどうぞ。

第七講

脳は自意識に先行する

の第七講では、難しいが有益な話をします。有益ですが難しいです。あなたに難しい話を理解してもらうためにはどうすればよいのでしょうか？ それはきっと、筋道立ててゆっくり語りつくすことではなく、「つまり要点は何だ」ということを、あなたにぶっつけ続けることだと思います。そのようにこの講義は進めてまいります。あなたがここで体験される難しい話は、そのままあなたの役に立つことはありません。ですが、あなたに「ではこういうことでは？」という発想を起こさせるのに、決定的な役割を果たす可能性が十分にあります。

自分を磨くというとき、それが磨いた結果、光らないのでは何の意味もありません。本講義はそのような不毛をあなたにさせないつもりです。難しい話というのは、その難しさが大事なのではなくて、あなたに「じゃあどこをどう磨けばいいんだ」ということを導き出させるために有効です。それでは始めましょう。「脳は自意識に先行」します。



意識は現在を捉えていない

あなたの部屋のドアを蹴ったら、あなたは部屋の中で驚く、という話をしました。あなたはビックリとして、その後に「誰だよ」と、それが「誰かがドアを蹴った音だ」というのを認識します。でもあなたはその認識に到る前に、自動的にびっくりするし、自動的に音のしたほうを振り向くのでした。それは脳のはたらきだとずっと申し上げてきています。

このことだけでも、自意識の認識が「現在」という時間を捉えきれていないことを示しています。脳のはたらきに比べて遅れていますね。これは感覚的に驚かれることかもしれないのですが、たとえばあなたは今、この講義集のテキストを読んでいます。まさに「現在」、そうしているように思えるのですが、実は厳密に見ると、その認識は「現在」という時間を捉えられていないのでした。

われわれにはどうしても、自意識の全能性に対する思い込みがあります。自分が物事を認識している、これが全てだと思い込んでいます。ですが本当には、自分の心身に宿された機能はそれだけではないかもしれない。ここでは一度、その自意識の全能性について思い込みを捨ててみてください。実は現在という時間は、あなたの知らないところで粛々（しゅくしゅく）と流れている。その時間の流れを、脳は正しく眺めていて、一方で、あなたの自意識はその「過ぎ去った現在」という、よくよく見ればもう過去でしかないそれを眺めているのでした。だからドアをバンと蹴られると、あなたの「認識」は遅れるのですね。ドアがバンと蹴られたという「現在」が、もう過ぎ去った後にしか、あなたの自意識は「何があったか」ということは認識できない。単純に言えば、「認識」というそのことに時間が掛かってしまうのです。脳が全体的情報をそのまま受け取っていることに比べて、自意識はそれをパケタイズしてからしか認識できないので、ナマの情報を自意識用のフォーマットに変換する一時間が時間を食っているのでした。

あなたはこのことに驚かれるべきです。たとえばあなたは、「右手を上げてください」と言われて、右手を上げることができます。自意識から動作に移れるということです。自意識による「動作行為」ですね。ところが、背後で花瓶が割れてバツと振り向くときのように、あなたがその行為をする前からあなたの動作が

始まることがある。つまりあなたの身体を操作しているのは、あなたの自意識だけではないのです。あなたが「こう動かそう」とする以外にも、あなたの身体を動かす方法が実はあるのです。

"脳の人"と"自意識の人"という差分をお話ししてきました。あなたは自分の動作・振る舞いをスタートさせるのにも、「脳」からそれをスタートさせることができますし、「自意識」からそれをスタートさせることもできます。それを思うままにできるわけではないにせよ、少なくともその機能はあなたに具わっている。「脳」、つまり「現在」という時点から、「行為」という機能を媒介せずに、実はあなたは動作・振る舞いをスタートさせられる。一方で、「自意識」、つまり「認識」という時点から、「行為」という機能で、動作・振る舞いをスタートさせることもできる。

強引に例えるならばです。あなたがテレビの主電源をバチンと操作できる一方で、リモコンでプッと操作することもできる、という違いです。操作のルートが二種類あるのです。そして実はリモコンのほうがやや遅い。リモコンのボタンが押された「現在」に、本体が動作しているのではない。

例え話と、あまりにらめっこすることなく、このまま進んでください。

「無意識に」ということの誤解

このことを先にお話ししておく必要があります。あなたはひょっとすると、ここまでの話で「無意識に身体が動く」というような表現に、あなた自身の内側で取り替えられたかもしれません。ですが、申し訳ない、その表現はたいへん誤解をもたらすものなので、この講義においては取り下げていただくようお願いします。今お話ししているのは、いわゆる「無意識に」ということではありません。

一般的な「無意識に」ということについてお話ししましょう。それはいわゆる「クセ」のことです。たとえば爪を噛むようなクセ。初めは、誰だってそんなクセを持っていませんから、初めはそれを自意識で把握した「行為」としてやるのです。ですが、繰り返しているうちに「習慣」になります。「習慣」になると、それを自意識で「行為している」という感覚を忘れます。感覚を忘れるのですが、それはやはり自意識からの行為なのです。

あなたは「花瓶の割れた音がしたら振り向くクセがある」というのでしょうか。そんなことはないと思います。ですからそれはクセではなく、脳のはたらきによる動作です。

一般に「無意識にやっちゃった」というのは、ほとんどがその「クセ」のことを指します。それは自意識の習慣に過ぎないので、本講義でよろこばしく捉える現象ではありません。もちろん習慣・クセというのが悪いわけではない。たとえば正しい箸の持ち方だって、一種の習慣・クセであり、まず正しい持ち方を習慣づけることで、手はやがて箸の力学を覚えることができます。ただそれにしても、繰り返しの行為が習慣化して「無意識のクセ」になるのはここでの話と違いますからご注意ください。

コミュニケーションは「起こってから」わかる

人との関わりは「脳-脳の間」だと申し上げました。このことに改めて注目してください。脳というのは、時間軸上、「現在」という時点をとらえています。自意識はそれから遅れて「認識」という時点にいる。ですから、これも驚くべきことなのですが、全体的情報におけるコミュニケーション、「脳-脳の間

り」というのは、それが今まさに起こっている瞬間というのは、自意識では「わからない」のです。自意識の機能は、そうして起こったコミュニケーションに、ただ「追隨して」、コミュニケーションが「あった」ということを「確認」することしかできません。

脳と脳の関わり、全体的情報のコミュニケーション、脳に触れ合うよろこび、その営みというのは、自分でやろうとしてやるものではないのです。これは驚くべきことです。確かに言われてみれば、言葉も自意識もまだ持たない乳幼児だって他の人間とコミュニケートはするのですから、当たり前なのかもしれませんが、現代の大人の我々にとってはやはり驚くべきことだと思います。

脳には人や物事が「見える」という機能があり、その「見える」ものには「ついていく」ことができると申しあげました。その「見える」にしても「ついていく」にしても、脳と脳とでやる営み、時間軸上「現在」に起こる営みなので、自意識でやれることではありません。自意識は追隨・確認しかできないのですから、その追隨はもう時間軸上で遅れており、「ぴったりついていく」ということにはなっていません。

やっかいなことがあるわけです。我々がつい自意識の全能性を信じているところ、なにやら「肝心なことは全て"現在"に起こっている」ということであり、「自意識はその"現在"を捉えることができない」というのです。

自意識に対する全能性の思い込みを捨ててくださいとお願いしました。仮にあなたが自意識をオフにできたとしても、それにしたって、背後で花瓶が割れたら振り向きまします。振り向きましますし、その音が「何か割れた危険な音だ」というのは、自意識と関係なしに脳が受け取ってしまいます。

では、本当に、目の前に人間がいるという状況は、花瓶が割れたことに比較して、インパクトはゼロ、というようなことなのでしょう。そこには本当に「何もない」のか。一ミリも脳は「ワッ」としないのか。実はそういうことではないのです。目の前の人間の「姿」が「見える」ものであれば、自意識なしにでもあなたの「脳」はその「姿」に「ついていく」ということをする。何かしらの動作や振る舞いを起こしていくのです。

とりあえずこれは「講義」なので、あなたに仕組みをお話することしかできません。その実践や訓練はまたまったく別で、互いに心身を浴びせあうような何かの関係の中でそれをやるしかありません。ですがこれが講義でしかないというのは、当たり前のことですね。どうぞそのまま進んでください。



脳は「受け答え」をしない

新人の兵士が軍隊に入ると、まず「サー、イエッサー！」と大声で返事することを訓練させられます。少しでも声が小さいとやりなおしさせられるので、もう全力で声を出すしかありません。「お前らはクズだ！」と言われても、ただちに「サー、イエッサー！」。「腕立て百回！」と言われても「サー、イエッサー！」です。わずかな躊躇も許してもらえません。

これは何の訓練をしているのか、あなたは本当にはご存知のはずですが。自意識の機能を立ち上げさせない、自意識の機能をジャンプさせる訓練をしているのです。そうでないと、肝心なときに隊としての動きができません。「お前らはクズだ！」と言われたときに、その「脈絡」を「理解」などして、「はい、そう言えると思います」などという、「受け答え」をしていたのでは、いざというときの行動が遅れます。上官の声が、ただちに脳に飛び込むように、自意識で「受け答え」をしなくなるまで訓練を続けるのでした。

これは子供に対する熱心な教育塾でも同じことがあります。問題用紙を配り、教師が「よーい、はじめ！」という、子供は「やれやれ」という態度では解答を始めません。号令と共に、弾かれたように解答を書き始めます。空手の道場でも同じことをやるでしょう。「〇〇！」と名前を呼ぶと「押忍！」と返事を

します。返事をしないと、「貴様、返事はどうした！」と怒号が飛んできますから、もたもたしてはられません。

脳は「受け答え」の機能を持っていません。「受け答え」をするためには、「脈絡」の「理解」が必要で、それは自意識の機能にもとづいての行為でした。

あなたにはもちろん、受け答えをする機能もあり、その権利も持っています。受け答えをするのはあなたの自由といってもよいでしょう。けれども、もし「受け答えをしない」というやり方があるのを、ご存じなく、またその訓練をしたこともなければ、それが実際にできないというのであれば、あなたは自意識をジャンプして関わりを持つという方法を、単に修得せず取りこぼしてきていることになります。

自意識の全能性についての思い込みを捨ててくださいとお願いしてきました。あなたはここに示されたいくつかの例について、「受け答え」という行為が、本当に不可欠で重要だと思われるのでしょうか。きっとそんなことはないと思います。受け答えをしないことのほうが大事で、受け答えしないことでしか成立しない関係があるのというを、あなたは感じ取れもしますし、またどこかでうすうすご存知でもあると思います。

「受け答え」というのは何も上等なことでもなければ有効なことでもありません。受け答えの必要なシーンも勿論ありますが、そうでないシーンについては、それはきっと「自意識を挟み込まずにいられない」という意地っ張りな習慣です。あなたがどうするにせよ、確かなことはひとつ、「受け答え」はあなたから営みのよろこびを奪うだろうというのは、間違いのないことです。脳は受け答えはしないという、その仕組みをよくよくご覧になってください。



脳

は衝突しない、脈絡は衝突する

先日、社会的に、教育における体罰問題の議論が活発になりました。あなたはここでイメージしてください。体罰容認派と、体罰否定派が、論争をする会議室です。そこに営みのよろこびはあるでしょうか。まず無いと思います。そのようなシーンに、参加したいとも思えなければ、よほど悪趣味でないかぎり、そのシーンを見たいとも思われないはずで

一方で、このようなシーンもイメージしてください。ある教師とある不良少年が至近距離でにらみ合っています。教師がバシッと、強烈に少年の頬を打ちました。それでも少年は教師を睨みつけるのをやめません。それどころか、「それで終わりか、先公」と静かに食って掛かります。睨み返す教師も負けていません。

「これで終わりだ、席につけ」と静かに厳しく言います。

教師と少年が、立場の違いこそあれ、お互いに一人の人間として「勝負」をしています。このようなシーンは、緊張感はありますが、きっとあなたはヒヤヒヤするものの、不快に思われるシーンではない。このシーンのあと、教師と少年はそれぞれにイライラしているのでしょうか。少年はきっと、「どうってことねえよ」と言うでしょうし、教師のほうも「どうってことない」と言うでしょう。

あなたは、この教師と少年のやりとりを見て、そこに営みによるこびが無い、とは断言されないでしょう。教師と少年が、何年後かに街中で出会ったら、かつての少年は「よお、クソ先公じゃねえか」と言うかもしれませんし、教師のほうも、「よう、悪ガキ」と言うかもしれません。少年はその後友人に、「古い、知り合いでね」と意味深に説明するかもしれませんし、教師のほうも、「教え子、でね」と意味深に言うかもしれません。あなたもご存知のように、本当の問題は頬を打ったかどうかということではないのです。人と人の関わりが残ったかどうかの問題です。もし人の関わりなどこの世に存在しないというなら、あなたは体罰の全てを単なる暴政だとして否定しなくてはなりません。

会議室の議論のほうは、ビンタこそ飛び交いませんが、きっとキリキリして、イヤな口調の口論が続きます。そして終わったあともお互いにイライラしているでしょう。表面上だけ握手して、内心ではいがみあっ

ているに決まっています。なぜそのようなことになるかという、脈絡を衝突させあうからでした。一方は教育理念からの脈絡を持ち出し、一方は基本的人権などの法理論の脈絡を持ち出してくる。これは衝突するに決まっているし、まず整合することもないので。よほど理論的にすすめば弁証法的に矛盾が解決される道筋が見えてくることもあるのですが、まずそんなことは期待できません。

一方、教師と不良少年のほうは、会議室とはまったく別のシーンです。一見、二人は衝突しているように見えます。けれども、別に教師は少年に「死ぬ」と思っているわけでもないし、少年も教師に「死ぬ」とは思っていない。会議室のほうは正直互いにそう思っています。下品にならないように我慢しているだけで。

教師と不良少年は、衝突しているように見えて、互いにつぶしあってはいません。互いに向き合って、どれだけヒリヒリと緊張感が高まっても、互いに一步も「引き下がらない」というだけです。お互い、周囲がどうこうとか、世の中のルールがどうこうとか、そんなことは気にしていません。教師から見て「コイツ」というのがあり、少年から見て「コイツ」というのがある。そして互いに、「コイツを相手に引き下がってたまるか」と向き合っています。ある意味では「存在」を認め合っているのです。

会議室のほうは、それぞれ自分の派閥が持ち込んだ脈絡のほうを優先されるべきだと信じていて、相手にそれを「理解」してもらおうとしています。理解してもらおうとするのですが、相手はまったく逆の立場から、同じように「理解」してもらおうとしている。それで初めは相互に協力的なのですが、いったん火がつくと、「脈絡のわからないバカどもめ」とお互いにつぶしあう気持ちになる。

脳は人の「存在」を受け止めます。そして「存在」というのは、それだけでは衝突はしないのです。脳は「存在」を受け止めるからこそ、その存在が「見える」ようになるのでもあります。また、睨まれても頬を打った教師、頬を打たれても睨み続けた少年、両方が「引き下がらない」ということを見てください。引き下がらないということは、お互いにオリてないということで、それは同時にお互いがお互いの用意したものに「ついていっている」ということでもあります。お互いに逃げておらず、かといってお互いに衝突したりつぶしあっているのでもなければ、それは「ついていっている」という状態しかありえません。

自意識の機能は「脈絡」と「理解」です。その「脈絡」というのは、自分の中で抱えている分には、正しく思えて有用に思えるのですが、向こうは向こうでまったく別のところから脈絡を持ってきますので、衝突します。こんなことは痴話喧嘩でもあります。「あいつが悪いんだからあいつから謝るべき」「わたしが悪いのかもしれないけどこういうときは男性から謝るべき」「それは男性が男として立ててもらっていたら話」「でもその男を立てるとかいうところからこの喧嘩は始まったのよね」と。こんなのはもう、衝突するか、オリるか、破局させるかのいずれかしかないので。こんなことに営みのよこびを見出す人はいません。

脳は存在を受け止め、衝突はしないということをよく見てください。犬でも猫でも野良はさかんに喧嘩をしますが、そのあとでイライラしている犬猫を見たことはないですね。彼らがイライラしないのは、別に脈絡を衝突させあったのではないからです。



コ

コミュニケーションは「行為」ではない

先ほど教師に頬を打たれた少年が、今度は隙を見て、教師に後ろから「カンチョー」をしたとしましょう。教師は「ぐわっ」ぐらいは言うはずです。教師は「貴様一」と言うとしても、そのころには少年はもう「ざまーみろ」と捨て台詞を残して走り去っている。このとき教師は少年を憎むか、あるいは軽蔑したりするでしょうか。「まったく困った奴だ」ぐらいには思うかもしれませんが、でも同時に、「何か、見どころのある奴だな」とも感じるかもしれません。

一方で、体罰問題で討議した両派の論客が、同じく隙を見て、後ろから「カンチョー」をする。「ぐ

わっ」となりますが、一体どんな感じになってしまうでしょう。きっと呆然として、「ありえない」「信じられない」と、純粋な軽蔑において見捨てるのではないのでしょうか。唾を吐き捨てたい気持ちになるかもしれない。

極端な例で、冗談みたいですが、わかりやすいのでこのままゆきます。コミュニケーションというのは、本質的に「行為」ではありません。もしコミュニケーションが「行為」であるなら、「カンチョー」はそれぞれに等しい効果を残すべきです。ですが実際にはそうはゆきません。

同じようなことが、実は日常的にもあります。あなたは冷たい人と握手するより、あたたかい人に「デコピン」をされるほうがはるかに心地よく思えるはずですが。握手とかデコピンとかいう、「行為」の内容は実は問題ではない。だからそれは、キスでもセックスでも同じなものでした。

あなたと、ある初対面の男性がいたとしましょう。あなたと彼が初めて会い、一対一で対峙する形になります。別に何でもない、ありふれた初対面です。でもそのときに、お互いが"脳の人"であったら、もうコミュニケーションは起こっています。お互いの「姿」が見えるので、お互いにそれについていきますし、「引き下がる」というような根性なしの理由も特にありません。

初対面の、いきなり冒頭でも、男性が女性のおでこにデコピンぐらいはできます。その「行為」は特に問題ではありません。それをしたからといって、何かよいコミュニケーションが得られるわけではない。ただ「確認」ができるだけです。デコピンぐらいはしてよい程度の、「人の関わり」、そのコミュニケーションが、今あったよね、ということの「確認」が。

少し講義から離れて、僕の個人的な体験からお話しすると、初対面の女性をデコピンで出迎えることぐらい、何も珍しいことではありません。なんでもないナンパのシーンでさえ、そんなことは普通にあります。いえ、「ありました」というべきでしょうか。講義の大タイトルは「現代と恋愛」ですから。

僕はよくこういう言い方をします。我々は、原子力発電所が吹っ飛んでも、それをなんだかんだ受け入れるのに、人が人にデコピンをすることも受け入れられないのかと。そんなさびしさの中で、愛だとか恋だとか、人を思いやるとか大切にするとかを、議論しなくてはならないのかと。そういうとき、僕は正直なところ、僕の性格によって、「まるでクソだな」と内心に思います。我々はしばしば、重要な国会議員の選挙でさえ投票を棄権するのに、たかがデコピンのひとつをとって、見逃せない重大事のように捉えます。

それで「心を開く」というようなことを大真面目に議論するような、滑稽な構図に参加してたまるか、と、僕はよく思います。講義に戻りましょう。あなたはそんな滑稽な構図に参加してはいけません。デコピンの問題は周辺国との領土問題よりも重大性はきわめて軽微です。

いわゆる「ビビビってきた」であるとか「一目ぼれ」であるとかを、本講義は肯定的に捉えません。認めない、と言ってしまってもよいでしょう。「ビビビ」と来ることは、本当にはきっとあるのだと思いますが、人々が自意識を膨張させた現代の中で、期待して得られるようなものではありません。あきらめましょう。そして少なくとも、デコピンひとつをする程度のことで、運命の赤い糸や超心理学的な「ビビビ」は必要ありません。デコピンのそのようなところまで含めて、コミュニケーションは「行為」によるものではないのでした。「行為」によって得られることもなければ、「行為」によってつぶれてしまうことも、本当は無いのです。



意識は振る舞いに取り残される

さて話はよいよ難しくなってしまいます。ですがあなたを混乱させる話ではありません。あなた自身が"脳の人"であった場合、その感覚はどんな感じなのだろう？ という話です。"脳の人"であるあなたの

「姿」と「振る舞い」は、相手に「見える」として、あなた自身にはどのような感覚で捉えられるのか？
この話はどうしても難しくなるので、ひとまず一連の流れを順番に箇条書きにしてみます。

1. あなたの「振る舞い」は、自意識から切断されている
2. あなたの「振る舞い」は、あなた自身の脳にも見えている
3. あなたと相手は、あなたの「振る舞い」を、まったく同じに「確認」している
4. その「確認」と、やはり切断されて、「振る舞い」は次に続いている

このことを理解してもらうためにはきつと、あなたに思い切った「もし」という仮定を想像してもらう必要があります。そうでもしないと、どうしても、脳と自意識を区別して捉えることができないものですから。

あなたの名前が花子さんだったとします。ではあなたは、「花子さん」の身体を、SFのように「乗っ取った」ものだと思ってください。そういうSFがよくありますね。あなたはあなたの自意識を、花子さんの身体に侵入させ、その身体を乗っ取りました。今のあなたの身体は、花子さんのものを乗っ取って借りているだけです。

そして、その身体には、当然ですが、脳みそも入っています。それで、あなたが侵入した自意識として、気を張っている間は大丈夫なのですが、あなたが油断していると、あなたの身体を花子さんの脳が勝手に動かしてしまうことがあるのでした。花子さんの脳は、友人の姿を見ると、脳がワッとなるらしく、「おい！」と勝手に声を出して大きく手を振ってしまう。あなたはそれについて、「おいおい、元気だな花子さん」と呆れています。そのうちあなたは、この花子さんの脳がどのようなものなのか興味を湧いてきます。どうせ花子さんの身体を借りている間だけのことなので、いいでしょう。この脳はどういう挙動をするんだろう、と、面白がって、一度好きにやらせてみることにする。あなたは、花子さんの身体が脳からケラケラ笑ったりするのを見て、それを「へえ、こういうふうに笑うのか」と「確認」します。花子さんはとくに太郎君と仲良しで、よくこづきあったりしています。そのときあなたは、「仲よしだねえ」「わかるけど」と苦笑して二人を眺めているでしょう。あなたは自意識の立場から、「太郎君を」ではなく「花子さんと太郎君を」眺めているはずで、花子さんの脳と太郎君の脳がどう遊んでいるのか、それはわからないけれど、遊んでいることを「確認」はできる。

強引にでも例え話をするならそのような具合になります。さて、もう一度さきほどの箇条書きに戻しましょう。あなたの振る舞いは自意識から切断されています。あなたが花子さんの脳に振る舞いをあずけたら確かにそうなります。そのとき花子さんの振る舞いは、花子さんの脳には「見えて」いるのでしょうか。あなたの自意識からはわかりませんが、脳は脳で何をやっているか自分で見えているはずで、太郎君の側にも自意識はあります。太郎君の自意識は、ちょうどあなたと同じように、花子さんの振る舞いを「確認」しているはずで、あなたとまったく同じタイミングで。あなたはまるで、太郎君の自意識と、友人であるかのように、花子さん面白いわよね、と肩をすくめあっているかもしれない。あなたがそうして花子さんの振る舞いを面白がって確認しているときも、花子さんの脳は次へ次へと振る舞いを進めています。

そろそろ、例え話から離れてもご理解いただけると思うのですが、つまりです、「あなたの脳は思っているほどあなたのものではない」のです。あなたは生まれながらに自意識はもっていなかったもので、自意識については「あなたのもの」と言ってよい。けれども、脳は生まれたときから勝手に身体についてきたはずで、だからそれは、実はいっほどあなたのもではないのです。あなたの心臓が、あなたのもというには、あまりに勝手に機能してくれているように、あなたの脳という器官も、いっほどあなたのもではないのでした。

時間軸上、現在→認識と進むわけですから、脳は自意識に「先行」します。そして、その先行する「脳」というのが、いっほどあなたのもではないということです。あなたの振る舞いを、先行して勝手に決めて作り出している装置が実はあるのです。それが脳なのでした。そして、その先行する「脳」は、相手に「見える」もので、相手に「ついてくる」ということをさせるのです。その先行機能が、コミュニケーション

を生み、人との関わりを作り出し、営みのよろこびを作り出しています。あなたの自意識はそれを確認するだけで、実はあなたの自意識は何も作り出してはいないのです。あなたの自意識は、振る舞いを生み出す装置ではなく、脳が生み出した振る舞いを「確認」するための"モニター装置"にすぎないのです。



先 行機能をどうするか

"脳の人"と"自意識の人"という言い方をしています。そして、もう察しをつけていらっしやると思いますが、そのとおりで、"脳の人"と"自意識の人"は、時間軸上の立っている場所が違います。自意識は「現在」の時点に立ってないので、「確認」をする時点は誰でも同じです。が、"脳の人"は、その振る舞いのスタートを「現在」の時点におき、それを少し後の「認識」の時点で確認しています。一方で"自意識の人"は、「認識」の時点から、認識と同時に振る舞いをスタートさせています。数直線を作図すると、"脳の人"は-1の点から振る舞いがスタートしており、それを0の点で認識・確認しています。脳の振る舞いが先行している。"自意識の人"は、0の点に認識・確認と振る舞いのスタートが一緒くたになっています。そして人間の脳に何か「見える」というのは、その-1の点側のことなのです。

この脳の機能、自意識に対して-1のぶん先行できる機能を、単純に「先行機能」と呼ぶことにしましょう。先行機能は脳の機能なので、自意識では真似できませんし、自意識で「先行しろ」と命令することもできません。

ただ、あなたは自意識で振る舞いをコントロールはできるので、「自意識があるまで振る舞いを起こさないように」と、自意識からの命令を下すことはできます。「先行機能を受け付けないように」という命令だけはできるのでした。

つまり先行機能を「自制」できます。このような機能は状況によって必要です。たとえば仕事で取引先に行って、そこで自意識に確認させていない振る舞いを先行で出させるわけにはいきません。場合によっては、思わずバチンとやっちゃった、ということで、犯罪にさえなりかねません。

ですから、この先行機能の自制という能力も、やはり必要にはなります。必要というのは、それだけ便利ということなのです。

ただ、便利なのですが、その自制機能を使うかぎり、脳は振る舞いを禁止されていますので、脳が鍛えられるということが起こりません。先行機能が自制されている間は、脳はずっと自宅謹慎を命じられている状態だと捉えてください。これでは脳は鍛えられるわけがないし、いずれもう、出てこいと言っても今さら出てこなくなります。

あなたの脳が、今さら出てくるかどうかは置いておいて、あなたは一つのことを考えてください。「先行機能をどうするか」と。それを使う権利と使わない権利があったとしたら、あなたはどちらを選ぶのかを。

先行機能を使ったとき、それがまだ鍛えられていない場合、脳はいうほど賢くありません。経験がなさすぎるからです。振る舞いにバリエーションがないため、TPOが利かず、恥を搔くことになるでしょう。人に迷惑をかけることも十分あります。ただ、そうして恥を搔いたことは、脳は学習しますので、そのことによって鍛えられてゆきます。まるで子供のようなのですが、昔から謹慎処分で閉じ込められていたら、脳は当然未熟な子供のままなのではないでしょうか。それを鍛えるには、野原に子供を走り回らせるように、脳の先行機能を走り回らせるしかありません。そのうちに脳はどんどん賢くなります。そうそう自意識で自制しなくても、脳の先行だけでそこそこなんとかしてくれると信頼できる。もちろん自意識に先行しているので、どのような振る舞いをするのかはわからないのですが、「鍛えてあるから」という信頼があれば、思い切ってまかせられるでしょう。この、自分の脳の先行は「大丈夫だ」「ちゃんとやってくれる」という、鍛錬を

根拠にした上での信頼が、いわゆる「自信」です。自意識の判断力や価値観に自信があるわけではありません。自分の脳が先行、「やらかす」ことが、大丈夫だ、と信頼できるのが自信なのです。もちろん、いくら信頼するといっても、任せきるには、度量のいることでもあります。

その信頼と度量についての問題です。あなたは自分の振る舞いを、脳の先行に任せられるかどうか。あるいはいっそ、そうして「やらかす」ようなリスクは徹底的に排除するか。排除すれば安心ですが、営みのよろこびの一切は得られません。それでも、どうしてもプライドの高い人は、徹底して恥を搔かないほうを選ぶことがあります。そのようなことは少なくありません。特に加齢が進むほど、今さら恥を搔けない、という思いは強くなります。

あなたの脳が「今さら」、その先行のために出てきてくれるどうか、それは個人差があるのでわかりません。ですがそれを脳に今さらながら任せてみようということであれば、あなたにはあなたの脳の振る舞いを許す度量が必要になるはずで、また友人同士、脳の振る舞い（とその未熟）を許しあえる度量の関係も必要になるでしょう。

第

七講は、これで主題部分はおしまいです。この後に付録として、「自意識とは何か」ということ、一般論のようなものを書き足しておきます。本講義の趣旨にはあまり重ならないのですが、やはり隙間のない理解をされたいという方にとっては必要な部分になると思います。こちらはまったく難しい話ではないので、是非合わせてお読みください。

「現代と恋愛」という大タイトルの中で、迷いましたが、この第七講に、「脳は自意識に先行する」を選んでお話ししました。迷ったのは、この内容は厳密にはもう「未来と恋愛」に差し掛かるというべきだからです。現代は自意識の時代だと本講義は指摘しているわけなので、でも、「とはいえ」という気持ちで、この講義内容を差し挟みました。いかに"講義"だからといって、未来の方向を指し示さなくていい、というようには、僕には信じきれませんでした。それでいささか、講義というよりは講演というほうへ踏み出していますが、ご容赦ください。

この第七講、「脳は自意識に先行する」は、どうしても主題として難しくなります。突き詰めるところ、自分で「確認」する前に、脳にはもう何か「見えて」いて、また自分で「確認」する前に、「ついていく」とか動くとか振る舞いを起こすことが可能だということです。それはにわかにはわかりやすい話ではない。特に、自意識の万能性、自意識で「確認」できることが全てだと、いつの間にか思い込んでいたのだとしたら。

賢明な方は、すでに手元にメモ書きを残されているかもしれません。ある作図の入った……その作図の中で、「脳」と「自意識」が分離されて書かれていれば、ひとつの正解です。そして脳は脳とコミュニケーションしており、自意識はそれを一方的に確認しているのみだ、という矢印が書かれていれば、それも当たりです。脳と自意識の立つ時点、「現在」と「認識」を数直線上に書かれた方は、「認識」の点であるゼロ点から、「現在」の点である-1の点への、わずかな距離が、実はどれだけ重要で犯しがたいものであるかを感じ取られると思います。

では、ここでひとまず、第七講のしめくりとします。お疲れ様でした。続いて第八講へどうぞ。この講義より難解な話はもう出てきませんので、その点をご安心くださって、どうぞ進んでください。

<以下付録>

「脈絡」は、実は数学

数学というと、 $y=ax+b$ と、すぐ黒板の授業を思い出される方がいらっしゃるかもしれませんが、実は数学といっても、物理や化学と同じように、この世界の实情から切り離された学問ではないのです。あなたにひとつ問題を出します。あなたの前に、五体満足の人々がたくさんいます。足の数を数えると20本でした。人数は何人でしょうか？ 答えは当たり前ですが10人です。これを数式で書くと $y=2x$ となるだけです。足 $=2\times$ 人数ですね。仮に事故などで両足をなくされた方がその中に1名いらっしゃるなら、 $y=2x-2$ となります。動物によっては足の数が2本とは限りませんし、足を持たない動物だっていますから、それらのことを一般化すると、 $y=ax+b$ と書かざるを得ない。そういうふうに数学はできています。

あなたが駅の改札口にいて、ポケットをもぞもぞしています。右ポケットに入れたはずの切符が無いのです。次にどこを探りますか。当然左ポケットを探りますね。つづいて、「あ、ハンカチを出したとき、あやまってカバンに」ということに思い至り、カバンの中を探ります。そしてようやく「あった」となる。

もしあなたに、脈絡という機能がまったくなかったらどうでしょうか？ あなたは友人に電話を掛けて、「あなたの家にわたしの切符置いてなかった？」「あなたわたしの家に来たことないじゃない」というような、荒唐無稽な話になりかねません。なくした切符が友人の家にあるわけがないですね。なぜありえないかといえば、「脈絡上ありえない」とあなたは言うはずですが。まず友人の家に行ったこともなければ、そもそも切符を入手したのは券売機に触れたあとで、さらには、その切符を使ってしか自分は駅の構内に入れなかったわけで、電車に乗って移動したということは、必ずその道中のどこかで切符をなくしているはずなのです。

これは数学的に、「切符の移動した座標をもっとも確率の高い順に述べよ」というような問題を解いているのに等しいのでした。右ポケットがだめなら左ポケット、それでもだめならジャケットのポケット、そうでないならカバンや財布。でも少なくとも自分の入った改札口から現在の立ち位置までのどこかに座標は限定されます。

脈絡の機能とは、実はこのような数学の機能なのでした。部屋の窓を開けると風が入ってきます。ということは、必ず部屋のどこかから風が出ていっているということ、あなたはご存知のはずです。難しく言うと、部屋の容積は一定で、部屋の気圧も一定に保たれているとすれば、流入した分の空気はどこかへ出て行かないと脈絡が合わないからです。これを数式で書くと、たとえば $V(\text{const})=V(\text{const})+v(\text{in})-v(\text{out})$ というようになり、この数式を解くと $v(\text{in})=v(\text{out})$ が導かれるということになるのです。

数学とは何に必要かといえば、この場合、あなたが「別にわたしの部屋に限らずね」と一般化して言うために必要な学問です。誰の部屋だって容積は $V(\text{const})$ と書いてしまっても一般性を失いませんから。あなたの家の台所に換気扇があると思いますが、その羽を仮に逆回転させたとしても、換気される空気の量は同じです。 $v(\text{in})=v(\text{out})$ ですから。ただ、肝心の台所の煙が、集中的に排気されるわけではないので、逆回転では実際困りものですが。



意識は五歳以降に成熟する

$x \times y$ という積の結果が必ずマイナスになる、とします。このとき x の値はプラスでした。では y の値はプラスでしょうかマイナスでしょうか。当然マイナスですね。逆に x がマイナスのときは、 y はプラスになりますね。例外があるとすれば、 x や y がゼロのときだけです。ゼロのときは、掛け算をすると、プラスもマイナスもよくわからなくなります。

こんな数式には何の意味もないように思えるのですが、これは例えば、交差点の信号などのことなのです。青信号は「進んでよし」なのですが、それがなぜ「進んでよし」なのかというと、交差側が赤信号だからです。逆に、赤信号が「進んではいけない」なのは、交差側が青信号だからですね。これが「脈絡」です。もし子供に「赤信号は進んじゃだめ」というのを、脈絡と共に教えたいというときは、「こちらが赤ならあちらは必ず青なの」と教えなくてははいけません。

水道の元栓を締めてあれば、いくら蛇口を開いても水は出てきませんね。これも脈絡です。水量を元栓×蛇口と表せば、元栓がゼロなら蛇口をいくら大にしてもゼロです。これは当たり前に見えるのですが、そうではないのです。実際過去には、「蛇口を買って壁につけたけど水が出ないぞ！」というクレームがあったという逸話が残っています。

子供にはいかにもありそうなことだと感じませんか。「この蛇口を取り外して二階につけたら、二階からお水が出るの？」と。医学的なレポートではありませんが、およそ五歳未満の子供は、まだ脈絡の機能を成熟させておらず、ただ脳によって「この蛇口というものをひねると水が出る」としか知っていません。僕も子供のころの記憶が残っています。ビデオテープの「巻き戻し」というのが不思議で、「これってずっと巻き戻したら、ザーッと昔のテレビも観れるの？」と両親に聞いたことがあります。まだ脈絡の機能が弱いとそんな具合です。

ターベル・コースという手品の百科事典に、このことが書いてあります。手品というのは、5歳から105歳までの人間が楽しめる芸術であると。やんわり書いてあるのですが、それは五歳未満の子供には手品がわからないということでもあるのでした。実際僕も、ある機会に幼稚園で手品をさせられたことがあるのですが、先生たちが夢中になるばかりで、肝心の園児たちには何のことやらポカーンとわかりません。コインを手の中に握った、それは手の中にある「はず」という、その脈絡がわからないのです。ですからコインが消えてなくなったとしてもまったく驚きません。

なるほど子供だからなあ、という、面白い話なのですが、われわれ大人も、じっくり見ると大したことはありません。あるとき銭湯で、もう中年のおじさんでしたが、同じく連れ合いの中年のおじさんと、「この電気風呂の湯って、洗面器に汲んだら、それを浴びてもビビビってなるのかよ？」「ええっ、怖いこといなよ。そうなのか？」と大真面目に議論していました。その後、おそるおそる、洗面器に汲んだ湯に手を突っ込んでいましたが……



意識の仕事

「脈絡」が難しい話になると、たとえばこんな話になります。未成年者と金銭貸借の契約をしても、それは後に取り消しができます。自由契約の作り出す法的効力より民法に定められた未成年者の行為能力制限が優先されるからです。ですが未成年者が成年であると偽っていたら今度は同じ民法上の「制限行為能力者の

詐術」というのに該当し、取り消しが利かなくなります。未成年が親を連帯保証人にする架空の書類を作ったとして、そのようなものも無効ですが、それを受けて親が「十円だけ払ってやる」としたら、これは「無権代理行動の追認」になってしまい、その架空だった種類も追認されて有効になります。

こうして複雑化した脈絡は、素人にはもう追跡できなくなりますので、専門家が必要になります。

あるいは、誰かが大怪我をしたとき、それが「大怪我だ」「たくさん血が出ていて危ない」ということは、誰にでもわかるのですが、だからといってどうしたらよいかは素人にはわかりません。われわれだって、「心臓が全身に血液を送り出して人体は生命を守っている」という程度の機構脈絡は知っていますが、それ以上のことは知りません。だからどうしたらよいかわからない。医師は専門的にこの機構脈絡を知り抜いている職業です。医師はただちに、「ショック状態があるから、麻酔して、それからクロスマッチと、輸血の準備、あと抗生剤と昇圧剤も準備して、まず血管を縫合して止血し、開放部骨折を洗浄してインプラント修復します、鎖骨の骨折はひとまず保存療法とします。外傷は大きいですが幸い意識もあり脳波の異常や内臓破裂は見当たりません」というような治療方針を立てます。全て、人体がどのように生命を保っているか、それが今どのように損傷しているか、そしてどのようになら治癒しうるかという、脈絡を頭に叩き込んでいるからこそできることです。

ぐっと簡単な例に引き下げてみましょう。あなたの部屋にスピーカーがあり、右のスピーカーから音が出なくなりました。あなたはスピーカーを買い換えるべきでしょうか。きっとその前に、左右のスピーカーのケーブルを入れ替えてみるべきです。それで今度は左のスピーカーから音が出なくなった。それなら壊れているのはスピーカーではなくケーブルです。「脈絡」ですね。あなたは無駄な出費をせずに済みました。

自意識というのはそのような「脈絡」の仕事をしているのでした。また勉強というのも、そういう脈絡の機能を鍛えるために本来するものです。

勉 強は自意識の機能を合理化する

あなたのPCをパワーアップさせてあげます、といて、僕があなたのPCを改造し、「巨大なサイズで」「高熱を放ち」「ブオオオンと轟音のする」PCに仕立てたなら、あなたはきっと怒るでしょう。PCのパワーアップとはそういうことではないはず。むしろ「小さく」「静かに」「必要最小限の消費エネルギーで済む」PCこそが、パワーアップしたものだといえます。

あなたは勉強をしなくてはなりません。社会的な立場のためにもそうですし、あなた自身のためにも必ずそれは必要になります。それは自意識の機能を強化し、鍛錬するためです。自意識の強化と鍛錬は、PCと同じく「合理化」に向かいます。自意識の、不必要な大きさを縮小し、動作に消耗するエネルギーを削減し、ドタバタ音を立てないようにする、そのためにするのが勉強です。そのために勉強を「みっちり」します。

「この問題を解きなさい」と問題を与えたとして、ぎゃあぎゃあ騒ぐのは勉強をみっちりしてきた側ではなく、できていない側です。騒ぐどころか、発熱にやられてドタバタ逃げ出したりさえするはず。騒ぐどころか、発熱にやられてドタバタ逃げ出したりさえするはず。騒ぐどころか、発熱にやられてドタバタ逃げ出したりさえするはず。

言い方は悪いですが、「感情的なおばさん」をイメージしてみてください。何事についても「んまあ」と大げさなおばさんです。あなたはそのおばさんの運転する車の助手席に乗るのが少し怖いはず。それはそのおばさんが自意識の鍛錬にいまち優れていないからだと言えます。三車線が二車線に狭まり、後ろの車がウインカーを出して煽るところ、左に工事の看板が出ていて、カーナビが「まもなくバイパスがあります」と警告します。こうなるとおばさんは与えられるパケット情報の処理ができず、ハンドルにしがみついて必死になりますが、もう頭が沸いてしまって判断能力を失っています。車の運転なので、脳の機能も要るのですが、自意識の脈絡の機能も要るのです。もし脈絡の機能が要らないならば運転免許に学科試験は必要ありません。助手席にいたあなたはたまたま、申し訳ないですが、「高性能な運転手さんに取り

替えたい」と思われるでしょう。あなたの身が危険なのではないかとありません。

人間の生活は、そのように脈絡の機能も駆使できなければ、滑らかに豊かに生きていけません。そのため勉強を課されるわけですし、あなたもできる限り、それに「みっちり」応えていくべきです。脳を鍛えることとは、まったく別次元で。



意識の握力

勉強を「みっちり」というのは、自意識の機能の、いわば「握力」を鍛えるためです。PCでもそうですが、高性能でも機能が不安定だったり、耐久性が虚弱だったりすることがあります。家庭用でひっそり趣味に使う分にはそれでよくても、たとえば医療現場であるとか、戦場で使うようなコンピューターだとそれでは困ります。雨に濡れても風に吹かれても、土ぼこりの中でも、やはり高性能でありつづけるコンピューターでないと、危なっかしくて実用に耐えません。

自意識の機能が「ストレス下でも失われない」という頑強さが必要です。本来は頭のよいはずの人間が、運転をしていて、運転自体は上手なのに、後ろからクラクションで煽られたら、とたんに慌てて動作が不安定になるということがあります。これは性能は足りているのですが頑強さが足りていないのです。そのためには勉強は「みっちり」やられる必要があります。後ろから少々蹴飛ばされても脈絡の機能が狂わない、というような鍛えられ方が要る。

このようなことがあるので、しばしば、頭の生まれつき良すぎる人が、実用に耐えない具合に育ってしまうことがあります。彼は「みっちり」やらなくても東京大学に入れてしまうのです。誰も文句のつけようがないので、後ろから蹴飛ばされることがありません。けれども、それはたとえば恋愛などになれば、プレッシャーやストレスが掛かりますから、話が変わってきてしまいます。彼の数学的頭脳から言えば、自分が彼女に愛されていないということの脈絡は、理解に容易なはずなのですが、その理解が受け止めきれず、ストーカーになったりします。

ある大学の教授が、自分が感電事故に遭いながら、その物理学の知識で自らを救ったという逸話があります。トラクターで作業をしていたのですが、あやまって電柱を倒してしまいました。電柱が倒れてきて、電線を浴びて感電してしまいます。

それを助けにきた若者に向けて、「片足でトラクターに乗ってはいけない！」と、教授は制止しました。「両足でジャンプしてトラクターに乗るんだ。そうでないと、君の片足はアースになって、全身に通電してしまう」と。トラクターはタイヤで地面から浮いているため、地面とは絶縁で保たれています。ですからトラクター上は今高電圧なのですが、今電流が大量に流れてしまっているのではないのです。そこに若者が片足なり片手なりをつけたら、彼自身が電線になってしまい、電流の流れる流路になってしまう。一瞬で即死するでしょう。それで若者は両足でジャンプしてトラクターに乗り、トラクターを後退させて、事なきを得ました。

全身が高電圧に痺れていてもなお、「電気は電気だ」と、物理学の脈絡が失われない。ここまでくるとまさに「筋金入り」です。勉強をやるなら「みっちり」やらねばならないというのは、この筋金を入れるためなのです。



意識は「陶酔」する

勉強を「みっちり」やると、いよいよ表面的な楽しさはなくなってきます。妙な「ハイ」の状態にはなりますが、いわゆる「楽しい」という状態ではなくなってくる。この、「勉強は楽しくない」ということは、意外に大事なことなので、覚えておいていただくとよいと思います。後の講義にまた出てくる話ですが、先に少しお話ししておきましょう。

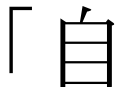
自意識はパケット情報を処理する装置だとお話ししました。それがみっちりした勉強となると、さんざん嘔まないし飲み込めないし消化もできないというようなものになるので、逆に自意識のダイエットによいのですが、そうではないパケット情報、とにかく自分に流し込めるような、ジュースのようなパケット情報もあります。

自意識は、そういった甘露のパケット情報を流し込まれると、「陶酔」と呼ばれる状態になります。一種の楽しさで、これは麻薬的に人を中毒にさせるものです。それは甘露のジュースなので、自意識は肥え太っていくのですが、それに起こる「陶酔」に中毒性があるので、やめることができなくなります。

「陶酔」は、めまぐるしい映像や、言葉や数字などの記号、意味のある音などを、次々に流し込むことで起こります。自意識をわかりやすく"こすりあげる"ふうにして、陶酔が起こると捉えて間違いありません。たとえばパチンコ遊びなどがその代表です。めまぐるしい映像、動き回る球、激しい音、明滅するランプなどが、人を陶酔させます。そこに金銭的な得失も加わって、自意識をひりひりこすりあげます。パチンコは無論、負ける人のほうが多いので産業として成り立つわけですが、負ける人でもなぜ遊びに行くかという、そこに起こる「陶酔」が楽しく、中毒性があるからです。

「陶酔」だからといって、何もかも否定する必要はありません。陶酔がまるで無いというのも少し寂しい気がしますが、あえて「陶酔」の仕掛けの中で自意識を振り回されないようにするという、自意識の握力の鍛え方もありますから。とはいえ、その陶酔中毒にすっかり自分の機能を持っていかれるだけ、というのは話が違います。

パチンコ遊びに限らず、「陶酔」を遊ぶ場合には、きっとそれに対極にある何かで、バランスが取られていなくてはならないでしょう。パチンコなどの遊びはきっと、ハマらないではいまいち面白くないはずですが、そうしてハマっていても、一方で何かが強烈にバランスを取っていてこそ、それは汚染的でない遊びになりうると思います。あなたもきっと、車の運転が上手でないお婆さんが、パチンコにハマりだしたら、それはさすがに制止したい気持ちに駆られると思います。



「自意識過剰」とは

一般によく「自意識過剰」と言います。「みんながわたしに嫉妬している」というのは自意識過剰ですし、「みんながわたしを嫌っている」というのも自意識過剰です。過ぎた増長も自意識過剰なら過ぎた卑下も自意識過剰です。正解は大半の場合、「周囲はそれほど注目していない」です。仮に一瞬注目したとしても、半日も経たず忘れます。自分がそうするように、他人も同じようにそうするのです。

自意識過剰というのは、空間における「自分」の存在感を過大に見積もることを言うのですが、それは当たり前だとしても、問題はなぜそのような誤った見積もりをしてしまうかです。それはやはり自意識の肥え太りに原因があるのでした。

自意識の鍛錬は、自意識を合理的に高機能にし、縮小・静音化することでしたが、その逆に「甘やかし」は、ジュースをさんざん与えて肥え太らせることです。<<肥え太った自意識は、中毒の習慣によって、ほとんど瞬間的に、自分が「陶酔」できる筋道を見つけます>>。「みんながわたしに嫉妬している」という空想は、自意識を陶酔させますし、「みんながわたしを嫌っている」という空想も、自意識をマイナスに陶酔させるのです。陶酔中毒を起こしている自意識は、まったく瞬間的にこの発想を掴み取って陶酔します。肥え太った自意識は、もう脈絡を掴んでいる握力がゼロなので、もう脈絡とは関係なしに、ただ陶酔が深く起こるほうへばかり行きます。中毒が習慣になった自意識は、もうそうして陶酔している状態のほうに慣れ親しんでいるので、今さらその状態から離れがたいのです。ヒートアップしていない自意識という状態が、もう感覚的にわからなくなっています。

もちろんこのことは、「脳」の側を機能させるのにも、致命的な障害となります。ヒートアップした自意識が、脳の先行機能を認めたりするわけがありません。自意識過剰の正体は、このように自意識がむしろ「みっちり」鍛えられていないことによるので、根本的な改善は、何かをみっちり勉強するのみであるとか、「まったく陶酔できない」時間を課すしかないように思われます。



作

品は体験を生み出す

ここまでIT端末を代表としてパケット情報を槍玉に挙げてきましたが、「作品」についてはいささが話が変わってきます。今や映画や音楽は十分にダウンロードから得られる時代になりました。それらもパケット情報なのか、ということになると話がややこしくなります。それについての結論は、「作品」については、あなたを陶酔に遊ばせる意図のものでないなら、どんどん触れてゆけばよい、ということになります。

なぜかという、芸術の技法でよく作られた作品というのは、あなたに訴えかける表現の仕組みが違うからです。このことを精密に話すと、おそろしく長く、また難しい話になってしまうのですが、端的に言うならば、それらの作品はあなたにパケット情報ではなくて「体験」を与えようとしています。あなたに吸い上げやすい世界の情報を与えるものではありません。ややこしく描かれたその表現の隙間から、あなた自身の想像力が、ふと世界を自ら作り出してしまふ、そういう技術が凝らされているのでした。

実は芸術作品の体験というのは、あなた自身がそれに呼応することによって、あなた自身で作り出しているのです。だから、たとえばピカソの絵などは典型的ですが、芸術作品の表現は、奇妙に脈絡を外してきます。これはいくら脈絡で追っても理解できないのですが、まったく脈絡が無いだけの無意味に作られているわけではない。ピカソは脳でその絵を描いているので、あなたもひよっとすれば、その絵に何か「見えて」しまうのです。それに「ついていく」ということが起こる場合がある。それが芸術作品の体験です。

さきほど、「勉強は楽しくない」ということを申し上げました。それと同様に、美術館や文学作品を読むことやクラシック音楽を聴くことは、パチンコ遊びのように楽しくはありません。「陶酔」に慣れた自意識では、とにかく面白くない、ということばかりが先に立つでしょう。それは確かに、ジュースの流し込みのような陶酔を与えてはくれないのでした。

ただ、みっちりとした勉強と同じように、何か「ハイ」になるところはあり、また、「みっちり」ということにあるように、身体にじっとり汗を書き始めます。重厚な文学作品を読み終わった場合、それに呼応するように読んだとしたら、あなたはまったく「クタクタ」になっているでしょう。それはあなたの脳がはげしい仕事をしたのでクタクタになっているのです。

映画などを代表に、作品というのは、けっきょく娯楽と芸術の境目を明確に示すことはできません。混在していますし、折衷しています。ただ本当に良い作品であれば、あなたをクタクタにさせたあげく、あなた

からその批評やコメントをしようとする気力を奪い去るでしょう。それは脳機能が活性化して、自意識の機能が低下している状態を示しています。

クラシック音楽の演奏があったとき、その後にしきりに「ここが素晴らしかった」とあなたに批評させるならば、それは実はたいしたものではなく、「ホールを出てもまともに歩けなかった」「コメントどころか、とにかくしばらく放っておいてくれとしか思わなかった」というほうが、より深い芸術体験です。その強烈な体験性は、たとえば失恋直後の人間に似ています。「まともに歩けなかった」「コメントどころか、とにかくしばらく放っておいてくれとしか思わなかった」、確かに失恋直後の人間はそのような状態になります。芸術体験というのは、そうして単なるパケット情報の受け取りではなく、はっきりとした体験を人間に与えます。ですから、メディア（媒体）が何であっても、優れた芸術作品に出会えることは、まったく別のことだと捉えてよいのです。

以 上で第七講を終わります。付録を含めるとずいぶん長くなってしまいました。けれども残すところあとわずか二つです。どうせなら最後まで駆け抜けてから、一休みにされるほうが、その一休みもあなたに官能を与えるでしょう。本講義は、ひとまず駆け抜けてから、またもう一度、次はのんびり読み進められることを推奨します。

第八講

陶酔がよろこびに取って代わる

あ

あなたは脳に起こる営みと自意識に起こる営みとを、はっきり区別されるべきです。現代と恋愛という大タイトルでお話していますが、現代が自意識の発達する時代であり、脳が弱くなる時代であるにも関わらず、あなたは脳の営みとしての恋愛に到達するべきだというのが、この講義のつまるどころの結論です。脳に起こる営みにしか、営みのよろこびは無いのでしたね。それを、よろこびのないまま形式だけ恋愛を営んでも不毛なことです。「リア充」の要件をいくら整えても、そこに営みのよろこびが無いのでは、何が充実しているのか、わけがわかりません。

脳に起こる営みと、自意識に起こる営みとを、あなた自身で峻別するには、あなたはその両方をよく知らなくてはなりません。そこで、脳に起こる営みはどのようなか、先ほどの講義でお話しました。今回はその裏側、自意識に起こる営みの"本性"はどのようなのかについてお話しします。

ところで、このような「現代」の仕組みは、いつから、何を端緒にして、始まったものなのでしょうか。明確な断言は誰にもできないと思います。ですが、本講義では、それが1995年ごろに始まったと、指摘する予定です。現代を実際に生きる我々にとって、過去のことは関係がありませんが、それでも「現代と恋愛」を把握するのに、過去からの変遷も踏まえた構造的な理解は、あるていど必要だと思われます。そのことは、次回の講義に話され、講義全体の締めくくりとなるでしょう。今回の講義はその次回の講義まで繋がっています。

それでは講義を始めましょう。



意識の正当な営み

前回の講義でも、自意識の「仕事」についてお話ししています。自意識には正当な仕事があり、自意識には自意識の、正当な営みがあります。それは人間独自の営みであり、他の動物にはない営みです。また、典型的には、ロボットで代用が利くようなものや、IT革命・インターネット通信で利便が増すようなものは、自意識の営みだと言えます。代表的なものは役所の手続きです。これは本当には、役所のホームページで全て済ませられるほうが、本当は都合がよい。新聞を読むというようなことも、他の動物には無い、人間独自の営みです。新聞などは、典型的に情報「数」を必要として読むものです。ですからこれは、オンラインのウェブニュースに取って代わったほうが利便が増すところがあり、事実としてその移行は始まっています。

「この薬にはどのような薬効があるか」であるとか、「サラダ油は大きじ一杯で何カロリーあるか」であるとか、そういったことはパケット情報なので、IT革命が正当に利便を増してくれました。今、日本の端から端へでも、電車で行くにはどうすればいいか、どれだけの時間と電車賃が掛かるのかを、オンラインITが即座に回答してくれます。とはいえもちろん、パケット情報の複雑化したものには、まだまだIT化の実現していないものがありますから、それについては専門家が必要なのでした。法律の条文はインターネットで即座に調べられますが、「このような事件について過去の判例はあるだろうか？」というようなことは、まだ専門家の糸口なしには調べることができません。専門家には専門家のITデータベースがあるかもしれ

ませんが、それを利用するのにも、まだまだ専門家の専門的な知識が必要な段階です。まだスマートホンに向かって「法律相談」ができるところまではIT技術は進化しきっていない。

いわば、「未来には、スマートホンに相談すれば、それだけで片付くだろう」というような用事の全ては、自意識の営みだと言えるでしょう。「ドライ・マティーニのレシピは？」と聞くだけで、スマートホンが即座に回答してくれるというようなところに、すでにIT技術は到達しています。

年賀状などは、ビジネス上の礼節として保存されているものを除けば、現在はほとんどオンタイムでの「あけおめ」メールに取って代わられました。このあたりまでは、自意識の営みだと見ていいでしょう。微妙なところですが……これが「手書きのラブレター」になってくると、そろそろ話は変わってきます。手書きのラブレターをもらったとき、その文言をテキストデータに打ち込みなおし、原本は捨ててしまっているとは、人はなかなか感じません。精密にスキャンしてデータを保存すればよいかというと、なかなかそうも割り切らない。それは、手書きのラブレターには手書きの味……というより、その便箋に直接手で触れることができる、そのページをめくってゆくことができる、ということが重要です。物品の直接の感触を受け取るのは脳ですから。脳の立場になって捉えれば、脳はその封筒と便箋と綴られたインクと文字とを、分解して受け取っていません。全体的情報としてその「ラブレター」を受け取っています。これを失うのが惜しいので、人はそれをデータ化して保存すればよいとはなかなか割り切らないのでした。それは割り切るも何も、脳の立場になって考えれば、データ化したそれと手で触れられる便箋とはまったくの別物です。デジタルデータは劣化しませんが、劣化しないというのは、つまり本当にはそこに実物など存在しないからに過ぎないのでした。この実物でないデジタルデータを嘗め回していても、脳はずっと飢餓状態で退屈しています。

手書きのラブレターであれば、そのように、文面も含めた、一通の「作品」として、人はやりとりします。だからこそ、受け取れば貴重に感じられますし、そのぶん、いざ作って贈ってみようとする、とても難しいのでした。

自意識の正当な仕事は、「データでよい」「データのほうがよい」という仕事です。たとえば、野生のライオンが人に襲い掛かるときの映像があったとしたら、それを観察し、分析し、有用なデータ化するのが自意識の仕事です。一方、このとき脳は何の仕事もしていません。目の前にそういう映像があるというのは、別に危機でも何でもないので、ライオンの映像を観ているところにハチが飛びこんできたら、そのとき脳にとって恐ろしいのはライオンではなくハチです。

自意識の仕事と脳の仕事は、そのように明確に違うわけですが、じっさい、自意識の仕事のほうも、人間の営みには必要なものです。たとえば、いくら恋人とは脳の営みがあるべきだといって、彼氏がいつまでも自分の食品アレルギーを覚えてくれないというのでは、困りますし、ちゃんと想ってくれているのか疑わしくなってしまう。

彼女が金属アレルギーだというので、彼氏はそのアレルギーに触れない指輪は無いのだろうかと探し始めます。そのようなとき、インターネットはとても便利です。また、ネットで調べた情報だけでなく、装飾の専門家に相談してみるのもよいことでしょう。

それらは自意識の正当な仕事であり、人と人との、自意識を通じた正当な営みです。自分の母親は足が悪くて車椅子だというのに、バリアフリーの店とルートをきちんと調べてアattendしてくれたというとき、その配慮は人を喜ばせるでしょう。これらのことは必要なことなので、そのために「みっちり勉強すべき」だと、前回の講義で申し上げました。人は動物とは違う暮らしをしていくので、自意識の機能は自意識の機能で鍛え上げていなくてはいけません。そしてその機能を鍛え上げるというのは、「合理的でかつ頑強」というほうに、鍛え上げるものだとし申し上げました。PCのパワーアップと同じで、高熱と轟音を発するのはパワーアップではない、それはむしろスペックダウンだと、このことはまったくわかりやすいと思います。

それが自意識の正当な営みですが、一方には、正当でない営みもやはりあります。営みにはよろこびが必要なのですが、今申し上げてきたとおり、営みのよろこびのために自意識を使うというのは、そもそもの機能として使い方の誤りなのです。あなたはこの段で、「自意識には正当な使い方がある」ということと、同時に、「それをよろこびを得るために使うのは誤りだ」ということを、理解してゆかれればよいと思います。

食事をするのに箸使いは必要ですが、箸が「美味しい」わけではない。合理的でかつ頑強に鍛えられたPCを、“よろこびのために使う”というのは、それだけで何かおかしい感じがしますね。その感じは当たっています。このまま先に進んでください。



意識は「陶酔」する

自意識にはそもそも「よろこび」を得る機能がないのです。第四講で説明したとおりになります。それでも、脳が弱くなり寝たきりになって、パケット専門人になってしまったら、よろこびを得ようとするにも自意識しかその機能のアテはなくなります。

それで、自意識に、そのよろこび(のようなもの)を得させようと、アテにすると、自意識にはよろこびの機能がないので、代わりに得られるのは「陶酔」になります。自意識は陶酔を起こす機能があったのでした。それは一種の快楽ですから、表面上「楽しい」ですし、いっその楽しさは表面に直接くるため、強烈とってよいかもかもしれません。

ですが、あくまでも、自意識によるこびを得る機能はないので、それはよろこびではありません。「現代と恋愛」という大タイトルに引き当てていけば、現代の恋愛は、本来あるべき営みのよろこびにすりかわって、陶酔がそれを占めていることになります。現代が自意識の時代だとするならば、現代は陶酔の時代であり、人々は営みに陶酔を得ている、ということになります。

ですが、陶酔は、必ず「飽きて」しまいます……このことに進んでいく前に、ひとまずここまでのことを整理しましょう。「自意識は陶酔する」ということ、自意識には陶酔の機能があるということ、あなたは明確に知ってゆかれるべきです。

たとえば犬や猫などの動物は、どうしたって陶酔を起こすことはありません。我々は犬や猫やその他の動物に、陶酔によるイヤラシサを見ることがありませんね。それは彼らが自意識というものをほとんど持っていないことによります。自意識が無いので、そもそも陶酔を起こす機能自体を持っていないのです。

それと同様に、乳幼児だって、まだ自意識がほとんど形成されていませんので、陶酔を起こすことができません。人間がはっきりとした陶酔を起こせるようになるのは、おそらく自意識が急激に発達する思春期以降、ということになります。今、俗に言われる「中二病」というのはこれのことを指しています。自意識が急激に発達するにつれて、そこに起こる陶酔に遊ぶクセが強くつく、その表れのことを、あくまで揶揄としてのスラングですが、「中二病」といいます。これは誰でも発達の過程で体験することですし、特に悪く言われるべきことだとは思えません。思春期に急激に発達した自意識は、その後、合理的かつ頑強に鍛え上げられて、「みだらに陶酔グセに耽(ふけ)る」というようなことはなくなっていきます。そこまできちんと鍛えられてゆかない人がいたら、その人は単に鍛えられていないという点において、いくらか冷たく見られるでしょう。それは特に注目する必要もない当然のことです。

自意識にはよろこびの機能がないため、自意識によるこびを得させようとする代わりに「陶酔」になる。ですからやはり、営みのよろこびを得るためには、脳のほうを鍛え、脳の営みを広げてゆくべきなのですが、その脳の機能が飢餓によって弱りきっているのが現代でした。ですから、「陶酔」が文化になっていくよりしょうがないところがある。「陶酔」のもたらす、弊害も含めて……このことから、実際に我々が目にする「現代」の様相が作られてゆきます。

こちらが整理しながら進めてゆきますので、あなたは整理に気を取られず進んでください。



陶

酔は必ず「飽きる」

陶酔は必ず飽きます。それも、ずいぶん早くに、その飽きはやってきてしまう。そして、そうして飽きたり慣れたりしてしまったら、今度はもっと強い陶酔への材料が必要になります。キリがないという状態になる。

ちょうど麻薬の中毒と同じです。麻薬も、初めのうちは少量で、抜群の陶酔が得られるのですが、それはすぐに耐性がつき、慣れてしまいます。そうすると、もう投与量を増やしていくしかなくなります。そして麻薬の投与は基本的によろこびではないので、陶酔が冷めたあとには、やはり何も残っていません。それで結局はさびしいので、それを紛らわせるためには、やはり麻薬を投与するしかなくなる。そうして破滅を知りつつ破滅に向かうのも、人生の一選択かもしれませんが、本講義ではそこまで話を広げず、それは不毛な筋道だと捉えることにします。

陶酔は必ず飽きてしまいます。そして冷めるのも早いものです。これは恋愛で典型的な例を見ることができます。まったくノボせるようにして恋におち、付き合いだしたものの、すぐに「冷めた」と言い出す。そして冷めてしまったら、もうその人のことが好きでも何でもなくなってしまう。好きどころか「うっとうしい」というほうが強くなり、別れますが、別れると今度は、その人のことをきれいさっぱり忘れてしまいます。「付き合ってたんでしょ」「そうだけど、正直すっかり忘れた」と笑い話になる。

陶酔は、いくらそのとき盛り上がったとしても、「思い出」にはならないのでした。このことは、あなた自身、自分の思い出を振り返ってみればわかります。あなたの「思い出」は、振り返って胸を打つように感じられるものについて、思いがけずどれも陶酔的な記憶ではないはずで、一方で、「昔はあんなにキャーキャー言っていたのに」というようなものについて、あなたはきれいさっぱりそれを忘れ去っており、何も思い出に残っていないということが発見されるかもしれません。

あなたは「よろこび」と「陶酔」を区別できるようになられるべきです。それは同時に脳の営みと自意識の営みの区別でもある。別れたとたんに、「なぜあんな人に意地になっていたんだろう」と冷めかえるような交際があります。それはまるでパチンコ遊びにハマっているおばさんが、店を出た途端に自分の損失に冷めかえるような状態です。陶酔的な文化物に触れて、何かひとしきり真実の鳥肌を感じたような気になります。が、それは数時間もしないうちに抜けていってしまいます。それが抜けていってしまい、何も自分のうちに積み重なっていかないのは、麻薬のような、陶酔の中毒物に過ぎないからです。

僕が高校生だったころ、さして友人でもなかった友人が、なぜか僕に打ち明けて話してくれたことがあります。耳打ちするように、他に聞かれないようにでしたが、「ライブに行くと、その熱が、三日ぐらいは抜けないんだ」と、彼は話しました。それはつまり、ここ数日の彼の挙動のおかしさについて、彼が秘密を話してくれたということです。

それに比べて——比べるのはよくないことですが——たとえばサッカー日本代表の試合があるたびに、渋谷の夜は荒唐的に騒ぎになります。それは、熱狂なのか、と見えるのですが、その熱は、翌日の昼にはもうすっかり抜けているように見えます。「あの試合を見て以来、おれは自分の仕事を貫くと誓ったんだ」と、数年間も走っている人はあまりいません。「勇気もらった」と強く言うならば、それは本来、たとえば受験生の勉強する一年を支えたとか、そういうことでないと、本来おかしい。

どれだけ熱狂的に見えても、それが陶酔でしかなかったとしたら、それはすぐに抜けてゆくのです。人に真実や勇気や励ましを与えたりは、本当にしません。それは、その最中には、本当にわからないことなのだとともに。

本講義では、必ずしも、その陶酔を悪いものとは捉えませんが、思春期などは特に、自意識の急激に発達する時期なので、そこに「若気の至り」というような、陶酔だけで付き合った交際というようなものが

あることは、誰にでもあることで、悪く言われるようなことではないと思います。また別に思春期でなくとも、あるいはパチンコ遊びであっても、陶酔が完全なゼロというのは、それはそれで人間として不自然です。本講義はそのように、陶酔にいくらか鷹揚な立場を、合理的に採るものですが、かといって、「陶酔とよろこびの区別がついていない」というのは、まったく別の問題だと捉えるものです。あなたもすでに、その区別がつかないのは、論外だ、陶酔は陶酔でかまわないにしても、と、同意されうることだと思います。

その、陶酔とよろこびの区別のために、あなたが知ったのはこのことです。陶酔は「飽きる」ということ。早くに抜けてしまい、思い出や、大切なもの、支えや励まし、勇気や知恵といったものを、実は何も残さないということなのです。

また、そうして何も残さないというだけならよいのかもしれませんが、陶酔は中毒性のあるものなので…「飽きた」の次は必ず「ぶりかえし」ます。パチンコ遊びで大損をしたおばさんが、翌日にはまたパチンコ屋に行きたがることのように。

自意識にはよろこびの機能がありません。脳にしかよろこびの機能は無いのですから、脳機能の喪失は、そのままよろこびの喪失です。そして、人間は、よろこびの無い時間をずっと過ごしていくということには、そうそう耐え切ることができないのです。それで、得られないよろこびの、寂しさの手当に、「陶酔」をするという遊びは、ますます中毒性を帯びてゆきます。

中毒性を帯びて、それに依存し、抜け出せないというのでは、それはもう遊びという次元を超えてしまっていますね。根本的な解決はきっと、脳の営みとそのよろこびが回復されることしかないと思います。



い わゆる自意識過剰とは

前回の講義でも話しましたが、いちおう復習しましょう。自意識過剰というのは、自意識による「陶酔」、その"焼きつき"のようなものが、習慣になり、とっさにそれを繰り返してしまう、そのパターンが自分に染み付く、ということです。周囲の人々が自分に注目している、という幻想は、幻想なのですが、真に受ければ陶酔することができます。陶酔の中毒になり、陶酔にハマっている人は、ほとんど自動的に、その陶酔のあるほうへバツと飛びつくようになります。周囲が自分に嫉妬している、と幻想を持てば、プラスのほうへ陶酔できますし、周囲が自分を笑っている、嫌っている、と幻想を持てば、それはマイナスのほうへ陶酔を起こします。陶酔の、プラスマイナスはあまり関係が無いのです。陶酔は陶酔であるだけで、ある種の快樂を帯びており、人を中毒にします。自信過剰も自己卑下も、陶酔があり、その陶酔への中毒というのが本質です。自信があるとか無いとかいうことは、本当にはどうでもよくて、その自信うんぬんを「ネタ」に、自意識が「ワーッ」となる、その"焼けつき"にハマっているのです。ただし、そうして中毒になりハマっている、その習慣から抜け出すのは、そんなに容易なことではありません。やはり脳の営みとそのよろこびから得られるまで、根本的な解決の筋道は無いと思われまます。



陶酔の技術が進化する

現代が自意識の時代であるならば、それは陶酔の時代ということでもあります。そして陶酔の時代であるならば、その陶酔のための材料が、時代的に求められているということが、事実になります。是非はともか

くとして、たとえば麻薬中毒の人があふれかえっていけば、麻薬は実際強く求められているというように、是非はともかくとした事実が成立する。現代はその点で、陶酔への需要があり、需要があれば供給もあります。その需給の中で、人に陶酔を与えるもの・与えやすいものについて、それを製作する技術が向上してきたという、このことも事実です。そのことについてお話しします。

ただし本講義では節度として、具体的にどれがどうだということは申し上げたくありません。あくまで一般論としてお話しすることで、十分な理解——と心当たりを——をあなたは得られるものと思います。

自意識の性質というところへ、再び戻りましょう。自意識の機能は、パケット情報の処理であり、表面的脈絡の検査でした。パケット情報の処理ということで、「パケタイズした情報を」「無数に」「ジュースのように流し込む」ことが、自意識を陶酔させるのに有効です。脈絡というのも、本当に難しいものだと、それは「みっちりした勉強」になってしまうので、そうして噛み砕かなくては飲み込めないものではなく、「ジュース」のように甘く一気に流し込めるものが、自意識を肥え太らせるのに有効です。

単純な音や、単純な意味、単純な明滅、単純な刺激を、とにかく数多く、矢継ぎ早に流し込むこと。極端に言うと、打ち込みのビート音と共に、明滅するランプを備え付け、そのビート音に沿わせて、「各駅の映像」と、その「終電時刻の大きな告示」を、早いテンポで次々に表示する、そこに何かしらの甘露——たとえば美少女の画像を貼り付けるなど——を伴わせるのも有効です。とにかくそういうのを、速いテンポでガーッと流し込む。それで最後に、

「終電までまだ時間がある」

というような、本当には何の意味もないけれど、それを意味ありげに「カッコツケ」に出せば、そもそも陶酔を欲しがっている誰かは、そこにありうる陶酔にバツと飛びつきます。「テンション上がる」という言い方をされるでしょう。

それが、架空ですが、ひとつの極端な例です。そういったものは、本当になんでもよくて、とにかく速いテンポで、音と光を伴わせ、甘露やカッコツケの何かを、矢継ぎ早に流し込めば、それだけで自意識は陶酔します。それは単純な、自意識の性質なのでした。自意識を陶酔させるためなら、「1本で100分の映画をじっくり観る」より、「1分で100本の映画のカット・シーンを振り返る」というほうが陶酔します。音と光の明滅を伴わせて。ですがそれはもちろん、1本で100分の映画をじっくり観たそれよりも、じっくりしたものは残しません。急激な陶酔があり、急激に抜けていくだけになります。

その他にも色々な方法が考えられるのですが、その方法論を追求することが本講義の目的ではありません。本講義では単純に、これを「自意識用の陶酔ジュース」と呼ぶことにして片付けることにします。ジュースは「刺激的で飲みやすい」ことが本位です。飲みやすいというのは、「理解が容易」「とにかくわかりやすい」ということであり、刺激的というのは、べったりと甘露であったり、奇抜なスパイスが混ぜ込んであったりです。

重ね重ね、その「陶酔」が悪いというわけではないのですが、それでジュースに中毒になり、自意識がひたすら肥え太っていくというのでは、誰にとっても不本意であるはずですが。ましてその陶酔ジュースは、後には何も残さないのですから、陶酔が冷めれば、やはりよろこびの無い寂しさばかりがあり、さらに強いジュースにしがみついていこうとしてしまう。

近年、時代に合わせて、この「ジュース作り」の技術が、ずいぶん向上しています。それは巧妙になったというより、ひどく大胆になったという具合です。そのジュース作りの仕方が。あなたがスマートホンからウェブサイトを開いただけでも、かなり警戒すべきものがそこにはあります。そこに情報「数」が、ジュースの分子のようにひしめいており、どれもこれも「理解に容易」で「刺激的なトピック」を伴っていることに、あなたは今日から気づくことができると思います。あなたがそのジュースに、「なんとなく」触れているつもりでいらっしやっても、ジュースの作り手側は、それを「なんとなく」では作っていません。あなたの自意識に「陶酔」を与えるために、入念に、それは作り上げられてあるのです。(試みに、情報数の「さびしい」ウェブサイトを探してごらんください。そんなものはもう見つからないはずですが)

情報数が多いと、陶酔が起こりますから、さびしさが紛れます。あなたが習慣的にスマートホンを覗き込み、コンビニエンス・ストアに立ち寄るとしたら、その動機のほとんどは、実はさびしさを陶酔で紛らわすためなのです。そしてそれはすでにほとんどの場合、習慣化を完了させています。

重ね重ね、そうした陶酔の機能と、陶酔の現象は、それ自体が悪だというわけではありませんでした。ただ、それを自分がやっているのに、その自覚がない、知らない、というのは、また別の話になります。あくまで、自分はそのようなことを割とするのだと知った上で、どの程度それに遊ぶのか、どこからが「度を過ぎる」とするのか、それを自分で決定するのが、陶酔との距離感の取り方です。



情

報数でコミュニケーションすることの疲れ

人がよろこびの機能を失い、陶酔の機能でそれを代替させるとしたら、人と人とのコミュニケーションも、その中に陶酔を作り出そうという向きになります。それで、「テンションを上げていこう」ということへ、人は向かいがちになります。自意識を陶酔させるのは情報数でした。それも、理解の容易で、刺激的な、「ジュース」であるほうがよいとお話ししてきています。

たとえば、矢継ぎ早に自分についての情報を語っていくことで、その情報数陶酔を引き起こそうというやり方があります。「自分は〇〇大学を出ていて」「仕事は三つも転職しててさ」「最近ひとつポカをやって」「課長とケンカになった」「でも自分は格闘技やってたし」「最近ジョグとかフットサルだね」「マラソンに出ようと思っていて」「靴の趣味が変わると服の趣味も変わるよね」「けっこう凝り性で、血液型のせいかな」「これフットサル大会で準優勝したときの写真」「こいつとは別のサークルもやってるんだけど」「あとおれ植物系が好きで苔とか育ててるんだよね」「この夏はB級グルメに凝る予定でさ」「あと流星群とか興味ある?」、と、矢継ぎ早に聞かせるやり方です。「テンションを上げていこう」ということで、こういう話し方をされる方は少なくありません。

これらの情報は、どれも理解に容易で、それなりに刺激的なのですが、これがずっと続けられるかというと、もちろん続けられません。どれだけ話題の豊かに見える人間でも、四、五回も会って話せば、そういう話題の「ネタ」は尽きます。

ではそれで、話題が尽きたから黙るかということ、黙ってしまうと、コミュニケーションが途絶えて、情報が無いという「さびしさ」が押し寄せてきます。そこで人々が取り出すのがスマートホンです。友人同士で集まっているのに、それぞれがスマートホンをいじっているという光景を、あなたも珍しくなく見かけたことがあると思います。あれは話題が尽きたから、もう「テンションを上げる」ということもできなくなって、それぞれさびしくないようにと、あのような状態に行き着きます。

最大の問題は、そうして「テンションを上げて」、情報数を矢継ぎ早に聞かせていったとしても、結局その人がどのような人なのかわからない、ということです。パッケージした情報を集合させても統合はしないとお話ししてきました。彼がどのような人であるかという全体的情報は、脳でのコミュニケーションが起こるまで得られません。

ですから、これは疲れるのです。テンションを上げてがんばった、そしてさんざん話した、話題が尽きるまで話したはずが、結局互いのことが何も伝わっていないという感触になる。この疲労と無力感が、人を次第に「病んでる」というほうへ押し込んでいきます。自分のことが相手に受け止めてもらえないというのは、それだけでも辛いことなのに、さんざん情報を伝えようと努力した結果、なお伝わらないので、絶望が押し寄せてくるのでした。

あなたはこのような例をイメージしてください。外国の人が、「日本人は食事に箸を使うんだろ」といって、台所から食卓まで、料理をひとつまみずつ持ってきます。あなたはそれを見たら必ず、「それは使い方

が違う」と言うはずで。確かに日本人は食事に箸を使いますが、それはそういうことではないと。食卓に全て運ばれてから、ゆっくり、ひとつまみずつ楽しむ、そのために箸を使うのです、とあなたは説明されるはずで。

自意識がパケット情報しか取り扱えないというのはそういうことです。ちょうど料理の全体から、煮物のひとつをつまみ上げるように。一方、脳が全体的情報を取り扱うというのは、料理を全てお盆にのせて一気に持ってくるということです。

もし本当に、台所の料理を、箸でひとつまみずつ食卓に運んできて食べさせるというのであれば、疲れません。どれだけ箸使いが上手であっても疲れ果てるでしょう。その挙句、「どんな料理を食べたのかよくわからない」と言われるのです。これでは、いわゆる「病む」ことから逃れられません。

それで、疲れ果てないために、病まないために……コミュニケーションを諦めて、それぞれにスマートフォンをいじり始めます。情報数といえば、人間がその端末に勝てるわけがないのでした。

ただし彼らは、楽しむことまで諦めたわけではありません。コミュニケーションというのも、それをする機能を与えられていないだけで、本当に諦めきっているわけではない。ずっと誤解をしていて、箸で情報を運搬することをやめられないでいるだけです。彼らはそうして、テンションを上げてみたり、疲れて下げきったりして、それでも「何か起こるのか」「何も起こらないのか」と、実は内心でしぶとく、見守るのを続けているといえます。誰だって、若いうちから、本当には、友人やコミュニケートが要らないとは思っていませんから。

本当に全てを諦め、楽しむということや、「何か起こるのか」ということも諦めきったとき、人はもうそうして呼び出しあうこともなくなり、スマートフォンをいじることさえなくなります。最近になってよく言われる、「病んでる」であるとか「メンタルがやばい」であるとかの先は、そういう、本講義では「麻痺型」と呼ばれるところにつながっています。

それはまた次回の講義で説明されるでしょう。本講義の主題はここまでです。お疲れ様でした。



の第八講では、ひとつのことだけを理解してください。"自意識には「陶酔」という機能がある"ということです。このことだけ決定的に理解していただければ、全体の構造の把握は容易であると思います。脳の機能が弱まれば、脳の営みは失われ、ひいては営みのよろこびも失われる。よろこびを失った人々はどうするのか？ それは、自意識の陶酔で代替されるだろうというのは、自明と呼んでよいほど、眼に見えてわかる手続きになります。

やや危険な言い方をすれば、このようにも言えます。あなた自身の心当たりの中で、このことの構造を確認してみてください。あなたの心当たりの中にも、たとえば、「この人は社会活動に熱心なところがあるが、どうも陶酔的だと思う」と思える人がいるはずで。あなたはその人のことについて、「この人は脳のはたらきが活発ではないだろう」ということを、どこかで見抜いて知っています。また、「活動の熱心さの割には、周囲と深くコミュニケートはできていないだろう」ということも、なぜかあなたは知っているものです。だから正直なところ、あなたはその人のことを、活動も含めて、豊かだとかうらやましいだとかいまいち感じないのです。その人のようにになりたいかと問われれば、あなたは慌てて首を横に振るかもしれない。

「わざとらしさが横行する」という講義を、第五講でしてあります。「テンションを上げていこう」とす

る、いわゆる「リア充」の、わざとらしい騒ぎの中、あるのはよろこびではなく陶酔です。ですからそれは、その場だけは盛り上がられても、積み重ならずに、一時かぎりできれいに霧消していきます。たくさんの人と「知り合った」、肩を組みあい、騒ぎあった、大声を出し合った……としても、本当にはコミュニケーションが起こっていないので、誰のこともわかりあっていません。たくさんの人、身の上の情報を、直接にもオンラインにも得たとしても、やはり自分は誰かのことを知っていることにはならず、また、自分のことも、結局誰にも受け止められてはおらず、知られていない。

そのようなことの中で、賑やかな騒ぎの裏側で、人々は疲れています。その疲れに、まるで自覚が無いというような人は、きっと本当にはほとんどいらっしゃらないと、感じられてなりません。ただ、疲れたと言いついて出してもしょうがないし、これしか方法がないのだからと、気を張っているというのが本当のところでしょう。その気力が萎えたときには、「最近病んでる」「メンタルがやばい」と、たまにこぼすようにしながら。

陶酔はよろこびの代替には結局ならないというのが、本講義の採る立場です。代替にならないものをずっとそうしていたらどうなるのか、というのか次回の講義になります。今回はここまでになりますので、このまま勢いよく次の講義まで消化してください。

第九講

麻痺型と決壊型

「メ

ンタルが強い」「弱い」という言い方をよくします。気持ちが黒く追い詰められるとき、

「メンタルがやばい」という言い方もします。

現代の人々は、「メンタル」ということに注目しているようです。合わせて、メンタルヘルスという言い方も出現し、略して「メンヘル」、er系をつけて「メンヘラ」という言い方も出てきました。「メンヘラ」というのは、狭義には、その症状によって社会生活を困難にし、専門の医療に掛かっている人のことを言います。広義にはどうでしょうか。広義には、今のところ定かではありません。

あくまで臨床心理学の話として、「メンヘラ」というのは、自我・自意識の機能が、生活上に困難をもたらすだけ、不具合を起こしていることを言います。さて現代は自意識の時代だと本講義は指摘していますが、自意識が本来の機能と違う使われ方をして、「焼けつき」「こすりあげられ続ける」のであれば、それは時代の「メンヘラ化」を当然加速します。

臨床心理学では、自我と無意識という分化を捉え、本講義では自意識と脳という分化を捉えているので、主題とする構造は異なりますが、本講義もわかりやすさのため、その「メンヘラ」という語を借用して使うことにします。ただしその使い方は、臨床心理学（および精神医学）における狭義の使い方とやや異なると、先にお断り申し上げておきます。元々の「メンヘラ」という語がスラング的なものなのでよいでしょう。

前回の講義を復習します。脳の機能が失われ、脳の営みが失われると、人々は生きる中での「よろこび」を喪失します。よろこびなしには生きてゆけないので、どうするかというと、自意識に起こる「陶酔」をもって、よろこびに代替するということでした。ただしそれは、機能本来の使い方ではないとも、前回申し上げてあります。

その、機能本来ではない使い方を続けてゆくとどうなるか……機械でもそうですが、それはやがて故障してゆきます。傷んで、不具合を起こすようになる。そこに不具合を起こせば、「メンヘラ」になるか、少なくとも、「メンヘラ的」にはなってしまいます。

ただ、その「メンヘラ的になる」ということの、実際的な表れは、およそ一般には思われているのとは異なります。それはもっと、こっそりとした、目に付きづらい、いつの間にかやってくる、厳しい現象です。それで、その点をわざわざ講義にする必要があります。本講義の完了後、そのことへの見方を、受講生であるあなた自身がすっかり変えられているでしょう。

それでは講義を始めます。

初

めは上手くいく

「よろこび」の代わりに、自意識の「陶酔」で、心の養分をまかなおうという発想ですが——以後、「陶酔式」と呼びます——これは初めのうち上手くいくのです。特に、当人があるていど、「要領」が良い場合には。

ある人は、「リア充」であることを目指すでしょう。「イケメン」である彼氏を作り、彼氏ともども、色々なイベントに参加する。「B級グルメ」というブームが自意識に引っかかってくれば、彼氏ともども、

その体験へのプランを立てます。「リア充」というイメージを追いかけているのですから、週末の予定は「充実」していないといけません。サッカーよりフットサルのほうがブームなら、そのマネージャー役でも買って出ます。「女子会」なら「女子会」のブーム、「婚活」なら「婚活」のブームに反応します。自意識というのは、そうしてパッケージされた情報しか処理できないのです。そうしたパッケージ情報の"行為"を、自分が「たくさんやっている」というのは、わかりやすいですし、刺激を伴ったジュースとして、自意識を陶酔させます。

要領か趣味かの問題で、「リア充」というのができない場合でも、文化物や無数のコンテンツの中に、陶酔を与えてくれるジュース物が、現代はたくさんあります。これらで陶酔して遊ぶことは、実際楽しいですし、何より今は消化しきれないほどのたくさんのコンテンツが与えられ、また低コストで入手に利便も整っています。こうして、無限にあるかと思える遊びの中で、楽しい陶酔を追求していくということは、実にありふれていますし、何も問題はないように思えます。「別に、やることやっていればいいじゃん」と彼らは言うでしょう。そのこと自体に、確かに何の問題もありません。

現代にまったくありふれた、これらのやり方は、「初めのうち上手くいく」のです。少なくとも、何も問題はないように見えます。たとえ「リア充」の「イベント」が、その中でのやりとりも含めて、「何かわざとらしい」ということであっても、通常、それはそんなに目くらまを立てることはありません。「リア充」がいささか軽薄すぎると感じられる場合は、「自己実現」というのもよいでしょう。

あるいは、新興の文化物やコンテンツが、ひょっとすると、それを楽しむ当人にさえ「何か不健全だ」と感じられていたとしても、通常、「でも楽しいんだもの」ということで、片付けられます。その点は本講義でも、陶酔そのものがただちに悪というわけではない、とお話ししてきました。

ただ、前回もお話ししたように、それらは陶酔である以上、すぐに飽きるのです。飽きますし、すぐに慣れて、耐性がつきます。そうすると、さらに陶酔を得ようとしたとき、麻薬と同じで、拡大投与するしかなくなります。それを拡大投与できているうちはいいのですが……やがて「もう無理だ」という臨界点が必ずやってきます。無限に拡大はしてゆけません。

だからこの現代のやり方は、初めは上手くいくのですが、途中で倒れるのです。そうして倒れたとき、でも他にもうやり方は持っていないのですから、手詰まりになります。

そしてこのことは思ったよりも恐ろしい結果をもたらします。さらに噛み砕いてお話ししましょう。



麻痺型への移行

ある大学生がいたとしましょう。彼はいわゆる「大学デビュー」の野心を秘めていて……それに成功したとします。彼は眉目や髪型を「オシャレ」に整えて、「イケメン」であることを手に入れます。サークルに入ったり、ダンスをやり始めたりして、自分を充実系にしていきます。意識的に、アルバイトもぎゅう詰めにしていくかもしれません。キレイ系の彼女も手に入れて、典型的な「リア充」になります。彼女の誕生日には、「誕プレ」を用意し、クリスマスには「超ロマンチック」な何かをするでしょう。それで物足りないときは、「おれ割とおたくなところあるんだよね」と、いわゆる"ファッション・オタク"のような軽度のオタク趣味にも手を出します。

彼は「負け組」になりたくないのです、地位の高い企業に入社します。それで仕事は大変になりますが、彼は「デキる男」を目指して、その陶酔をやはりエネルギーにするでしょう。もちろんそれだけではつまらないので、夜遊びには「チョイ悪」のようなことも目指します。そして家を買って、子供が出来て「パパ」になり、「やっぱ父親って"怖い"存在でないと」ということをしたり、よきパパを目指したり、「一家の大黒

柱」をやってみたり、あるいは「アクティブ系」になってみたりします。改めてジョギングを始めたり、陶芸や一眼レフカメラやヨガを始めることも多い。ワインや料理に凝ることも多いでしょうか。

ですが、さすがにそのあたりで「ネタ」が尽きます。彼はもう若者と呼びづらい年齢になっていますし、その年齢ではもうさすがに何かの「ブーム」には似合わなくなります。

ブーム的な単語や、〇〇系といったもの……考えてみればそんなパッケージされたものが、無限に拡大するわけが無いのです。彼はたくさんのかつことを、熱心に、精力的に、やってきたように見えますが、ここで振り返ってみてどうでしょう。彼は、本当には、「何もしてきていない」のではないのでしょうか。陶酔というのは、そのときくらい盛り上がりても、思い出にはならないと、前回お話ししています。

この、もう「ネタ」が尽きたという瞬間、彼の気持ちはプツンと切れます。「色々、何かもう、終わった」と感じるのです。それは「もうこの先、自分が陶酔を得る方法は無くなった」ということ、どうしようもない発見です。

このときから彼は、精気を失い、心が止まってしまったような、「麻痺型」になってゆきます。陶酔を原動力と報酬にするというシステムが停止してしまいました。そのことを説明してゆきましょう。



「陶酔式」の判別法

麻痺型のお話をする前に、ひとつ有用なことがありますから、お話しておきます。何かが楽しいというとき、あるいは有意義と思えるとき、それが脳の営みなのか自意識の陶酔なのか、区別がつきづらく感じられます。ですが実は、それが「人と人とのコミュニケーションを含み」、なおかつ「利得を媒介としない」ことであるならば、あっさり判別できる方法があるので、あなたは知ってゆかれるとよいでしょう。

それは単純に、「明日も同じことができない」ということです。

たとえば「鍋パ」というようなものをしてしましましょう。それがいかに盛り上がったとしても、「じゃあ明日もやろうか」と言うと、それについては全員がのけぞり、なんだかんだで拒否することになります。

おかしなことだと感じられませんか。それがとても楽しくて有意義なことなら、明日もやろうという話になり、全員がそれに飛びつかないではおかしいはず。昔の大学生などは、放っておけば一年中でも毎日麻雀をしているようなところがありました。それに比べれば、華やかで楽しく有意義な「リア充」のことなので、それはもう毎日ずっとやっていたらよいはず。

それが、毎日どころか、明日にも出来ないのはなぜなのでしょう。実はそれが、「しんどい」ことだからなのです。自意識でコミュニケーションするのは、台所から食卓へ箸で料理を運搬することのように、使い方を間違っており、しんどいのだと前回お話ししています。そして陶酔というのはすぐに飽きますから、明日同じことをしてもこの陶酔はもう得られないということを誰もが知っています。それで「明日も」というのは拒否することになる。

そうして、一見「リア充」のよろこばしさに見えるものも、実は明日にも付き合えないものだというのに、あなたはこっそり気づいてください。そして「リア充」といって、恋人や伴侶を求めるのにでも、そうして毎日どころか明日にも付き合えないような中から、恋人を得ようというのは間違っています。恋人や伴侶というのは毎日を共にゆくものではないですか。恋人や伴侶というのは、「人と人とのコミュニケーションを含み」、「利得を媒介としない」ものです。

ちなみに僕は学生のとときに、毎日パーベキューをしていた時期があります。「なぜいちいち帰宅して晩飯を食う必要があるんだ」という調子がみんなであつてのことでしたが。あるいは、夏休みに出張があり、一泊だけ初対面の知人宅に厄介になるはずが、意気投合して、一ヶ月も一緒に暮らしたことがあります。

「明日もはできない」というのは端的に言って"間違い"です。そこに脳の営みとよろこびがあれば、それを毎日することは、疲れることではありませんし、可能であるどころか、「惜しくてやめられない」ものです。

「麻痺型」の構造

さて話を戻します。「リア充」を体現するように生きても、それで自意識を陶酔させる「ネタ」はやがて尽きるという話でした。「自分はこの先、もう陶酔を得ることができない」と悟ってしまったら、もう気持ちがプツンと切れ、急速に麻痺型に移行してゆきます。

それはやはり、根本的に、自意識の営みが「しんどい」からなのですね。特に、使い方が間違っているそれはひどくしんどい。これまでは、そのしんどさを、陶酔がカバーしてきたのでした。ですがもう陶酔が得られないとなったら？ それはもう、むき出しでしんどいに決まっています。だからもう、自意識の機能も、できるかぎり使わないようにしたいと、頑なになってゆきます。「ルーチンワークだけして死んでゆきたい」と真剣に言い始めます。

例えば彼の場合、仕事に新人の後輩が入ってきたら、これまでは指導に熱心だったかもしれませんが。「デキる人ぶり」「アツイ先輩ぶり」「仕事が自己実現」をもって、そのことへの陶酔をエネルギーにできましたから。ところがその陶酔がもう得られないのだとすれば、もう新人の後輩なんて、しんどい、うっとうしい、面倒くさいだけです。また仕事を一から教えなくてはならない。そのうっとうしがる態度は、先輩という立場が強いので、いっそ堂々と表明されます。その態度が冷たいとかどうとかは、もう彼にとってどうでもよいことなので、ほとんど控えられません。

もう陶酔は得られないと判っているのですから……すばり言うと、彼の自意識はもう、「何も聞いていない」という状態になります。そうするのが一番ラクだからです。自意識の営みにもう利益がないので、営みが起こらないようブロックするのです。陶酔が得られなくなった以上、そうして自意識のしんどさをとにかく減らす、ラクにするということでは、彼にとっての利益的なやり方はなくなるのでした。

彼はすっかり、「そういう人」になってしまったわけですが……注意すべきことがあります。彼が「そういう人」になってしまっても、彼のような状態は、一般に"メンヘラ"などとは呼ばれないということです。彼にはそれによって社会生活を困難にしているわけではないのですから。

もし、彼のひどい態度によって、彼の下に入った新人後輩が、仕事を続けてゆけなくなったら、その辞職した彼のほうが、たとえば適応障害などといって、"メンヘラ"という扱いになります。

この問題は、取り沙汰のしようのないほど、あいまいな中で起こるもので、どちらがどれだけ悪いというような、安直な結論には結べません。本講義ではあくまで、陶酔式のやり方の果てに、そうした「麻痺型」があるという話に留めます。そして、「巻き込まれる前提で」、本講義は考えなくてはならないと、以前にお話ししてあります。

「麻痺型」というのは、今お話ししたように、陶酔式がついに頓挫し、自意識が「何も聞かなくなった」という状態です。何も聞かない、何に触れても何も聞き取らない。届かないのですから、それは外側からは剛直な「麻痺」という感触になります。これはいわゆる"メンヘラ"ではないので、接触がないかぎり、その感触はわかりません。

が、いざ接触してみると、本当に「何も届かない」という感触で、人をゾッとさせるものを持っています。本講義では彼のことも"メンヘラ"と捉えるのはそれが理由なのでした。本講義では、「麻痺型」も「決壊型」も、ごく自然なこととして、広義の"メンヘラ"と捉えることにします。

「決壊型」との循環

人はよろこびなしに生きていくことはできないと申し上げてきました。「麻痺型」に行き着いた彼は、一見ずっと落ち着いて、安定しているふうに見えます。何しろ「麻痺」なのだから安定していますね。一見は、そう見えます。

ですが、彼は長い間、よろこびのない中を生きていくことになります。いくら麻痺させて、自意識が「何も聞かなくなる」、そうしてラクをさせていっても、しょせんはしんどい「だけ」の中を生きていきます。これまでアテにしていた「陶酔」も、ついに枯渴したので、もう陶酔式は機能しません。

この静かな絶望の中で……彼は苦しさを溜め込んでゆきます。外側には麻痺してますが、内圧はずっと上昇してゆくのです。

すると、この「麻痺型」は、あるとき突然、「決壊型」に移行します。内圧の上昇が極点にきてついに破裂を起こすのです。

その実際には、色々なケースがあるのですが……やはりここでは、先ほどの彼を例にしましょう。彼は全てにうつつしそうで、面倒くさそうです。「そういう人だから」で、周囲には通っていたのですが、あるとき突然爆発します。立場の弱い後輩や、部下、女性、あるいは下請けの担当などに向けて。およそ社会的常識からは逸脱した、大声や攻撃的な態度を出します。

彼はこれによって、久しぶりに——何年ぶりか、何十年ぶりかに——「陶酔」を獲得します。それは、自意識の焼けつきの、極限ともいえるべき、熱での破裂ですから。ここから彼は、「新しい陶酔式」を始めることとなります。過去の、リア充うんぬん、自己実現うんぬんといった、生易しいものではなく、もっと直接的な、自意識の焼けつきのブチマケです。彼はいっそ、「逆に楽しくなってきた！」と鼻息を荒くして言うかもしれません。久しぶりに、自意識の陶酔を取り戻したのですから。

なおこのような場合も、彼はやはり「メンヘラ」とは一般に呼ばれません。あくまで社会生活に困難をきたすという本人の主訴がない場合はそのようには言われません。

ただし勿論、衆目には彼はすでに「狂気じみて」いるので、「まともじゃない」というふうには、慎重に距離を取られます。距離を取るわけですから、当然、そのような警告が、直接彼に伝えられることは無いのです。彼はそれについて、「誰からも文句は言われていない」と捉えるようになります。

こうして麻痺型は決壊型に移行したり、あるいは、その両方を循環したりします。これはケースバイケースなので一概に言えません。初め決壊型から入り、麻痺型に移行するケースもありますし、決壊というのも、犯罪や自傷であったり、事故であったり、器質的損傷になることもあります。

本講義はそのケースワークを追求するものではありませんので、ここまでに留めましょう。ただ一番多い例、最も一般的な例は、彼のような、麻痺型から決壊型への移行だと思われます。

自意識の「陶酔」を原動力にしていくシステム。その「陶酔式」の行き着く果てに、麻痺型と決壊型があるということをお話ししました。

「メンヘラ文化」の中で

"巻き込まれる前提で"、我々は考えねばなりません。「陶醉式」が主流になり、その末梢が次々に麻痺型と決壊型を生み出すのだとしても、それは他所の世界のおとぎ話ではなく、我々が今日も生きていく実世界の話です。単純に、「この中をどう生きていくべきか？」という問題が、それぞれ一人一人に、課されているのです。

「この中をどう生きていくべきか?」。それについて、迎合的あるいは推進的なものを、本講義では「メンヘラ文化」と呼ぶことにします。もちろん、節度として、具体的にどれがどうだということは、本講義では取り上げません。そんなことをしなくても、一般論だけで十分に、理解と心当たりで到達しうることですから。

この現代の中で、或るものは、「どんどん陶醉していこうよ」と呼びかけています。いっその"陶醉っぷり"を、「どうだ強いだろ」「リア充だろ」と見せつけるような。あるいは、また或るものは、その"スカしている"態度を見せつけて、「超越しているの」と呼びかけています。また或るものは、ギャーツと汚らしいほどの自意識のブチマケを示して、「決壊してこそ真実の陶醉があるよ」と呼びかけています。

これらについて、是非をどうこう言うのは、もちろん本講義の趣旨ではありません。ただこれらは、現代における「この中をどう生きていくべきか?」という、「この中」をなくしては、そもそも生まれてこなかったものです。仮に、今でも脳の機能が活発で、豊かな営みとよろこびの中を生きている人がいたら、その「陶醉していこうよ」「いいえ、超越すればいいだけよ」「いや、決壊するしかないのです」というような呼びかけは、何のことやら、すべて「?」というだけの受け止めになります。

なんだかんだで、結局の土台として、自意識を「こすりあげて」くる呼びかけの声。自意識を、無限にこすりあげてゆこうという声、こすりあげに反応しない超越風味を叫ぶ声、こすりあげにただちに決壊せよという声。これは自意識文化の土台においてしか成立しませんから、本講義ではこれを——やむなく——「メンヘラ文化」と呼びます。

あなた自身、「色んなもの」について、「メンヘラ文化ですね」という指摘を、空想の中でしてみてください。そこにギクッとするような、空気の凍りつくような、何か危険なリアクションが予感されるものもあれば、一方で、そもそも「まったく当てはまらない」「かすりもしない」と感じられるものもあるはずです。

逆の具体例を指摘する分には節度に反しないと思いますので、例を挙げておきましょう。youtubeで1980年代前半の映像などをご覧になられれば、なおわかりやすさが増すと思います。たとえば1983年のコカ・コーラのCM。早見優さんが水着姿で駆け寄ってくる映像があります。それらは、現代の我々からして、映像の造りがつたない、平たくいって「ダサイ」のですが、その印象はともかくとして、「メンヘラ文化」という指摘は一切当てはまりません。それが当てはまらないということを、理由抜きにあなたは実感することができます。それは、「ダサイ」のかもしれませんが、それにしても、自意識をこすりあげにくるものがまったく見当たらないからです。先ほど、かつての大学生が一年間でも毎日麻雀をしていたという話をしましたが、その退廃的なムードだって、別に自意識をこすりあげるものはなし、「メンヘラ文化」という指摘は当てはまらないのです。

陶酔三法

単純化して言えば、現代の人々は、陶酔を求めています。「陶酔式」を原理に採用しているのだから当然です。では仮に、その「陶酔式」を積極的に採用するとしたら、「陶酔」はどうやって得るべきでしょうか。具体的に、指針と方法が必要になりますね。

これについて、方法が三通りあります。簡単なことなのでお話ししておきましょう。これらは、必ずしも一つの方法しか採れないというものではなく、あるていどの混在ができます。

1. リア充・自己実現法

言うなれば「王道」です。経済社会の価値観に準じ、自分はその価値観上で「成功」している個体だという認識で、その認識と行為を拡大してゆくことで、自意識を陶酔させます。王道なので、大多数の人ではできるかぎりこれを目指そうとします。逆にこの王道からあまりに脱落する場合、大多数から排斥的に扱われる立場になります。また脱落すればその排斥作用があるため、この王道をゆく人も脱落に対する恐怖心を奥底に抱えているのが通常です。

なお経済社会の価値観に準じていますので、たとえば就職面接などでも、この王道を土台とすることが大前提となり、この王道を無視することはほとんどの人にとって不可能です。

2. 耽美・貴族法

自分を周囲とは違う特別な「貴族性」のもとと捉え、美に強い傾倒があるのだと信じ込み、その貴族気分を拡大することで、自意識を陶酔させていく方法です。先ほどの「王道」とは距離を取り、自分は「一輪の知られざる花」の気分を取り、一方でたとえば"リア充"の集団を、むしろ慈しむふうに見つめ、その行為を自意識の陶酔に充てます。

特徴的に、「声をあげて笑わず」「目立たない方向へのオシャレ嗜好が強く」「眠そうで気だるそうな振る舞いを演出するのが習慣になっており」「特別に珍しいふうの言葉をぼそりと自分につぶやく趣味があり」「孤独を積極的に意識して陶酔に充てる」などの点があります。「自分は全て知っている」「わかっている」という立場を採るので、何かに慌てたり声を荒げたりというような態度が自己に禁止されており、すでに大きな声を出せと言われても出せない状態になっていますし、今さら声を上げて笑おうとしても笑えないようになっています。

この耽美・貴族法の多くは、王道であるリア充・自己実現法のほうへ、趣味や要領の点で追従できなかったとき、第一の転入先として選ばれます。

3. 不潔・蛮族法

リア充・自己実現法に追従できなかった場合、耽美・貴族法にゆければよいのですが、あまりに本人がその美性や貴族性を乏しくしている場合、その耽美・貴族法を自分の方法に採用はできなくなります。その場合の多くがこの不潔・蛮族法に行き着きます。

耽美・貴族法に対照して、こちらは「不潔さ」と「蛮族性」の追求を拡大することで、自意識の陶酔を得てゆきます。彼は"リア充"の集団を、「クズの集まり」と見つめます。下卑た声で笑える題材を能動的に探し、オシャレうんぬんを「恥ずかしいクズのすること」と否定的に取る。無神経で傍若無人な振る舞いが習慣になっており、嫌味のあるスラングを撒き散らすこと、万人の低俗性を積極的に意識して陶酔に充てること、などが特徴になります。特にハイソサエティのスカンダルに熱烈な関心を持ち、そのスカンダリズムを人間普遍に当てはめて、その不潔さのあぶり出しに陶酔を得ます。

以上、大きくみてこれら三つの方法があります。そしてこれらは排他的ではなく混在することが可能です。「メンヘラ文化」ということで言えば、文化物もおおよそこの三つの方法の、どれかを主にし、いくらかを混在させて作られています。

「メ

ンヘラ文化」などというのは、もちろん本講義の造語です。「幸いに」と言うべきですが、そのような語でネット検索をかけても、今のところ該当するページは出てきません。合わせて、受講者であるあなたにも、「メンヘラ文化」などというような哀しい語は、この講義限りで捨ててしまい、以降は使われないようお願いしたいと思います。それは理解を速やかにする便宜の上で必要であっただけで、その後も振り回して活躍させるのに魅力ある言葉ではありません。

この第九講は、たいへんな心苦しさをおして進めてきたということ、白状しておきます。「言い過ぎでは」と、誰よりも僕自身が疑いながら、この第九講を進めてきました。ですが振り返ってみて、今このことは、まったくこのように語られる必要があったと、改めて思います。

健全に生き、また懸命に、善良に、別に歪んだところもなしに、生きている人が、ゆくゆくはそんな「麻痺型」だの「決壊型」だのになるというのは、聞きたくないという以前に、単純に信じにくく感じられます。「そんなわけないだろう」「そんな極端なことにはならないだろう」という気がいかにもします。誰しも、自分とその周囲は、そのような"病的"なところから無縁だろう、と第一に思われると思います。

ですが……それを承知でこの第九講は展開されたと申し上げておきます。僕自身、「そんなわけないだろう」「そんなことにはならないだろう」と言いたくなるケースが、実際に起こってゆくのを、このところすでに、何度も見せつけられています。あんなに「かわいらしい」人であったのに、と、くやしく、苦しく思われることが、すでに少なくない。そうしたことが起こってくるのは、誰のせいかなどとは言うべきではなく、ただ人々がそう追い込まれていく構造が、現代という時代にあるということです。それには、あるていど、巻き込まれてゆく前提で考えるよりないと申し上げておきますが、巻き込まれていくということは、何の対抗もしないということではありません。この船は沈むとわかっていて乗船させられるのであれば、それなりの備えをして人は乗船するのではないのでしょうか。

このことは、その人が実際に、「麻痺型」などになってしまう前に、お話する必要があります。というのは、当然ですが、実際に「麻痺型」になってしまえば、もう「届かない」からです。十数年の時間をかけて、陶酔式だけで生きてきたものを、麻痺型になり、決壊型と危険な循環を繰り返し始めたという、そんな段になって今さらこんな話を持ち込んだとしても、時間的に出遅れすぎていますし、何よりも当人に「届く」ということがありません。そこから有為に好転が得られるという見通しは、いくらなんでも甘すぎで、非現実的だと思います。

現代が自意識の時代だというなら、それは大きな全体のことであって、そんなものにはわかに変動しません。ですがその中でも、少なくとも、それぞれにフェイルセーフの仕組みを隠し持つことはできるはずですが。フェイルセーフとは、現行のシステムがダウンした際に、自動的に安全・健全なほうへ状況をコントロールするよう働きかける装置のことです。万事が上手くいっている状態、何の問題もなく見える状態の中では、フェイルセーフ装置が不必要なものに見えるのは当然のことです。

そしてもちろん、本講義があなたにお伝えしようとしていることは、それら麻痺型・決壊型の詳細などで

はありません。そんなことは本来どうでもよいことです。ただ、機能が本来性を取り戻し、営みとそのよろこびが取り戻されればよい。そのとき以降、この講義の内容の一切は不要になります。そのときは、あなたがすでに未来に踏み込み、この「現代と恋愛」をすでに過去にしたということになるでしょう。

「なんだかんだで自意識のこすりあげ」。そうして、実は先の無い「陶醉式」が、はびこってきたのは、いつからだったのでしょうか。それを限定して「ここからだ」と言い切ることは誰にとっても不可能です。ですが本講義では、さしあたりの、有用な見方がありうるとして、締めくくりに、時代の変遷を申し上げておきます。いつからこの「現代」が始まったのか。そのもっとも巨大な「目印」は、どうやら1995年あたりにあります。漫画「ドラゴンボール」の連載が終わり、「新世紀エヴァンゲリオン」や「ワンピース」が現れてくる時代です。阪神淡路大震災があり、地下鉄サリン事件がありました。「ブリクラ」が流行しはじめたのも95年、「コギャル」と言い出したのも95年、インターネットに接続するアプリケーションが付属しているのは「WINDOWS 95」からです。

色んなものが終わり、代わって色んなものが始まった。その巨大な節目として1995年を捉えるのは、まったく不自然なことではありません。そしてその中でもっとも大きなブームだったのは「小室哲哉ブーム」です。96年4月のオリコンチャートでは、小室哲哉という一人の作曲家・兼プロデューサーが、一位から五位までを独占しています。これは世界史上に例のないことだそうです。それだけ巨大なブームがありました。そして小室哲哉さんが作り出した、その歌曲もブームも、過去にあった昭和から平成初期にかけてのものとは、何かが明らかに違ったということは、当時を過ごされた万人が納得、いやご存知だと思います。

もちろんこれらは全て、巨大でわかりやすい「目印」でしかありませんが、その目印は、あなたが「現代と恋愛」ということの全体を、構造的に把握するのに有効だと思います。

それではお疲れ様でした。あと残すところ、確認問題と、余談めいた、最終講のみになります。確認問題はきっと、あなたが予想しているよりも簡単なものです。このまま一気にどうぞ。

確認問題

◆問1. 以下の空欄を正しく埋め、選択肢は正しいものを選びなさい。

現代は（ ）が弱り、代わって（ ）が発達する時代である。前者の機能は（1. 全体的情報 2. イメージ）を処理し、後者の機能は（ ）情報を処理する。後者はまた、表面的な（ ）をのみ追跡・検査する。その代表は「1+1=2」「青信号は進んでよし」などであり、この能力は人間の生活に（1. 不要 2. 不可欠）である。

「脳の立場」に立ったとき、IT革命は、人々の生活に情報量を（1. 増やした 2. 減らした）。それはIT革命が（ ）の革命だったからである。IT端末に没頭しているとき、脳は（ ）状態になっており、このことが続くと、脳はやせ細り、やがて本来の機能を損傷する。損傷はときに機能の喪失にまで及ぶ。「脳の立場」に立ったとき、あくまで最大の情報源は、直接の（1. 人間 2. 言葉）である。ただしそうして情報を与えてくれるのはあくまで（1. 脳 2. 立場）の関わりがある人だけである。

営みのよこびは本来、（1. 脳のみ 2. 自意識のみ 3. 脳と自意識の両方）に発生する。このよこびが得られないとき、人は自意識に起こる（ ）をその代替に充て、それを生きる原動力にする。この方法を（ ）式という。この方式は（1. 初めは上手くいく 2. 初めから上手くいかない）。けれどもこの方式の果てにあるのは（ ）型と（ ）型である。方式の果てにそのような様相に行き着くことは、一般に（1. 警戒されている 2. 警戒されていない）。パッケージされた情報を、「無数に」「一気に」、（ ）のように流し込むことで、自意識は（ ）あげられ、自意識は（1. 鍛えられる 2. 肥え太る）。一般に勉強を（1. しっかり 2. みっちり）やるのは、自意識を（ ）的かつ（ ）にするためであり、このことがされないままに現代の文化物を与えられ続けることには相応のリスクを伴う。けれども誰もこのことに巻き込まれる前提で考えねばならない。

自意識の時代影響に侵された人間は、（ ）専門人として新しく現代に生まれてきている。彼らの特徴は第一に「（1. 心 2. 頭）が弱い」ところにある。その結果、脳で全体的脈絡を（1. 理解する 2. 発見する）ことができず、（1. 問題が問題だと 2. ニセモノがニセモノだと）わからない。そうならないためには結局、（1. 全体的情報 2. 専門的情報）を（ ）に（1. 勉強して 2. 浴びて）ゆくしかない。

自意識は（1. 行為 2. はたらき）をし、脳は（1. 行為 2. はたらき）を持つ。そのぶん、時代が自意識化すると、多くのものが（1. 合理的に 2. わざとらしく）なる。いわゆる（1. かつこいい 2. かつこつけ）が礼賛されるようになるが、それでも、人が本当によこびを得られるのは（1. 利得があつて 2. 脳がワットとなって）起こる営みに触れられたときのみである。

◆問2. 脳の知識と自意識の知識とで、明らかな差が表れる例を3つ述べなさい。

◆問3. 以下の空欄を埋め、選択肢は正しいものを選びなさい。

自意識は常に「現在」を（1. 捉えている 2. 捉えていない）。数直線上のゼロ点に自意識による「認識」の時点を置いたならば、「現在」の時点は数直線上で（1. ゼロ点 2. -1の点）である。脳は現在を捉えることができるので、脳は自意識に対し（1. 同調 2. 先行）している。このとき自意識というのは、起こる振る舞いを確認する（ ）装置にすぎない。

脳には、（ ）が見える。それにより、人はその関わりにおいては、（ ）いく・（ ）こさせる、とすることができる。

コミュニケーションは行為（1. である 2. ではない）。（1. 脳と脳 2. 脳と自意識）の関わりが健全に起こらないかぎり、人々の営みはよろこびの魅力を失っていく。これは脳のことであるので、身体を伴った関わりについて（1. 深く影響を及ぼす 2. 影響を持たない）。人がコミュニケーションの中で「受け答え」を活発にするとき、互いの脳は呼応（1. している 2. していない）。

人と人との間で、自意識による営みは正当に（1. ある 2. 無い）。こちらの営みは根本的に（ ）ものであり、コミュニケーションにこれを転用するならば、それは（1. 食事をひとつまみずつ楽しむ 2. 食事をひとつまみずつ運ぶ）ようなものだ。

◆問4. 以下の各文の正誤を、○と×をつけて示しなさい。

1. 人はいわゆる「リア充」になってはいけない。
2. 時代はどうあれ、たくさんの人と付き合ってゆけば大丈夫である。
3. インターネットが便利になったので、たくさん作品を楽しむ機会が増した。
4. 自意識でなく、無意識に起こることこそ大事にすべきである。
5. 「好きなタイプ」はよく脳のことを表している。
6. 脈絡の整っていない会話は自意識にとって負担になる。
7. IT技術に生活上の影響が薄い層は過去の健全さのままにされる。
8. 陶酔などは早くに超越するべきである。
9. 脈絡を持たない同士だと人は衝突してしまう。
10. 自意識の握力は頑強であるべきだ。
11. 自意識の機能と脳の機能は対立する。
12. 何事につけ「わざとらしく」ならないように意識するべきである。
13. 好きな人の前で緊張してしまうのは脳がワットなるからだ。
14. 人についてのたくさんの情報を統合することがコミュニケーションである。
15. 自意識は自分のものである。
16. よく調べたものしかよく知っているとは言えない。
17. 「いい人」は誰にだってわかるものだ。
18. 自意識の肥大は脳機能を激しく抑制する

<解答>

◆問1. 以下の空欄を正しく埋め、選択肢は正しいものを選びなさい。

現代は（脳）が弱り、代わって（自意識）が発達する時代である。前者の機能は（1. 全体的情報）を処理し、後者の機能は（パケット）情報を処理する。後者はまた、表面的な（脈絡）をのみ追跡・検査する。その代表は「 $1 + 1 = 2$ 」「青信号は進んでよし」などであり、この能力は人間の生活に（2. 不可欠）である。

「脳の立場」に立ったとき、IT革命は、人々の生活に情報量を（2. 減らした）。それはIT革命が（情報数）の革命だったからである。IT端末に没頭しているとき、脳は（飢餓）状態になっており、このことが続くと、脳はやせ細り、やがて本来の機能を損傷する。損傷はときに機能の喪失にまで及ぶ。「脳の立場」に立ったとき、あくまで最大の情報源は、直接の（1. 人間）である。ただしそうして情報を与えてくれるのはあくまで（1. 脳）の関わりがある人だけである。

営みのよろこびは本来、（1. 脳のみ）に発生する。このよろこびが得られないとき、人は自意識に起こる（陶酔）をその代替に充て、それを生きる原動力にする。この方法を（陶酔）式という。この方式は（1. 初めは上手くいく）。けれどもこの方式の果てにあるのは（麻痺）型と（決壊）型である。方式の果てにそのような様相に行き着くことは、一般に（2. 警戒されていない）。パケタイズされた情報を、「無数に」「一気に」、（ジュース）のように流し込むことで、自意識は（こすり）あげられ、自意識は（2. 肥え太る）。一般に勉強を（2. みっちり）やるのは、自意識を（合理）的かつ（頑強）にするためであり、このことがされないままに現代の文化物を与えられ続けることには相応のリスクを伴う。けれども誰しもこのことに巻き込まれる前提で考えねばならない。

自意識の時代影響に侵された人間は、（パケット）専門人として新しく現代に生まれてきている。彼らの特徴は第一に「（2. 頭）が弱い」ところにある。その結果、脳で全体的脈絡を（2. 発見する）ことができず、（2. ニセモノがニセモノだと）わからない。そうならないためには結局、（1. 全体的情報）を（心身）に（2. 浴びて）ゆくしかない。

自意識は（1. 行為）をし、脳は（2. はたらき）を持つ。そのぶん、時代が自意識化すると、多くのものが（2. わざとらしく）なる。いわゆる（2. かっこつけ）が礼賛されるようになるが、それでも、人が本当によろこびを得られるのは（2. 脳がワットなって）起こる営みに触れられたときのみである。

◆問2. 脳の知識と自意識の知識とで、明らかな差が表れる例を3つ述べなさい。

- ・人間の手とマネキンの手を感触によってただちに見分けること
 - ・魚屋がスルメイカとケンサキイカを分析なしに見分けること
 - ・我々が標準語と大阪弁を完全に聞き分けてしまうこと
- など。

◆問3. 以下の空欄を埋め、選択肢は正しいものを選びなさい。

自意識は常に「現在」を（2. 捉えていない）。数直線上のゼロ点に自意識による「認識」の時点を置いたならば、「現在」の時点は数直線上で（2. -1 の点）である。脳は現在を捉えることができるので、脳は自意識に対し（2. 先行）している。このとき自意識というのは、起こる振る舞いを確認する（モニター）装置にすぎない。

脳には、（脳）が見える。それにより、人はその関わりにおいては、（ついて）いく・（ついて）こさせる、とすることができる。

コミュニケーションは行為（2. ではない）。（1. 脳と脳）の関わりが健全に起こらないかぎり、人々の営みはよるこびの魅力を失っていく。これは脳のことであるので、身体を伴った関わりについて（1. 深く影響を及ぼす）。人がコミュニケーションの中で「受け答え」を活発にすると、互いの脳は呼応（2. していない）。

人と人との間で、自意識による営みは正当に（1. ある）。こちらの営みは根本的に（しんどい）ものであり、コミュニケーションにこれを転用するならば、それは（2. 食事をひとつまみずつ運ぶ）ようなものだ。

◆問4. 以下の各文の正誤を、○と×をつけて示しなさい。

- × 1. 人はいわゆる「リア充」になってはいけない。（→脳の営みがあればよいだけで、形式は問題ではない）
- × 2. 時代はどうあれ、たくさんの人と付き合ってゆけば大丈夫である。（→すでに多くの人が陶酔式を採用しており、各人が対抗を持たねばならない）
- 3. インターネットが便利になったので、たくさん作品を楽しめる機会が増した。（→作品は「体験」を与える）
- × 4. 自意識でなく、無意識に起こることこそ大事にすべきである。（→自意識の行為は「習慣」になりいわゆる「無意識」の行為になっていく）
- × 5. 「好きなタイプ」はよく脳のことを表している。（→「タイプ」等、分類化はパッケージ情報である）
- 6. 脈絡の整っていない会話は自意識にとって負担になる。（→脳で処理すべき全体を自意識で追えば負担になる）
- × 7. IT技術に生活上の影響が薄い層は過去の健全さのままにされる。（→娯楽メディアを含めた全体がパケット人間界化を進めているので巻き込まれる）
- × 8. 陶酔などは早くに超越すべきである。（→耽美・貴族法による陶酔のひとつに「超越ふう」がある）
- × 9. 脈絡を持たない同士だと人は衝突してしまう。（→それぞれの脈絡が正しいので、譲れなくて衝突する。例、法廷や議論など）
- 10. 自意識の握力は頑強であるべきだ。（→銃撃戦中の兵士が指示を誤ってはいけない）
- × 11. 自意識の機能と脳の機能は対立する。（→脳は自意識に先行し、対立ではなく時間差ある並列で機能する）
- × 12. 何事につけ「わざとらしく」ならないように意識するべきである。（→”意識する”ということは「わざと」である）
- × 13. 好きな人の前で緊張してしまうのは脳がワツとなるからだ。（→乳幼児は緊張しない。振る舞いが「認識」に引きずられることで緊張が起こる）
- × 14. 人についてのたくさんの情報を統合することがコミュニケーションである。（→パッケージされた情報はついに統合されない。一つの全体的情報にはならない）
- 15. 自意識は自分のものである。（→脳は生来所有だが自意識は後天的構築である）
- × 16. よく調べたものしかよく知っているとはいえない。（→ガイドブックの情報より地元の少年のほうがよく知っている、脳の知識として）
- × 17. 「本当にいい人」は誰にだってわかるものだ。（→パケット専門人は表面的脈絡の「いい人」しか理解できない）
- 18. 自意識の肥大は脳機能を激しく抑制する。（→自意識は脳の先行機能を“禁則”にすることができる）

最終講

われわれはどうすればよいか

長

い講義を、お疲れ様でした。あえて設けたこの「最終講」は、講義らしい内容を含えていません。講義を終えての、ディスカッションのようなものと捉えてください。新しくお話しすることはありません。ですがある意味ではこのことが最も大切なわけではありません。直接的に……「われわれはどうすればよいか」。ここまでの講義は、この「どうすればよいか」という、決断を下すのに、必要な材料を与えてきたに過ぎないでしょう。

脳だの自意識だのといって、結局何も変わらなかったならば、それはそれで、その人のひとつの選択です。それをどうこう申し上げるのは、すでに講義と受講という仕組みから逸脱するでしょう。ですが僕ももう講義をするつもりはないので、一人の対等な個人にシフトしながら申し上げております。あなたは、あなたの出会う人々にとって、「すごい、脳の人だ」と受け取られるように、実際なるのかどうか。ならないのではあまり意味がありません。そして、「ゆくゆくは」というような言い方をするのは、僕は好きではありません。「ゆくゆくは」というのは、つまるところ、今日も明日も何もしないでゆくという宣言です。結局何もしないでいくというのは、別に悪いことではない、人それぞれに尽きることだと思いますが、そこにわざとらしい工夫をした言い方をするのは、本当は誰にとっても美しいことではないはずです。

お話ししておくべきことが一点あります。それは、ここまで「脳と自意識」という話を、対比的にしてきましたが、これだって、もともとは一つの全体であるものを、やむをえず、分化して説明に充てたに過ぎません。脳の機能と自意識の機能がありますが、その両方があるのが人間です。そもそもは「両方」でもなくて、全体としての「機能」があるのを、わざわざ分けて捉えただけでした。物事を説明するというのはそういう行為ですし、具合の悪い現状を"外科手術"するというのは、そうして区別的に取り扱うよりしょうがないのでした。ですがそのこと自体、全体的情報を直接取り扱う脳の機能から見れば、それぞれにパッケージ・分離して捉えるようなことではありません。「膝とくるぶし」というと分かれて聞こえますが、「足」といえば全体が足です。「この動作をするときは膝が先行しますよ」ということがあったって、それはわざわざ分けて捉えるから「先行」が出てくるのであって、全体としてみれば何が先行も追従もありません。

講義ですので、説明するに決まっていますし、説明するからには、そうした分化が必要でした。ですが、それが分化されたままでは、「よく理解されている」ということにはなりえても、「完成している」ということには決して到達しません。むしろ遠ざかるばかりになります。講義がここで修了されて、もしこの「先」がそれぞれにあるとすれば、それはそれぞれが理解ではなく「完成」にまっすぐ向かうということではないでしょうか。

われわれはどうすればよいのでしょうか。あきらかなことはいくつかあります。心身に全体的情報を浴びることであり、「ついていく」「ついてこさせる」というようなことを、求め、また自分に課すことです。のんきな受け答えや脈絡など通用しないような何かを体験し、その体験を積み上げて、脳を鍛えていくことです。そこによるこびは必ずあります。

むしろ本当に困難なことは、そうして表面上の形式をどう整えても、結局そこに自意識しかなかったら、すべてがただわざとらしいだけだった、全てが冗談じみた、何の足しにもならない無駄だった、ということになってしまうということです。「脳をトレーニングしましょう」という会合があったとします。が、その中で、自意識の持ちこみをどうやって禁止などできるでしょうか。どのように形式を工夫したって、そこで当人が脳を使うか自意識を使うかは、結局当人の決めることでしかありません。まして、当人が、「自意識をやめたい」と言ったって、その思念は自意識の思念なのですから、禁止といったって当人にさえそれがで

きない。どういう「行為」をすればよいか？ といって、「行為」というのは全て自意識なのでした。

脳には「はたらき」しかないのであって、この「はたらき」を回復させ、鍛え、引きずり出すしかないのです。それについて何が必要かといえば、強いて言えば、ということになるでしょうが、何かしら徹底した「覚悟」だと思います。自分の自意識などはまったくクソクラエなのだという覚悟、何の役にも立たないのだという覚悟です。この覚悟には、思いがけず勇気が要るものだと思います。これまでに持ったことのないような踏み切った勇気が。そして勇気から覚悟に到達し、その先で、人は脳の「体験」を得ることができると思います。

このことが、役に立つかどうかはともかくとして、ひとつひとつ、考えてみましょう。さしあたり、このテキスト上でできることはそれしかありませんから。

「脳」の人」に直接付き合い合わせてもらおう、ただし……

寝床に横になってモンモンと考え、それで解決するなら苦労はしません。覚悟が練りあがるまではそういう時間もあるかもしれませんが、結局のところ「人」です。まったく現実的に考える限り、あなたはそういう「脳の人」と出会い、直接に付き合い合わせてもらって、とにかく「次元が違う」ということを、もう物理的のように体験するしかありません。もしそのように、あなたが体験することを与えてくれる人がいてくれたら、それはあなたにとってかけがえのない幸運であり、幸福です。誰もあなたにそんなことをして差し上げる「義理」を持っているわけではありませんので、あなたはその幸運と温情をありがたく思うしかないでしょう。そのところにあなたの精神的な「手抜き」があったならば、あなたに真剣に付き合ってくれる人は誰もいないと思います。それは単純に言って当然のことです。なお「次元が違う」というのは抽象的な言い方ではなく、「先行」から振る舞いが起こっているのだから、彼の振る舞いは実際に時間軸上で「次元」が違うのでした。あなたはそれを、「心身に受け止める」かぎり、その人に圧倒されずにいられます。圧倒されるのがいやな人はうまく逃げ口をつくるでしょう。

あなたは、部屋を飛び出し、家を飛び出して、学校や会社やクラブ・サークルといった、共同体の垣根も飛び出して、群れでいるから強気になれるだけという悪習を軽蔑して断ち、ただ自分として、誰か「脳の人」を見つけて、呼びかけ、付き合いってもらえるように、堂々頼みこみ、お願いするしかありません。これも当たり前のことです。居心地のいいところにいつもどおりずんぐり座り込んでいて、何かが与えられるわけがありません。あなたがその居心地のいい常識の中に住み続けるならば、それはあなたが獲得について結局本気でないということです。「みんながそうしている」ように、あなたもそこに居続けるだけなら、みんなが結局与えられない程度に、あなたにも与えられないというだけです。それは悪いことではありませんが、獲得に動かずに、自覚としては「獲得に本気」のつもりでは、単純に自覚と実情がちぐはぐです。共同体や、家族や友人を、捨てるということではありません。ただそういったしきたりや習慣は脳のことには関係ないということです。

脳と脳とで人が出会うとき、それがクラスメイトだの知り合いだのということは何ら関係ありません。あなたは100曲のバンド演奏をCDで聴いて、「この音はわたしの知人だ」とわかるようなことがありますか。わからないはずですが。前もってそう教えられていない限りは。ですが、その中に名演奏者の演奏が入っていれば、「この音は何者かの音だ」と気づかなくてはなりません。そこに例えばパディ・リッチのドラム演奏が入っていれば、あなたの脳は気づかなくてはならない。あなたの脳に何か「見えて」、あなたは出会わなくてはなりません。そのときあなたは、脳と脳とで出会うということに、それが知人だの友人だのということは一切関係ないということを経験されるでしょう。脳は知人の演奏を「見えない」と言っていま

す。

バディ・リッチという演奏者を知らなければ、ここで検索して調べるのもやめてください。いつかのとき、本当にドラム演奏に突き当たって、「すごい！」と感じた、耳から脳がそこに何かを「見た」、そしてその演奏者を調べてみたらバディ・リッチと書いてあったという、そういう体験が、この先のあなたにあるかもしれないのですから。そのときになって、「ああ、これがバディ・リッチなのか」と体験されれば、その体験はあなたにとって貴重な体験になるはずです。全てを通して、それはあなたの「思い出」にまでなるかもしれない。

あなた自身動き出し、共同体風土で仲良しじみていくという、手馴れたことをせず、ただ一対一で誰かと出会うべきです。「脳の人」を見つけてください。そしてなんとしても、直接の時間、付き合ってもら。それはたぶん、もう単純に「お願いしたおす」しかないと思います。そしてそういうお願い事をするからには、女性のほうが有利ですし、なんといっても、若いうちのほうが有利です。若い人が若さゆえにお願い事をするのは自然なことですし、一般によく容認されていることです。これが若さを失ってからだ、
「お願いしたおす」ということのより厳しい覚悟が必要になります。必要とされる「運」も、さらに大きくなってしまおうでしょう。

そうして、「脳の人」を見つけ、直接の時間、付き合ってもら。ただし……

ただし、その体験を、「納得」して持ち帰ってはいけません。「納得」というのはもっとも"おぞましい"ものだとあなたは捉えているべきです。冗談でもなく、誇張でもなく。

「納得」というのは、自意識が脈絡を整理した、ということです。それで一息ついた感じになるのは、脳のほうがまた停止したからに過ぎません。これでは何も体験したことにならないのです。せっかくの体験を自分でキャンセルして返品するような行為です。何が残ったかという、またひとつ自意識が膨らんだだけでした。

「納得」というのが、おぞましいだけのものだとすることを、あなたは実にご存知です。人が「納得」するだけというときの、醜い顔をよく想像に描いてください。あなたのことをさんざん傷つけた男がいたと仮定しましょう。その男は、「ふーん、傷つくんだ。納得納得」と、帰って行って、その納得をSNSの日記で「納得したこと」などという題で書いて遊んでいます。それが"おぞましい"ということはあるあなたによく理解されるでしょう。

それ以上その男を問い詰めたって、「納得以外に何ができるって言うんだよ」としか言いません。彼には自意識しかないのです、彼の機能は自意識の機能しか残っていない。それがどうしたという話ですが、あなたはそうようになってはいけません。

「つ

いてゆき」、叱ってもら、ただし……

あなたが「脳の人」に出会ったならば、その人は表面的な脈絡を超えているはず。あなたはそれに「ついていく」ということを、なんとかしなくてはならない。ただし……

ただし、「ついていく」というのは、受け答えをすることではありません。彼のほうがもともと脈絡を超えているのに、あなたがそこに脈絡で口を挟むというのは、なんと横着なことでしょう。

できればそこで、「なに口答えしてんだ」「いちいち眠たいこと挟んでくるな」と、はっきり叱ってもらえるほうがよいです。あなたはそれでショックを受け、いわゆる「傷ついた」と感じるかもしれませんが、彼との関係が清潔でありえたならば、その「傷ついた」うんぬんのことも、やはり「それ眠たいってば」と叱ってもらえます。あなたはそのとき、彼のことを信じて、なんとかして「ついていく」ということをしな

くてはならない。「傷ついた」というのは、油断していた自意識がきつい「焼けつき」を起こしたということですから、振る舞いが自意識よりも先行しているうちは、その「傷つく」ということは起こらないのです。彼があなたに「眠たい」というのは、あなたの全てが「現在」という時間から出遅れているからです。「口答え」というのも、彼はあなたに「話すな」と言っているのではない。その口答えがもう出遅れている自意識からの振る舞いだから、それを振り落とそうとしているのです。

こんにちの教育では、人はとにかく対等であるべきで、上から目線はとにかくいけない、とにかく人に気を遣うべきだ、と教え込まれています。その結果、人が人に「叱りつける」というようなことは、もはや無条件で否定されています。だから、もうその叱りつけるなどということ自体が、天然記念物のように珍しい有様なのですが、現実問題としてはきっと、人はそうして叱られる機会を得ないと、自意識に膠着した次元を超えることができません。自意識の表れを、ただ「眠い」「遅い」「口答え」と叱りつけてもらえることで、やがて自意識に頼ることをそもそもやめ、脳で直接コミュニケーションしようとするようになるものです。その意味では、脳の人に叱ってもらえないというのは、地獄行きを決定づけられる「猛烈な不幸」だと捉えてかまいません。ただ、人が実際にそちらを選択することについて、やはりそれが悪いということではないのです。その「猛烈な不幸」でも構わないから、とにかく自分は対等に扱ってもらおう、という選択も、人によってはありえるわけですから。

とはいえ、現実的に考えるかぎり、おそらくそうして「脳の人」に叱られ、教わるということなしには、誰も脳の人にはなれません。不可能と言ってよいでしょう。もしそれが突破できる例外がいたら、その人にはたまたまそれだけ強烈な才能があったということになります。ですがあくまで、才能の持ち主は例外的な話でしょう。



心

身に浴びること、ただし……

「現代と恋愛」でいうなら、ときに、「彼氏とは絶対にセックスしなくてははいけませんか」「セックスなしでは男女はわかりあえませんか」と訊かれることがあります。僕はそれについて、「わかりあうことは出来るけれど、それをセックスなしですというのは、セックスありでやるよりも、はるかに難しい」と答えています。例え話でいうと、「盤面なしでも将棋はできる、7六歩とか8四歩とか口頭で言い合うだけで。でもそれは盤面ありで将棋をするよりはるかに難しい。ただ、達人ならできるので、不可能とは言わない、できるよ」と。もちろん男女でなければセックスはしないので、理屈の上ではセックスと人間の相互理解は関係ないように思えるのですが、それは性機能まで含んだその人間の全体性を理解することにはなりません。サッカー選手同士がサッカーをせずに——必死で意識的にそれを禁じて——分かり合おうとするようなものです。それはそれで悪いことではありませんが、せっかくサッカー選手であることの値打ちがありません。不自然にもなります。また、中にはどうしても自身の性機能が受け止めきれず、去勢して物理的にその機能を除去する人もいます。セックスという現象そのものを消去してしまえば確かに解決はするわけです。（それが残酷な自己否定や人間否定にならないと信じられる限りにおいては）

脳は人についての全体的情報を処理します。そのためには、全体的情報を「心身に浴びる」ように体験しなくてははいけません。履歴書をどれだけ細かに読んでも誰かのことを「わかる」「知る」ということにはならない。一日に送りあうメールの"数"を義務付けたって同じです。だから男女の恋仲ではセックスが、互いにその「心身を浴びせあう」ということに大きな役割を担っており、ひいては、そのことなしにお互いを伝え合う・わかりあうのはより難しくなるということなのでした。

あなたは脳の人と出会い、その人の声や肉体や言葉や表情を、心身に浴びるべきです。そうすることのみ

で、あなたの脳は彼のことを「知る」ことができ（脳の知識）、またひいては人間のことや、男性のことも知ることができます。脳はますます鍛えられてもいく。ただし……

ただし、一般にコミュニケーションという第一に会話ですが、今申し上げたとおり、会話というのは余計に難しいのです。それは会話に使う「言語」というものが、あまりに自意識と馴染みがよすぎるからです。本当には、自意識に言語が受け止められたからといって、それにこだわることもなければ、それによって脳機能を停止させることもない、そして言葉を語りだすという振る舞い自体を、本当は脳の先行機能からスタートさせることもできるのですが……とにかく、言語会話で関係を自意識化させないのは、実はもっとも難しいことなのでした。あなたは「言葉の力」などというマヤカシを信じ込んではいけません。「脳の力」によって、言葉がつぎつぎに紡ぎ足されていく、文脈が織り成されていく、ということのほうを体験されるべきです。言葉にこだわって脳が焼けつきを起こしてカーッとするのは「言葉の力」ではありません。

彼があなたの頭を撫でながら、「この、バカめ、まったく、めちゃくちゃになってしまえ」と言い、矢継ぎ早に、「本当に心配してんだ、お前は賢いんだから、ちゃんと幸せになれよ、おれを困らせるな」と言うとき、あなたはそのいちいちにこだわったり、受け答えををしたり、してはいけません。彼は何を言おうが「彼」だ、と、変わらず脳が受け止め続けている状態を体験してください。実際彼が何語で何を言おうが彼は彼なのですし、シュビドゥバ、ヤーヤーヤ、と"スキヤット"を入れたって、彼はやはり彼です。この、脳から見て当たり前すぎることを見失わない体験をしてください。



色

んな営みに挑戦する、ただし……

人と、茶飲み話ばかりしているわけにはいかないでしょうから、恋愛も含めて、やはり何かしらの「営み」に、能動的に参加していくしか、実際にはありません。ただし……

ただし、営みの全てには「形式」があります。この「形式」というのが、恐ろしく厄介です。あなたを殺すものであり、あなたの全ての時間を水泡の無駄に帰す、その犯人がこれです。

あなたは形式に注意してください。注意しすぎるといことはありません。形式に囚われてはいけない、ということですが、どれだけそう注意していたって、あなたは生涯その形式というのから一ミリもはみ出すことができません。かなり高い可能性で、そうになってしまう、と、前もって、こう挑発的に申し上げておいて、差し支えないものです。あなたがどれだけの時間と労力をかけて、必死になったつもりでも、とどのつまりが、その形式をなぞっただけに過ぎなかったとしたら、それは全て時間の無駄です。全ての労力は水泡に帰したのです。これがもっとも恐ろしいことなのですが、事実としては、これが「最も多いパターン」でもあります。

先ほど、言語会話は余計に難しいと申し上げました。言語と自意識はあまりに馴染みがよく、言語を通しつつ関係の自意識化を避けるのはとても難しいことになる。それは言語が典型的に「形式」を伴うものだからです。言語には、主語があり述語があり、意味があり、脈絡があります。一人称や二人称があり、形容詞や副詞があり、その内容は賞賛であったり批判であったり、また言葉の記号そのもの……とにかく「形式」のかたまりです。言語の「形式」が自意識の第一機能だと言えるほどです。この「形式」は、自意識が認識することで捉えるものなので、この言語を十分に操りながら、なお脳の機能を先行させつづけるというのは、特別に難しいことになります。

そして形式といえば、言語だけでなく、全ての営みに、必ずついてまわるのです。それはセックスにさえついてまわります。こうして見つめあうだとか、こうして愛撫するものだとか、こうして感じている声を上げるだとか。演技というのとは違うのですが、形式をなぞるだけということが、実際できます。「セックス

のときは男らしく」「女らしく」「ロマンチックに」といって、その形式をなぞるだけというようなことが。そして形式をなぞっているだけのときは、自意識だけが活発に頑張っている状態で、お互いに「形式完璧だったね」ということしか残らない。それは脳の営みではありません。

だから形式というのはあなたの最大の敵なのですが、かといって、形式がまるでなしに営みというのは成り立ちません。ステップのひとつもなしにダンスは踊れないというようにです。それでたとえばダンスというもの、単にステップや動作の形式をなぞるだけの"運動"によくなります。それは脳の営みではない。そして偏った努力の方法として、「なぞるのが難しい形式」ばかり追求して、より難しい形式をなぞれるようになりました……としていっても、その挑戦は自意識の営みを強化しているだけであり、脳の営みへの挑戦にはなっていないのでした。

ここまでお話ししているように、脳の営みというのは捉えづらいものです。捉えづらいも何も自意識でそれを認識するよりも「先行」しているというのだから、話になりません。それで、自意識がすでに膨れ上がり、どうしてもその脳の営みということが得られない人は、耐え切れずにその「形式なぞり」のほうへ逃げます。自分の掛けた時間や労力が無駄になってしまうとは信じたくないものですから、難しい形式をなぞれるようになったという、実績を自分に残したがります。

でもそれは本末転倒なので、あなたはそこから逃げてはいけません。形式は必要なものですが、必要なだけで、それ自体は何でもありません。ワインを飲むにはグラスが要りますし、高級ワインには高級なグラスを当てるべきですが、それで高級グラスコレクターになっても、それではワインの滋味を一滴でも飲んだことにはなりません。グラスはワインの収まる形式でしかありませんので、満たす葡萄酒が貧相ならブーイングです。



ま

まず圧倒されるべき、ただし……

あなたは「脳の人」に出会い、まず"圧倒"されるべきです。鍛えてあるものと鍛えていないものがぶつかれば、一方が一方を"圧倒"するに決まっています。あなたがその"圧倒"されるという経験をしたことがないとしたら、あなたはまだ必要な誰かに出会ったことが一度もないと言われるべきです。

あなたは"圧倒"されるべきですし、そういう人に出会い、そういう人に、自ら喰らいついていくべきです。ただし……

ただし、そのような人に出会えたからといって、その人をただ「尊敬する」であるとか、そういうことに落ち着いてはいけません。その人はみんなに尊敬されているので、今さらあなたが尊敬したからといってどうということもありません。問題はずっと、「あなたの脳がどうか」ということのみでした。

"圧倒"されるというのは、気軽な体験ではありません。それは道場で、素人が有段者と乱取りしたような状態になります。有段者の側が少々の手加減をしたとしても、ちゃんと乱取りされてしまえば、もうボロボロにされます。あなたは"圧倒"されながら、胸は苦しいし、息も苦しい、でも眼を離すこともできず、落ち着いて一息入れられるような隙間がどこにもありません。でも自分がいつか有段者になるなら、その乱取りの中で、なんとか一撃でも放り込めるように、必死で喰らいついていくしかないのでした。あなたが伸びるのは、感想を持って帰宅してからはありません。乱取りの真っ最中でのみあなたは伸びるのです。

実際そうして"圧倒"されている中、「尊敬する」なんてノンキな余裕はありません。尊敬しているのは必ず休憩中です。あなたはその苦しい"圧倒"されるという中に、できるだけ長く粘りつづけ、なんなら延長戦まで申し込むようであってください。



疲

れ果てた、さらに先の体験をする、ただし……

自意識の営みは基本的に「しんどい」と申し上げてきました。このことは逆転して利用することもできます。人はしんどさにしんどさを重ねていくと、ついにギブアップ、ハングアップする、ということが出てきます。「自意識がしんどい」のですから、そのギブアップの果てに、ついに「自意識をやめる」ということが出現する、そういうことはよくあるものです。自意識がついに完全についてこられないところまで引っ張りまわす。これは、このようにしてくれる人がいれば、その人との出会いは、あなたにとって最上の出会いでした。

「脳の人」に初めて出会い、あなたが喰らいついてゆけば、あなたはヘトヘトになります。なぜなら、まず彼の脳にあなたの脳はついていくことができません。ついていけないので、なんとか、後追いの自意識でカバーしてゆこうとするのですが、自意識でそれをするのはしんどいのでした。テニスになっていないテニスのほうが疲れるということをイメージしてください。飛んでくる球に「ついていけない」ので、落ちて転がっていったものを、いちいち拾ってから打ち返す。それを何十分も休憩なしに続けていけばどれだけしんどいか。自意識でカバーするというのは、そうして落ちた球が止まってから拾い上げている状態です。本人はそれを落ち着いて拾っているつもりでも、向こうが矢継ぎ早にガンガン打ち込んでくるなら、それが本当の落ち着きなどではないことを強制的に思い知らされます。

そうして「球拾い」をするのが、しんどすぎる、もう無理……となったとき、人はしばしば本能的に、脳でそれに「ついていく」ということを始めます。自意識を放棄して、当人は「もう無理」と、投げ出したつもりでいるのですが、そうしてヤケクソになってみたら、逆に「ついていく」ということが、実は自分の機能として出来るということに気づくのです。もちろん引き続き圧倒はされているのですが、それでも一応「テニスになっている」という程度にはできて、あなたは自分で驚きます。また、そこからなら、それは脳のはたらきですから、メキメキ上達もしてゆくのでした。

そうして人は脳の営みを手に入れることがありますし、逆に言えば、それぐらいのことはしないと、脳の営みは一切始まらないという、そういうものでもあります。

自意識の営みはしんどいものです。ですからいっそ、しんどすぎて、それが疲れ果てるどころ、それでも容赦なく営みを要求されるという体験を、あなたはしてください。ただし……

ただし、講義の中でも申し上げたとおり、自意識が「もうしんどい」となったとき、ただ「麻痺型」のほうへ行くことも少なからずあります。それはもう、この期に及んでも、脳の機能が回復しない、立ち上がってこないという状態です。テニスで言えば、もう球拾いもしないし、打ち返しもしない、テニスコートに起こっていることを全て無視する、「何も聞こえない」という状態。

どうしようもなく、この「麻痺型」になるしかない、もう回復しない、という方も、いらっしゃるのは確かです。ですが、あなたがそうでない場合は、自分が「麻痺型」に逃避するその習慣は、決して自分に許してはいけません。あなたがボロボロのヘトヘトのヘタクソになることについては、何の問題でもありませんし、あなた以外の誰も気にしていません。あなたが自分を無能に憎らしく思えたとしたら、それはあなたの自意識の責任であり、非難もあるていど事実ですが、それはあなたの脳のことでありません。"幸い"、あなたの脳はあなたが作ったものではないので、あなたのように無能で役立たずなものではありません。あなたにはあなたの脳を非難する資格は無いのでした。

「名作」と呼ばれる作品に触れる、ただし……

陶酔式の文化物は、作品というより、ただあなたの自意識をこすりあげにきて、あなたに陶酔を与えようとしします。それは駄作というより、初めからそのように企図して作られたものですから、あまり作品論に取り込んで扱うべきではありません。

それら陶酔式の文化物でない、もう十分な時間に濾過されて、なお「名作」と呼ばれている作品に、あなたは多めに触れてゆくべきです。たとえば、複数の映画をレンタルするなら、その中の一枚にそっと取り込むようにして。

名作、名曲、名演といったものの、実は多くが、今のあなたにとって、しばしば「退屈」と感じられるに違いありません。それはその名作があなたの自意識をこすりあげにこないからです。あなたは「陶酔」が得られないので、それを退屈に感じます。

クラシック音楽の、名演らしい、と、すでに評価が確定しているものがあつたとして、あなたはそれを聴いて、正直「退屈」と感じた。そういうとき、あなたにはひとつのチャンスが与えられています。決して、それを「名演なのだ」と思い込もうとしてはいけません。ただ、それが「名演」であると、脳に「見える」ことがあるのです。だからこそそれは名演だと言われている。あなたは、あなたに"その時"が来るのを待ちましょう。名画や文学作品といったものもそうです。退屈に感じられるそれを、退屈なら退屈なまま、自分の感じていることを、決して捻じ曲げてはいけません。それでは「名作だ」という認識が習慣になってしまうだけで、いつかきつと来るはずの、「見える」ということを失ってしまいますから。

チャンスというのは、あなたの脳にはまだそれが「見えない」ということです。作品はあなたに「体験」を与えるのですが、まだそれが「見えない」ので、体験は与えられません。それで退屈だと感じている。その退屈なCDの一枚の中に、どうやらあなたの、まだ未知の体験が眠っているのです。どうすれば「見える」ようになるのか、それは定かではないので、ひたすら思い込みを持つことなく、ときに虚心にそれを聴くしかありません。

その退屈な「名作」の中にある「体験」が、どのような形で、いつかあなたに与えられるか、それは一概には言えません。ずっと与えられないかもしれませんが、まったく意外なところから与えられたり、あるいは十数年の年月が経ってから、ようやく与えられることもあります。あるいは与えられたと思っていたものが、何十年も経ってから、まったくそうではなかったと、本当の体験を新しくすることもある。

よくある例で言えば、たとえばあなたは、その名演のクラシックを「退屈だ」と聴いたとします。それ以上のことではなかったのですが、あるときクラシック音楽のコンサートに連れて行かれると、その演奏を聴いていて、何か無性に「腹が立ってきた」と感じます。何に腹が立つのかわかりませんが。

そしてあなたは、「あのCDには、ひょっとして、そういう腹の立つところがなかったのでは？」と気がつきます。そして押入れをごそごそやって、そのCDを取り出してくる。そして聴いてみると、「あ」となります。何が違うとはいえなくても、「まるで違う」と。同じ曲目なのに「まるで違う」と聴き取られます。「腹が立った」という体験が重なっていますので、その聴き取りは過去よりも鮮やかに聴こえます。そしてふと、「こうして退屈なものが、ひたすら奏でられているのに、腹が立たない……そうか、これは"美しい"んだ」と気づきます。それに気づいたとき、あなたはきつと、静かながら、愕然としていると思います。

たとえばそのようにして「体験」が得られることがあります。そのような体験を得たとき、すでに、それが一般に名演であるかどうかなどは、どうでもよいことになっています。何しろ自分の「体験」のことです。それが世間一般にどうであるとかは、自分には関係のないことですから。

ただし……

ただしあなたは、それから「よし名作を漁ろう」として、「名作に詳しい人」「名作マニア」「名作評論

家」になってはいけません。詳しいとかマニアとか評論家とかいうのは、パケット情報を多く持つ人であり、そのことに「体験」を持つ人ではありません。名作を消化するリストを作り、その鑑賞のいちいちにメモを取っていく、というようなことは、きつとしないほうが、最終的にあなたを助けます。

余談ですが、僕はスコッチが好きでよく飲み、百以上もある銘柄のうち、飲んだことのないものはもうほとんどなく、ボトルを見ただけでおよそすべての見当はつくのですが、それでも、自分の飲んだスコッチをメモや写真に取っていくということを、僕はしません。それは僕はバーテンダーではないからです。パケット情報を多く持つ必要はありません。メモなどしなくても、どうせ忘れられない一滴は、舌から脳へ刻まれてずっと残っています。いろんなスコッチのラベルが思い出になって……ちょっとお話しできないようなたくさんのことにつながっています。



遅

さを叩きのめされる、ただし……

いわゆる「いい人」は、おそらく、あなたが何かを話したすのを、ゆっくり待ってくれるでしょう。あなたが動き出すのを、ゆっくりでいいよ、と、待って構えてくれると思います。それは「やさしい人」としてあなたの気持ちを癒すかもしれませんが、実はそのことを続けていると、いつまで経ってもあなたの脳は営みを始めません。それは彼があなたが自意識から「エッチラオッチラ」動き出すのを、善良にも待ってくれるからです。

脳と自意識の決定的な差は、その時間軸上の位置です。自意識の「認識」をゼロの点と取れば、脳は「現在」を捉えていて、その位置は-1の点です。あなたが自意識のゼロ点から出発するかぎり、あなたの全ては全てのこと「間に合っていない」ことになります。

あなた自身が「脳の人」となり、脳の営みを回復するためには、思い切って、そこどころの「遅さ」を、叩きつぶされるほうがよいのです。それも「執拗」に。それは、脳が機能しはじめるまで、とんでもないストレスになるかもしれませんが。

自意識の全ては「遅い」のでした。あなたはあなた自身でも、自分の全てについて、まず「遅い」と、叩き潰してやるのがよい。ただし……

ただし、遅いといっても、それは「スロー」ではなく「ディレイ」です。「出遅れている」という遅さです。「遅い」と言われて、あなたは気が急いたり「焦ったり」する必要はありません。焦るというのは特に間違いです。焦るというのは出遅れているから焦るのです。先に出たものが焦ることはありません。あなたは「ファースト」を心がけるのではなく「フライング」を心がけてください。自意識がトリガーを引くまえに動きだしてしまっただけよいのです。

脳からみれば、自意識の側はディレイであり、自意識からの振る舞いは、脳からは「今かよ！」と呆れて見えています。

自意識は脳に比べて遅く、出遅れるのですが、そのぶん安全です。確認してから出るので安全性は確保されるわけです。あなたはこのことをよくよく見て、「危険が無いなら出遅れている」「安全・安心なら出遅れている」とも確認してください。

わ けのわからないことをする、ただし……

あなたはきっと、わけのわからないようなことを、言う人ではありませんし、する人でもありません。ために僕がわけのわからないことを言いましょう。「ペペロンチーノは水道水、アメリカは時間が行く、サルサ！」。このとおり、わけがわかりません。

ではあなたに、わけのわからないことを言ってもらいたいと思います。……と、僕はこのことを、実際によくお願いするのですが、この「わけのわからないことを言う」というのを、理屈ではわかっても、実際にできない人が多いです。ものすごく多い。

なぜこんなことができないわけがあるのでしょうか。「エネルギーッシュ、ストンピング、ホールド！ イナフ！」。こんなこと世界で一番簡単なはずです。

が、実際には出来ないのです。「そりゃ出来るよ」「出来るに決まっている」と、思い込んでいるだけで、ひとりでこっそりなら呟くことができたとしても、目の前で「わけのわからないことを言って」と言われると、本当に人は、このことができません。

ちなみに、僕がこのことを知ったのも、最近で、「ふつう出来ないことなんだ」と知らされて、僕は心底びっくりしたのですが……僕は生まれてこの方こんなことに難しさを覚えたことがないものですから。僕はやれと言われたら無限にできます。本来、当たり前のことですが。

改めて申し上げますと、この「わけのわからないことを言う」ということには、実は一種のコツがあります。自意識の媒介する前に言葉を選んでしまうことです。とにかく言うてしまうことです。別に何の言葉でもよいでしょう？ いちいち立ち止まらず、いちいち、結果や査定を求めたりせず……

自意識が媒介すると、自意識は脈絡の機能にこだわりますので、わけのわからないことが言えなくなります。少しコツをお教えますと、どうしてもできないという人は、両手をぐるぐる、無意味にデタラメに振り回してみてください。振り回しながらトライしてみる。そうすると、少し糸口が掴めるかもしれない。

「わけがわからない」というのは、案外重要なことです。「わけがわかってしまう」というのは、すでに自意識がその認識を終えたということですから。「わけがわからない」というのは、その認識が終わってしまう前に、ということになります。

このことが、意外に出来ない人が多いというのは、認識が終わってしまう前に動くという体験があまりに無さ過ぎるからだと思います。

あなたはわけのわからないことを言うべきですし、するべきです。自意識がその「わけがわかってしまう」を完了させてしまう前に。そのことを続けていたら、わけのわからない人になるか……というと、そうでもありません。なぜなら、あなたの自意識が監督しなくても、脳の側が成長して、脳なりに全体的な脈絡を持った何かを言うようになりますし、何かをするようになるからです。実際に、自分の脳が勝手にそれをするのを、自意識が遅れて眺め、自意識が「へえ」と"感心"することさえ、少なからずあるのです。

あなたはそのようにして、脳の側にはたらかせ、脳を鍛えていくべきですが、ただし……

ただし、「わけがわからない」といって、残念ながらしばしば見かける、単に奇抜なだけの人、単に珍妙なだけの人になってしまっただけはいけません。そういうのは、「よし奇抜だ」「これは珍しいもののはずだ」と、十分認識してから動いています。ですから脳のはたらきが現れているわけではないのです。

そして、「わけがわからない」といって、それは「脳にも見えていない」わけではありません。脳には見えているが、自意識が認識する前に動いているというだけです。もし、自意識にも脳にも把握されていない、ひたすらのメチャクチャが良いというのであれば、言い方は気が引けますが、認知症の支離滅裂でもよいのではないのでしょうか。

「わけのわからないこと」というのは、感情的に破裂したものでなければ、ポカーンと呆けたものでも

ありません。それが何であるかは脳にはハッキリ見えているものです。それは焦りや気ぜわしさのない穏やかな遊びの営みです。あなたに"余裕がなく"、"落ち着いておらず"、"気持ちが激しい"というときは、あなたは脳の営みなどしていないのだと、覚えておいてください。

許

しあわれる空間を持つ、ただし……

脳の営みは、自意識の営みに比べて、「わけがわからない」という時点から振る舞いを起こし、そのぶん、危険を伴うものです。ですからそれは、商用の会議室などでは出現してよい振る舞いではありません。商用の場ではそのようなことは一般に許されていません。

ですから、言い換えてみれば、あなたにはそのような脳の営みが（またそのトライアルが）、許しあわれる場が必要です。その中で、わけのわからないだけでなく、チョンボや未熟も出るでしょうから、それはきっちり叱られるものの、全体として許しあわれているという空間が要るのです。あなたはその中で脳を鍛えることができますし、脳の営みを持つということ自体を体験できます。ただし……

ただし、許しあわれる空間というのは、その中で自意識でノロノロやっていることを、「まあいいじゃないか」「頑張ってるもの」と、大目に見る空間ということではありません。それは許すところがずれていきます。許しあわれるというのは、「ノロマめ」と言いあっても、そのことにいちいち目くじらを立てない、傷ついたりしない、という空間です。「許しあわれて」いるのであれば、ノロマめ、と言うことぐらい許されねば、それは許しあっているとはとても言えません。

あなたが、脳の人を見つけ、会うだけでなく、もしその「集団」を見つけ、その中に飛び込んで、"圧倒"されつつ「ノロマめ」と言われ、それでも喰らいついて汗を流してゆけるのならば、それはあなたにとって最大の幸福です。あなたの一生を作るかけがえのない土台の場所になるでしょう。

利

得を諦めること、ただし……

人を傷つけないという心がけは立派です。立派で、善良に思えます。が、どうでしょう。もし心無い一言をこぼしてしまい、傷つけてしまったのなら、その瞬間、死ぬ気で謝れば済むことではないですか？ 確かに、言ってしまったら取り返しのつかないことがあります。が、そんな一言は、生涯にそう多く出現しないものです。言ってしまった瞬間ごとに、本気で頭を下げて、心の底から詫げる、そうすることでなお「取り返しがつかない」などということは、そうしょっちゅうあるでしょうか。

「人を傷つけない」は、多くの場合、単に「失敗したくない」というだけのことを、自分に美化しているだけであたりします。そのことの是非はどうでもよいですが、いちいちについて、「これは人を傷つけるのではないだろうか」「悪く思われたいだろうか」「空気を読んでいないのではないだろうか」と、認識して確かめているようでは、いつまでたっても脳の営みなどできません。安全・安心であれば脳の営みではないということ、危険が無いなら脳の営みではないというのはこのことです。

もちろん、まだ鍛えられていない脳では、自意識の確認チェックをしないまま素通りさせると、とんでもないチョンボもすることがあります。ですが、それは脳の鍛錬が未熟で、やってしまった失敗なので、その途端、頭をがつつり下げてお詫びすればよいだけです。自分の未熟で失敗したものは自分で詫げるしかあり

ません。そしてその失敗があるからといって、脳を引っ込めては元の木阿弥ですし、そんなことを繰り返していたら、いつまでたってもその鍛錬が得られません。またそうして誠心誠意で詫びれば事が済むように、根本的に許しあわれている空間が必要だということなのでした。許しあわれていない空間に飛び込むのは、十分な鍛錬を経てからになります。

「人を傷つけない」うんぬんも含めて。あなたは"利得を捨てる"という決断をしなくてはなりません。悪く思われたくないであるとか、恥を掻きたくないであるとか。それらは全て、自分にとっての利得を勘案しているものです。この利得にこだわるならば、振る舞いの全ては自意識で入念に確認させてからスタートさせるべきです。商用の見積書を何度もチェックしてから発送することのように。

あなたは利得を捨てねばなりません。これは後になって、あなたも知られることだと思いますが、利得が本当に必要ないのであれば、自意識の出番はないのです。自意識というのは必ず、何かしらの「都合」のためにでしゃばるものに過ぎませんから。ただし……

ただし、"利得を捨てる"というのは、これ自体が、価値観的に美しいもののように聞こえてしまいます。ですが、これを美しいと感じ、喜んでしまっているようでは、このこと自体が利得になってしまい、本末転倒です。"利得を捨てる"というのはつまり、「自分はクソでかまわない」ということです。「かまわない」ということは、構わない、ということですから、クソであることにこだわるというわけでもない。クソであってなくても、かまわない、ということ。かまっていられない、と言えばよいでしょうか。

脳と自意識の、時間軸上の位置を見れば、そういった「利得」や「クソ」も、「置き去りにする」という感覚が正しいと言えます。置き去りにするというのは、まったく「構わずにいく」ということになりますね。



イメージ

イメージを持たない、ただし……

「イメージ」という語についてお話しします。「イメージ」というのは、自意識の機能によって起こるものです。脳の機能ではありません。このことは最も誤解されています。何度でも申し上げておこうと思います。「イメージというのは自意識の機能」です。

たとえばこう申し上げてみましょう。「パリ」「ロンドン」「ローマ」「ニューヨーク」「上海」、こう言ってみたとき、あなたはそのそれぞれに、すでに豊富な「イメージ」を持っているではありませんか。たとえそこに行ったことがなかったとしても。

行ったことはなくても、映像で見たことがあるから……と、あなたは言われるかもしれない。では、あなたが生まれ育った町であるとか、今暮らしている町であるとかはどうでしょうか。きっとそこには「イメージ」というのが無いと思います。それは、あなたが「体験」した町ですので、いちいち自意識のイメージで捉えなおす必要が無いのです。あなたは友人の母親について「イメージ」を持っているかもしれませんが。これまでに聞かされた話などから。けれどもあなたは、自分の母親について「イメージ」なんて持っていません。

イメージというのは自意識の機能なのです。たとえば「イチゴ」という果物の名前を置きます。するとあなたはそれを、写真かイラストのような、イチゴの「映像」に、あなたの中で変換されたかもしれませんが、その映像がまさに「イメージ」です。逆にあなたがイチゴを食べているときに、「イチゴのイメージを持ってください」と言いましょ。それはあなたにとって「よくわからない」話になるはず。脳がイチゴを「体験」しているとき、イチゴのイメージは要らないし、要らないどころか描くことさえやりにくいからです。

少し専門的な話をするとこうです。作品は「体験」を与えると申し上げました。たとえば、三島由紀夫の

「金閣寺」を読んだとき、想像力のうちに描かれる「金閣寺」というものを、読み手は体験します。こうして想像力に描かれるものは、イメージでもイマジネーションでもなく、イマジネールと言います。イマジネールは想像力であり「体験」なのですが、「イメージ」のほうはただの「空想」です。もっと正確に言えば、自意識に習慣的に染み付いたイメージというものを、むしろ歪形化してゆくときに体験されるのがイマジネールであり、想像力は自意識に染み付いた習慣を洗い直し、本来の精神機構に「体験」を取り戻させる作用を持ちます。幼児にクレパスを渡すと、たいへん芸術的な絵を描くことがよく知られていますね。それは、彼らがまだ、自意識に習慣的なイメージを染み付かせていないので、イマジネールが直接描き出されて、そのまま芸術的な描画となります。ところがある程度の年齢になると、自意識に染み付いた「イメージ」を描画するようになるので、絵は自意識に「わかりやすく」はなるのですが、芸術性を失うのでした。これはごく単純に言えば、幼児は脳でしか絵が描けないのに対し、思春期以降は自意識の「イメージ」を描くようになるということです。

もちろんこの専門的な話を、あなたが隅々まで理解する必要はありません。あなたはただ、イメージは空想であり「自意識の産物」「自意識の習慣の産物」でしかないということだけ、知ってゆかれればよいと思います。イチゴといわれてその映像を思い浮かべる、そのイメージ映像は、実は映像化した「記号」に過ぎず、脳の体験としての滋養を持っていません。一時期、右脳とか左脳とか言われるブームがあり、その中で「イメージ」が礼賛される時期がありました。けれども「イメージ」は陳腐なものであり、人間の脳に雄大な作用など持っていませんから、あなたはこのことを正しく理解されてください。イメージは持っていないほうがむしろよいものです。ただの習慣の思い込みなのでから……あなたは目にする芸能人の全てに「イメージ」を持っていると思いますが、その誰とも親しくありません。我々がメディアや舞台を通して「脳」で出会えるとしたら、芸能人ではなくその彼らが持つ「芸」のほうです。僕だって先のパティ・リッチと親しかったわけではありません。彼の「芸」に出会えたというだけです。

あなたはイメージを持ってはいけません。ましてそれを礼賛するように駆使するなんてもってのほかです。ただし……

ただし、イメージを持つなと言っても、すでに持っているというのが前提です。持っているどころか、もう全てのことに張り付いてはびこり、深々と根を下ろしているといつてよいでしょう。まずはそうして自分がイメージにすっかり支配されていることに気づくことが必要です。

「現代と恋愛」という話をしてきましたが、「恋愛」といって、そこにイメージを持っていない人などいるのでしょうか。じゃあセックスといつて、あるいは結婚といつて、そこにイメージを持たない人はいるのでしょうか。そんな人は皆無だと言うべきです。恋愛というヒューといい、セックスというキヤーといい、結婚というオメドトウという、イメージのコンクリートに空高くまで固められて、われわれは暮らしているのが実情です。あなたはその恋愛のイメージを追う限り、そこによるこびなど得ることはありません。よろこびがある、ような気がしているのは、さんざんそういうイメージを埋め込まれてきたからに過ぎないのです。あなたはそのイメージを追わず、なるべくイメージから逃れた、直接の「体験」をしてください。

現 代は陶酔の時代だ、ただし……

最後に、奇妙なことを申し上げておきます。こう申し上げることが、正しいかどうか、僕にも自信がありません。

現代は自意識の時代です。これは間違いありません。自意識にはよろこびがないのですから、陶酔式など代替にアテにするのは結局のところ間違いです。ただし……

ただし、現代、つまり、われわれが実際その中に生きているのであれば、それから眼を背けるのも、どこ

か間違っているのでは、と感じます。現代、われわれの空間が事実としてそうなのであれば、ひょっとしたらわれわれは、その陶酔と、陶酔式というものも、まとめて引き受けていかねばならないかもしれません。つまり、陶酔と、その陶酔式まで、食い散らかしてやると。

そのことまで含めて、自分は誰かと共に、よろこびに到達してみせる、と、そう受けて立たなければ、卑怯なのではないかと、僕はどこかで感じている気がします。まだ僕自身、よくわからないところもあるのですが。

利得を捨てるというならば、よろこびまで一緒に捨てればいい。脳が全体的情報のみを受け取るというのならば、その陶酔式というのも、よろこびと区別して捉えることはない。そこまでゆかねばきつと、本当のことにはならないのでしょうか。これは講義の趣旨からは逸脱しますので、講義の中ではあえて排除してお話しせずになりました。が、もう最後なので、一応お話ししておきます。このお話しからの先はもう、僕は講義をする側の人間ではありません。講義をする側される側とか、僕とあなたとかいう分化の捉え方も、最終的には自意識の、クソクラエなのだろうなと思っています。まさにもう「講義」ではなくなりますね。僕なりの何かの意地でお話ししたこの部分は、講義としては忘れてしまってください。今役に立つことではこれはない。

お疲れ様でした。これで全ての講義が終了です。

あ
とがき、ということにいたしましょう。

僕は、柄ではないですが、正直に言うと、人が幸福でいるところを見るのが好きです。友人とであれ、恋人とであれ、よろこびの時間を人が過ごされているとき、はっとなり、思わず道を譲りたく感じます。そして出来る限りの時間、それが何者にも侵されることのないようにと、自然に願われてなりません。僕はこうした話の一本についても、ただ僕が僕の趣味のようなものを、淡々と話しているのであって、ここに芝居がかった美的共感をムズムズ起こされる方がいらっしやらないことを願っています。僕はそうして騒がしくなるのが好きではありません。好きではないだけでなく、それは間違っていると感じています。「こんな当たり前のことにガタガタ言うなババア」と言えばよいのでしょうか。普段はそういう言い方をしています。言い方がひどいでしょうか。わかりやすいかと思ってですが、本当には、言い方などどうでもよいことです。

僕は自分の声が人の脳に届くことは当然うれしく感じますが、自意識に反応を起こされることには、うれしさを覚えません。もちろん、悪いことだとは思わないですし、なんであれ感激のメールをいただけるようなことがあると、それはありがたく、心あるものとして当然受け取っています。なんであれ、僕が語ろうとするのを、心を傾けて聞き遂げようとしてくれる方がいらっしやったわけですから、それはありがたいことです。

ですが、そこには同時に、一々の焦りもあったのでした。言葉が自意識に回って焼けつきを起こすのは、感動とよろこびではないのに、と。その人の生きていく力の鍛え上げにはなってゆかないのに、と。僕が気を回すのはいかにも大きな世話なのですが、品性の程度はともかく、そういう焦りを覚えます。「そんなひ弱なブルブル感動なんかしてないで、それよりダチに酒でもおごってこい、ありえないぐらい笑わせてこい」とでも言えばよいのでしょうか。やはり言い方がひどいという気がします……それでもやはり言い方なんか問題ではない。僕は人が幸福でいるのを見るのが好きです。それも、今回お話しした言い方で言うと、

脳と脳とで、よろこびと鍛えあいをやっている、そうして強くなってゆき、輝くようになっていっている、というところを、見るのが好きです。うらやましくて胸が痛くなるほど好きです。その「好き」というのは、僕自身がお礼や感謝や感激を言われることのうれしさを、正直なところ上回るのです。ですから僕はお礼の声をいただきたいのでは本当はない。幸福です、か、幸福にゆけます、というあたりの、「言い方がひどくても"けっこう"ですので、そちらの声が聞こえたほうが、本当はうれしい。「おっ、こいつ脳がイキはじめてやがるぜ」という、その断片を伺って、つい吹き出してしまうものがある、と、そういうもののほうが好きで、また、そういうもののほうが、正しいのだと感じています。

そして、その正しいもののほうを、現代という時代が、人々から奪ってしまうのだとすれば、それはとても見過ごせないという、気分には、さしあたりなります。現代が人々からそれを奪うというのはシリアスでしょうか？ 僕はこの続きに「ふざけんなくだらん」というひどい言い方を続けます。「なんだその、芝居っ気たっぷり、シリアス大好きです、みたいなものは」と。「テメーの脳が壊死してるというだけのことを、拡大して陶酔オナニーの材料にするのかスゲエなお前」と。だって実際にお話したのは、「テメーの脳はポンコツ」という一点張りなのです。ただ、そのようにお話ししては、役に立つかといえば立たないので、精密に順序だててお話ししました。何も見失うようなところや、陶酔に巻き込まれるようなところは無いはずで、自前の脳をポンコツ呼ばわりされて陶酔したらさすがにおかしいです。何か勝手に別のストーリーを作ってやがんな、と……さすがに言い方のひどさが続くので、そろそろ控えましょう。

夏は夜、と言います。まったくだ、と思います。その夏の夜に、美しい少女が、まだ慣れない恋人と幸福そうに歩いている。そこにあるかわいらしい笑顔を見ると、何も問題はない、全てのことは上手くいっている、という気がしてきます。僕自身、瞬間的に、そう思ってしまいます。そう信じたがっているのでしょうか。単純に、少女の愛らしさに浮かされてしまっているだけかもしれません。ですが——だからこそ——今回のこの話は徹底して申し上げる必要がありました。「まったく信じがたい」ことに、そうして幸福に愛らしく見える少女が、そのままではまずいほうへ引き込まれていくということなのです。いや正確には、もう十分に引き込まれはじめています。そのことはまったく見つけづらい。思春期というのは、誰が考えたって、陶酔とよろこびが混在していることこそが、むしろ健全な状態です。それは誰も手出しできない、青春の特権です。ですがそれは同時に、ある切なさを受け止め、今後の準備をしていく期間でもありました。つまり、本来は、僕が講義などしなくても、その時期に誰もが知っていくことだった。「自意識じゃだめなんだ」「これは陶酔でしかないんだ」と、誰もが体験で知っていったのです。今、この準備期間が機能しておらず、準備期間を経たはずが、出てきたら、むしろ自意識と陶酔のほうに偏りが増している、という状態になっている。「あんなに愛らしかった少女が」というような感想を、僕は決して持ちたくありません。それで、時代が変質して抜け落ちてしまったところを、僕が一方的にお話しするとして、このような形式を採りました。思春期を越えて大人になるはずが、より子供っぽくなって出てきてどうしますか。営みを通じて、脳が強くなり自意識が縮小されるはずが、自意識が膨張して脳が弱くなる、と、そうして出てきてしまってどうしますか。

美しい少女も、少女ですから、ときにはよろこびで涙を流し、ときには自意識の焼けつきで涙を流すでしょう。それが、やがて美しい女になり、自意識の焼けつきで流す涙のほうは浄化されてしまった、ますます美しい涙ばかり流す女になった、と、そうなったとき、誰に何の異存があるのでしょうか。その誰も異存の無い中、彼女がなんでもなく呼吸だけしている、その呼吸だけでももう恋あいです。そういった厳然たる当然のところから、現代は遠く離れすぎてきました。

では、そんなわけで、長い話に付き合ってください、ありがとうございました。脳と脳とで……というのは、楽しいことです。よろこび、と、言わなくても、勝手によろこびがあります。この講義集を、何度か繰り返し読み込む、あるいはいくつかの箇所をメモにピックアップするにしても、それにしてもまた繰り返して通して読んでみるということは、あなたにとって損にはなりません。そのようになるだけ、実は慎重に書き進めて参りました。あなたはどうぞ忘れず。読んだことを忘れるのは人間の常です。忘れてよいのですが、それは脳とよろこびの実際が手に入ってからにしてください。僕自身きつと、自分でしたこの「講

義」を、また自分のために読み返すときが来るのだろうか、それもけっこう必死でな、と、予感しています。
それではごきげんよう。

2013年7月19日

九折 空也